
鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

黒縁眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハガネノシキカン
鋼鉄の指揮官

【Nコード】

N4762Z

【作者名】

黒縁眼鏡

【あらすじ】

若くしてとある空軍基地に司令として派遣された男のストーリー。SFロボットアクション物の定番であるパイロットが主人公ではなく、指揮官として戦略・戦術を駆使して敵との戦闘を繰り広げていく。

エースパイロットでも無い彼を英雄と呼ぶ物はいないだろう。彼より輝かしい功績を残した者は多くいる。

ただ、彼がいなければその功績は無かったかも知れない。

部隊の裏役者として戦っていく彼の知謀を楽しんでください。

登場人物（前書き）

登場キャラの簡単な紹介です。

登場人物

登場人物

坂本竜^{サカモトリュウ}：階級大佐・年齢28

世界初の人型兵器マップス試験用特殊部隊出身。初期マップス適合者の中に士官学校出が彼一人だったため、異例の若さで基地指令に赴任する。

田口修造^{タケチシュウゾウ}：階級軍曹・年齢25

第二世代型マップスの元テストパイロット。現役パイロットを続けながら教官としてパイロット候補生の指導にあたっている。

整備のオヤジ：整備主任・年齢43

主人公のパイロット時代から整備を担当していた。ガレージの力リスマ

ガンドック小隊：近接攻撃と連携が得意な若い正規パイロットの集まった小隊。部隊内はいつも騒がしい。

ガンドック1：犬塚剣^{イヌツカケン}・階級中尉・年齢25

ガンドック小隊の隊長。騒がしい部隊を上手くまとめている。

ガンドック2：吉田理恵^{ヨシタリエ}・階級：少尉・年齢22

ガンドック小隊の副隊長。少し小言が多く理屈っぽい。同じ部隊の高井則良とはライバル関係。

ガンドック3：小山静^{コヤマシズカ}・階級准尉・年齢20

いつも無表情で声に抑揚が少ないと言われている。

ガンドック4：高井則良^{タカイノリヨシ}・階級准尉・年齢20

お調子者だが、戦闘中の命令にはしっかりと従う。吉田との勝負は負けが多い。

ガンドック5：石山慎治^{イシヤマシンジ}・階級准尉・年齢20

冷静なスナイパー。冷静過ぎて気付かないこともあるとか。

徳川大佐：オーカシス陸軍基地司令官・年齢49

ほりの深い渋いダンディーなオジサマ。軍による首都警備の第一人者
毛利大佐：カシゴマ海軍基地司令官・年齢50
老狐と称される強面なオジサマ。首都警備の応援に参加する。

ミヤノシゲル
宮野茂：ヤポネ軍空軍大将・年齢60

坂本大佐のパイロット時代からの上官。眼鏡のおかげで極めて真面目に見える方だが、かなりの破天荒オヤジ。定年は65なのだが、特別顧問として残るつもりでいるらしい。

陸軍大将と海軍大将：年齢59と58

警備について確認をとるために空軍大将の宮野とともに打ち合わせに参加。空軍大将と合わせて軍の三大トップ。三人の仲は結構良い。

警察庁長官・年齢56

国際会議中は建築物、市民、首脳と守るものが多くて苦勞する警察トップ。毎回警備が大変なので、そろそろ胃潰瘍にでもなるのではないかと心配中。

スミカワ サチエ
澄川早苗：中央司令部情報解析班に所属・年齢26

坂本のパイロット時代の同僚。音にとっても敏感で、声の調子から人の感情を予測することが出来る。

序章：コーヒー&ワールドニユース

序章「コーヒー&ワールドニユース」

「本部、こちらゴースト1。作戦通り敵戦車部隊を撃破する」
本部に作戦行動を開始することを伝える。

「こちら本部。了解した。新型の実力見せてみる」

「ゴースト1。こちらオペレータースミカワの澄川です。情報のバックアップは任せてください」

「了解。ミッション（フェアリー・フロム・ファンタジー）スタート」

フェアリー、妖精という可愛らしい名前がついている作戦名だが、敵にとってはそのような生やさしいものではない。

わずか数分で戦車小隊を撃破されたと思ったら、他に展開している部隊が撃破されている。

敵指揮官にとっては悪夢にしか思えない光景が広がる。

撃破される直前の通信により謎の新兵器による攻撃が来ることは分かっているが、いったい何に攻撃されているか全く分からない。

「敵さんかなり混乱してるんじゃないか？」

ゴースト2が楽しそうに通信を入れる。

「フフ、ボクの自慢の娘だよ？ これくらい出来て当たり前だね」

ゴースト5が興奮気味に機体について応答を返す。

「ああ、本当にこれは凄いな。戦車とか戦闘ヘリとか比にならないくらい使いやすいぜ」

作戦に参加している仲間が全員感嘆の声をあげている。

そして私もこの数分の間で、機体のすごさを実感している。

士官学校出たての新尉官が歴戦の敵部隊を次々に撃破していく。

10機による一中隊で敵一大隊を全滅させた。

こんなあり得ない戦果が、私が最初にあげた功績だった。

おとぎ話やゲームからやってきた幻の存在。
誰もが子供の頃に憧れた作り物。

人型兵器コードネーム：ゴースト

敵がこちらにつけたコードネームも、その名の通り（ゴースト）だった。

辞令

新型兵器実戦試験用特殊部隊「ゴースト」

部隊長坂本竜中尉

貴官を来月付けでヤポネ国キーナ空軍基地司令官として任命する。
それにあたり階級を大佐に昇進とする。

この辞令から私の生活は一変する。

軍上層部から辞令を受け取るまで、私は20歳から26歳までパイロットとして国境付近や紛争地域での介入など各地を転戦してきたが、今はヤポネ南方キーナ空軍基地司令官として転属して2年が過ぎた。

この2年でようやくパイロットではなく、管理者としての仕事にも慣れてきた。

顔を洗い、身なりをただす。鏡に映るのは身長170cmで筋肉質のしまった身体をしている男性。髭は剃っており、髪型は清潔感のある短髪で、眼はどちらかという垂れ目だ。実年齢より若く見られることがそこそこある。正直司令官としての威厳ある顔とはかけ離れていると思う。

軽く朝食を済ませ、コーヒー片手に端末を立ち上げる。おはようございます。と機械音声が流れ、カレンダーに記録されたスケジュールのチェックから始まる。

「さて、今日の仕事は」

- ・パイロット候補生の模擬戦0900
- ・国境資源会議警備の打ち合わせ1400
- ・各種基地報告書の作成。

「ふむ、また国境資源会議か。今度のもう五回目になるな」

軍人が政治や外交に口出しをするのは厳禁なのだが、1ヤポネの国民としても大変気になる問題だ。10年前、ヤポネ発の新エネルギー革命の核となった技術。物質の持つ全てのエネルギーを自由自在に変換させるエネルギー自由変換粒子通称「FTE(Free Transferring Energy)粒子」の発見。そして粒子生産機器に必要な特殊金属「FTE鉱石」の発見。これは人類にとって最大の発見であり、化石燃料に頼りきったエネルギー政策は全て過去の物となった。

しかし、これほどまでに世界を変えた資源の分布が極端に偏っていたのが、今この時にも続いている問題の原因となった。

ヤポネに大部分の鉱脈が存在しているのだが、その内の一つがよりにもよって、高い軍事力を持つ大国レトリア連邦に隣接している。

「北の国境警備の連中はさぞかし頭が痛いだろうな」

北の基地の方が設備や待遇が良いのは士気を保つのと、威嚇による抑止力政策なのだろう。ただ、いつ砲撃が来るかも分からない所で大勢いる隊員の命を預かる気苦労は想像もつかない。そんなところに派遣されなくて良かった。

「こちらから攻めに行くわけにはいかないしな。一体いつこの騒ぎが収まるのやら」

ため息を一つしてからニュースサイトを立ち上げる。トップニュースはやはり会議についてで、世間的にも大きな関心事になっているようだ。ヤポネは鉱脈の発見により資源輸入国から一気に資源産出国に変化し、国の経済は大変潤った。それも、単なる資源輸出ではなく、粒子制御に関わる数々の特許や機器そしてインフラ整備という形での輸出を国として支援、その結果価格設定などの面で非常に強い力を持ち世界経済の中で大きな力を得た。

この裏には政治的介入でFTE関連の研究を世界に公表させず、技術の確立と鉱脈の確保が出来てから電撃発表したため、完全に技術リースで独走状態となったのがその原因の一つ。

また、エネルギー変換効率の大幅増加による生産コストの削減、膨大な電力を消費して、農業における高度機械化による生産の安定化、住宅環境の改善など企業や個人の生活に大きな変化をもたらした。それだけに国民の関心は高く、政府側も一度上がった経済レベルを下げることに繋がる採掘権の一部譲渡や領土の割譲は選挙のために出来るはずが無かった。

そのため、これまでの会議では一步も譲らず、レトリア連邦との議論は平行線に終わっていた。

そんな現状で会議を催す理由としては、この数年で軍事演習と称して時折国境付近にレトリア軍が展開することがあり、実際に何度か戦闘があつた。

そして、本格的な軍事衝突を阻止するために三年前から催された会議なのだが、未だに会議の前後で軍を展開されるので、我々軍人も会議前後の期間は非常に緊張する。

「そもそもレトリア連邦の方には鉱脈が1kmも続いていない上に、大した埋蔵量もない状況で、レトリア連邦の国家的財産であるFTE資源をヤポネに侵害されている。という主張はふざけているのだが。新エネルギー革命以降のことを考えれば、この暴論を持ち出す理由も分からなくも無いのだが迷惑な話だ」

レトリア連邦はもともと化石燃料の産出国として、化石燃料とそれに付随する工業商品が産業の割合として高かった国だったのだ。

しかし、FTE技術の普及により大きな経済的ダメージを受けて、財政が次第に悪化していった結果、このような主張をするようになったと分析されている。

「色々と変わったからな。何か明るいニュースはあるかな？」

残りのトピックも時間が許す限り確認していった。特に大きな事件もないようで、経済では首都と郊外の地価が連続で上昇中とか、企

業の新製品発表だとか景気の良い話が掲載されていて、芸能やスポーツ関係の記事も多く掲載されている。今日も当たり前前の平和が続いているようだ。

芸能人のゴシップ話でコメント欄が盛り上がるのは国民に余裕のある証拠だろう。

「さてと、パイロット候補生の模擬線はまずガレージだったな」
空いたコーヒーカップを洗い、乾燥棚において個室を後にする。

第一章「機械の身体」

第一章「機械の身体」

将校用の個室からガレージに向かう途中教官を務める田口軍曹を見つけた。身長は185cmと高く、黒い髪のショートモヒカンがあるせいで、もう少し高く見える。

日に焼けた黒い肌と服越しにも分かる筋肉をしている彼はなかなかの威圧感がある。

こちらに気付くと敬礼とともに威勢の良い挨拶をしてきた。

「おはようございます大佐殿。お早いですね」

この少ししゃがれた声が怒鳴り声になるとたちまち訓練名物の鬼軍曹怒りの怒号となる。場合によっては怒りと愛の鉄拳付きだ。

「おはよう田口軍曹。今年のルーキー達は使えそうか？」

「肯定です大佐殿。皆輝く物を持っています。それぞれの特性にあった配備をすれば悪くない戦力となるでしょう」

「なるほど。君がそういうなら今日の模擬戦が楽しみだな。」

この日の訓練は正式に配備されている小隊との模擬戦である。1対1の戦闘ではなく、基地防衛側と攻略側に分かれての実戦形式で戦闘を行う形式だ。

ちなみにこの基地では毎回こうした模擬戦で賭けが行われている。

偉い人は怒りそうだが、戦闘の条件から勝利する方を選ぶのは戦術と戦略を学ぶ良い教材となるのだ。

教育にはムチと飴がなくてはならない。そのムチと飴にあたるのが賭けの結果ということだ。ちなみに模擬戦参加者にはハンドエの条件が知らされていない。

「昨日の段階でレートは候補生が四倍でガンドッグが二倍です。ちなみに私は候補生に賭けました。彼らならやってくれます」

鬼軍曹と候補生から恐れられる者の口から出る言葉とは思えず、笑ってしまった。普段しごかれている候補生達が聞いたら、さぞ驚く

のではないだろうか。「まったく。君が鬼軍曹と呼ばれているのが信じられない発言だな。今日の相手はガンドッグ小隊だろ。現役パイロットから見て候補生がガンドッグお得意の近接連携にかなうと思うか？」

田口軍曹はニヤリと笑い答えた。

「彼らが死なないためにだったら鬼でも悪魔でもなつてやりますよ。もちろん個人の力は劣っているでしょうが、候補生にも連携と複数戦闘の捌き方は叩き込んでありますし、今回はハンデとして候補生を防衛側で指揮官あり、さらに数はガンドッグの二倍。指揮官も大佐殿と来れば勝てる見込みもあるでしょう」

候補生の実力を冷静に分析し、戦闘の条件も加味しての判断だった。単純に熱いだけではなく、冷静さも持っている彼ならこの先も教育を任せられそうだ。

候補生達は弱点や欠点を毎日のように突かれ怒鳴られて大変なのだが、戦場で生き残るために訓練をしているのでそこは我慢してもらおう。

ただ、そんな鬼軍曹の元で訓練している候補生達だ。ちょっとした褒美があつても良いだろう。一つ軍曹に提案をする。

「軍曹。そこまで言うなら賭けに勝つたらあいつらに飯でもおごつてやれ」

苦笑いをしながら軍曹は了解した。

彼の感情は分からないが多分こう思っているのだろう。

(恥ずかしいから勘弁してくれ)と。

この後もガレージにつくまで候補生について語っていた彼の顔は実に良い顔をしていた。私は小学校や中学校の頃、熱血教師の良さが分からなかった。

部活動はさんざんな目にあつた記憶しかない。

ただ軍曹を見ていると、もしかしたら彼らもこの軍曹と同じように裏ではにこやかに笑っていたのかも知れないと思えてくる。

私が目指すべきリーダーとはどのような物かまだ正直分からない。

軍曹のような熱血教師風のリーダーも確かにありだとは思うが、多分それは6000人を超える人間が集まる空軍基地トップの姿では無いような気がする。

まだまだ至らない所も多いが、精進していこう。軍曹の話聞きながらそう心に誓った。

ガレージ入り口にて田口軍曹と別れ、模擬戦用に整備されている人型兵器を見上げていた。高さは4m一般的な2階建ての一軒家ほどだ。

「多武装携行システム」「Mulch Arms Portable System」または略して「マップス」と呼ばれる。

この人型兵器は、FTE粒子の制御技術を最大限に活用した兵器である。

重力・光・電気・運動・位置・熱・質量などエネルギーを目的にあわせて変換することにより動力を得ることが出来る。

従来のエンジンではガソリンの爆発を利用しての運動から車輪を回したり、燃料の燃焼と噴射による反作用から推進力を得ていたのだが、FTE粒子の制御を行うと重力のベクトルを真下ではなく真横に運動エネルギーとして変換したり、移動により生じる摩擦を電気エネルギーに変換して機体に貯めることも理論上出来る。

このような各種エネルギーの自由変換により機体の機動性が各段に向上すると考えられた。

その理論の元、いくつかの試作機が作られたが、操作が当初想定していた物より煩雑となり、脳波によるサポートコントロールが必要となった。

そこで人が拳動をイメージしやすい人型として機体開発が行われたと教科書的には書かれているが、開発者の一人を知っている私は、技術者たちの趣味でこうなったように思える。

この国の技術者はどうにも変態が多いので、やりたいことをやりたいうようにやった結果人型になったのではないか。

開発者の一人から

「人型の方がかつこいいでしょ？」

と言われた時は思わず吹き出したものだ。

ただこの選択は当初予定していた以上に効果的で、開発を進めていく中、人型兵器が持つ従来兵器とは違った特性が、兵器としての重要性を向上させ、秘密裏の開発ながら予算が潤沢に出たそうだった。

マップス最大の特徴は手があることだ。

手をつけることにより武装変更が持ち替えだけで済み、機体に搭乗したまま単独で出来る。さらに肩や脚部や腰部にハードポイントを設け多様な武装を携行可能になった上、武器格納用バックパック等の追加装備によりあらゆる状況に対処出来る能力の高さが従来兵器に比べ格段に向上していた。

ヤポネではそれまで経済的に多くの兵器を所持、維持するのは難しく、一機で複数の目的に使える兵器が非常に魅力的だったのだ。制空権の確保から地上の制圧まで幅広く運用が可能な兵器は喉から手が出るほどだった。

初めて実戦に投入された際に得られた機体評価は、飛行機より機動性が高く、ヘリコプターより小回りが効き、戦車よりも制圧力が高い。武器の変更による状況対処能力は歩兵並みで、武装さえ用意しているならあらゆる状況に対処が可能性である最強の現代兵器とうたわれた。

今では世界的に開発・販売メーカーが増加し、現在では大国に1メーカーは存在する勢いで広がっている。

「マップスも随分と種類が増えたな」

ヤポネの元祖マップスメーカー「菱田重工」の初代マップス「ゴースト」に乗っていた者からすると、この第二世代型は何度見ても感慨深く誇らしく感じる。

当初は脳波コントロールだったせいもあり、適合者が少なかったが、我々の操縦データをもとにAIが開発され、戦闘データから各能力に個性を待たせた第二世代のフレームの開発が行われたのだ。

AIを触媒にしてパイロットとマップスの融合をコンセプトに開発された第二世代型は、更にパイロットに合わせた細かなカスタマイズまでも行えるようになった。

今一般に配備されているのがこの第二世代マップスで近距離、中距離、遠距離のどれかが得意なカスタマイズが出来る。

近距離型は装甲が少なめでスラツとしたシルエットをしていて、関節部分にあたる所々に小型の追加装甲がつけられている。逆に遠距離型は装甲が厚いためかガツチリとしているように見える。しばらく立っていたら後ろから元気の良い声がかかった。

「よお、坊主！ ああ、いや大将！ また乗りたくなかったか？」

日に焼けた170cmくらいの整備主任だ。頭の髪の毛が最近減り気味で悩んでいて、少し小太りだががっちりしている。そして大声で喋る豪快な人だ。

このオヤジさんなかなかのカリスマ性を持っていて、多くのパイロット達からオヤツサンと慕われている。

昔からの知り合いとは言え、私は一応上官なのだが、特に喋り方は変えてこないらしい。さすがに坊主は最近減ってきてはいる。その代わりに大将というのもいかな物かと思う。

だが、若くしてこんな地位に抜擢されてしまったので、最初は信頼関係とか色々大変だったところを、オヤツサンの昔の戦友ということで隊員たちの信頼を得られた。それに自分も前から世話になっているので、細かいことは大目に見ることにしているし、こちらもある程度碎けて喋られるので良しとする。

他の所から視察が入る時は気をつけてもらえば良いか。

「おはよう。オヤジさん。たまに懐かしさで乗りたくもなるが、さすがにブランクがあるのでな。現役には負けるだろう。しかも、最近のマップスは脳波コントロールが減って、AIによる補助で非常に操作性があがっているんだって？ それについていけるかわからんよ。それに残念ながら今の私は司令という立場だ。マップスに乗って前線で戦いながら全体指揮はとれないさ」

オヤジさんは豪快に笑ってきた。まるで分かりきった冗談が通じなかったのを隠すようだった。

「まっ、それなら仕方ない。気が変わったらいつでも言えよ。あんなの一言があればあつという間に整備してやるからよ。なんと云ってもあんたは初代マップス中隊の隊長だ」

それにしてもオヤジさんが話題を変える合図をする。

「マップス乗りも随分増えたよな。十年前までは大将含めて10人だったのが、今年はここだけで候補生が50人か。すごいもんだな」

「さつきも言つたように操作性が向上して誰でも使えるようになったからな。まあ、この基地が特別多いつてもあるんだが、上の連中かなりの数押し付けてきた」

「それだけ期待されてるんだろ。マップスの実戦経験がある佐官は大将だけなんだからよ」

「あの10人選ばれた上に士官学校出は私だけだったからな。ものすごい運だよ。おかげで白い眼で見られることもあるのがたまに傷だが、仕事の成果で見返せるように努力するしかない。私の成果にも繋がる新人を育成してくれる田口軍曹には感謝だな。私には基礎まで細かく教えられるほど暇がない。面倒な書類がこつも多いとは思わなかったよ。マップス乗りがする仕事じゃない」

やれやれと右手で頭を押さえて大げさに首を振る。

「心中察するぜ。ちなみにだ大将。今日の書類を追加しても構わないかい？ 菱田重工の松平の坊主からマップスの第三世代フレームが完成すると報告があつてな。採用出来るように申請書を頼むわ」とんでもないことを凄く軽く頼んできた。

この基地に新兵器の実験部隊を擁するので、他の基地に比べれば申請しやすいとは言え、去年初めて新しいライフルを申請した時は申請の許可が降りるまで一週間はかかった。

まあ、私の不手際がその原因の大半を占めていた気がするのには内緒だ。

申請書類以外にも集めるデータの量が多く、データを送る度に送信

許可の書類を書かされたのだ。

しかもその後のライフル返却手続きも同様に面倒だった。上層部がやっている正式採用の手続きに比べれば遥かにマシなのだろうが、新型機だとそれくらいかかるのだろう。

考えるだけで頭が痛くなりそうだが、将来の兵士達のためなら仕方ない。

「分かった。後で資料をこちらに送ってくれ。松平もかんでいるなら良い機体だろうしな」

松平というのは同じくゴースト隊にいた一人で、もともと菱田重工の開発者兼テストパイロットだったが、特殊部隊として徴収され共に戦った戦友だ。

彼によつて戦場で得られたデータから数多くの兵器が作り出されている。

大事な仕事も頼めたし、残りの時間で最終チェックをしてくると言い残してオヤジさんは整備に戻っていった。

「そのうち久しぶりに乗るのも悪くないかもな」

かの愛機と戦友のことを思い出し、口から漏れてしまった。

オヤジさんが整備に戻って行って良かつた

第二章「ブリーフィング」

第二章「ブリーフィング」

整備主任のオヤジさんと話していた間に候補生達がガレージ入り口に集合していた。

田口軍曹が点呼を取り模擬戦の心得を語っている。予定ではこの後各種機体のチェックを行いブリーフィングだ。その間に私は、相手をやるガンドック小隊に簡易ブリーフィングを行うことになっている。

集まっているガンドック小隊の前に立ち説明を始める。

「今日の訓練は候補生だけではなく、諸君らの訓練でもある。シチユエーションは通信障害下で対空迎撃を低空飛行でかいくぐってからの敵地潜入だ。作戦目標は基地防衛部隊の制圧およびジャミング設備の破壊である。なお、今作戦は事前に敵部隊の武装・数の判断がつかなかった場合を想定している。武装は対マップ用を装備し、施設破壊は同武装をもって作戦にあたれ。バックアップ無しの状態での戦闘だ。敵の場所・目的施設は機体に搭載されている光学レーダー・熱源探知のみで索敵しなくてはならない。このような制限条件下の作戦だ。諸君らには言うまでも無いが、部隊内の連携を戦闘行動だけでなく情報においても上手くやれ。以上だ。何か質問は？」

「ジャミング施設の破壊を先に行った場合、バックアップは回復するのでしょうか？」

なるほど。さすがに隊長をやっているだけあって状況の悪さを認識し、打開策の検討も行っている。

「もちろんイエスだ。ジャミング施設破壊に成功した際は通信が回復し、衛星からの敵部隊分布図がレーダーに反映される。しかも、喜べ。橋オペレーターからの激励付きだ。他に質問は？」

何処かから感嘆の声が漏れた。ガンドッグ4か。分かりやすい奴め。ガンドッグ隊から更なる質問は5秒待っても無かったので早速指定ポイントに向かってもらうことにした。

「よし、これ以上質問は無いようだな。ルーキーに負けるなよ！」

ガンドッグ小隊出撃」

「サー！ イエッサー！」

ガレージでの簡易ブリーフィングを済ませて、ガンドッグ隊は各々のマップスに乗り込み出撃準備を始めていた。私は見送りをしながら整備班からガンドッグ隊の機体構成・武装構成の資料を貰い、その場を後にした。

「さてと、次は候補生か。正規パイロット相手とは言え、ハンデとして限られた情報量、数、地形、指揮の有無と来て負けたら敗因は私になってしまふな」

指揮官たるもの周りが不安にならぬよう構えておくべきなのだが、周りに人がいなかったもので、ついつい苦笑いを浮かべてしまった。一つ息を吐いて気持ちを入れ替え、候補生達の方に向かうと既に私に来るのを待機していた。どうやら軍曹から心得も機体チェックも終わったようだ。

ここからは私の仕事が始まる。彼等の前に立つと同時に候補生が揃って敬礼をした。少し表情が固いように見えるが、正規パイロット相手に模擬戦だから仕方ないか。

いや、それが指揮をとるのが私だからかもしれないな。私も士官候補生時代は上官が怖かった。少し懐かしさを覚えたが、思い出に浸る暇は無い。

敬礼を返し挨拶を始めるとしよう。

「候補生諸君、今日君達を指揮する坂本だ。今日まで君達が血も滲むような努力をしていることは知っている。今日の相手は確かに強い。1対1なら勝ち目は薄いだろう。だがしかし、君達は彼らに負けない絆を持っている。今まで訓練を共にしてきた時間は何よりも強い経験だ。その絆をもって正規パイロットに勝利して見せる。諸

君らの健闘を祈る」

軍曹に目配せをすると次の指示を出してくれた。

「分かったかひよっこども。大佐殿の期待を裏切るなよ！　では、ブリーフィングルームに移動せよ！　ちんたらするな！」

軍曹の怒号と共に候補生達はブリーフィングルームに走って行った。廊下での会話を思い出してイタズラ心が芽生えた。

「こつこのつを世間ではなんと叫ぶかな」

軍曹が不思議そうな顔をしている。

「そつだ。ツンデレというやつだ。これからは鬼軍曹ではなくツンデレ軍曹と呼ばれるのはいかがかな？」

軍曹が困ったようにひきつった笑いをしている。どうやらツンデレの意味はわかっているらしい。

「司令がそうおっしゃるなら。いささか教官としての威厳にかけるので遠慮したいのですが」

冗談を通じないほど真面目な男だ。しかも、まずは目上を肯定してから遠回しな否定を使いこちらをたてている。

やれといったら本当にやりそうなので、からかうのはこの辺で止めておこつ。

「もちろん冗談だ。すまなかつたな。後はモニターで観戦をしていてくれ」

軍曹は安堵の顔をして敬礼をした。

「イエッサー。ではあいつらを頼みます」

任せておけ。という意味を込めて敬礼を返す。

「君の教え子だ。負けるわけが無い」

軍曹と別れブリーフィングルームに向かうと、中で既に候補生が待機していた。中に入るとしっかり敬礼をしてくる良く出来た奴らだ。彼らのためにもしっかり仕事をしよう。

ブリーフィングのための大型モニターをつけて作戦を説明する。

「今回のシチュエーションは本隊が陽動にかかり、拠点兵力が少な

い状態での奇襲をかけてくる敵迎撃だ。拠点施設にはレーダーのジャミング設備が設けられており、敵の索敵はカメラによる光学レーダーと熱源探知のみだ。しかし、ジャミングが破壊されると通信が回復し、こちらは丸見えとなる。いかに施設を守りながら敵を倒すかが鍵となる。具体的な数字は次に話す、まずはここまでで、シチュエーションについて何か質問は？」

手を挙げる者はいないので、次に進める。

「敵はマップス1小隊のみ。数にするとマップス5機だ。敵作戦目標はジャミング施設の破壊、拠点制圧とそれに伴う防衛部隊の撃破と予想される。つまりこちら側は敵の全機撃破が脅威を取り除けるただ一つの勝利条件だ。なお、今回はジャミング施設の破壊を防げなくてもよい。が、防げたらちよつとしたボーナスを進呈しよう。勝利条件について何か質問は？」

後列に位置していた1人が手を挙げたので質問を促した。

「サー、敵の撃破判定はどのように行われるのでしょうか？」

「今回実弾兵器にはペイント弾を利用して命中箇所、命中時弾速をもとにダメージ判断を行う。また、粒子ブレードや粒子ライフルのようなエネルギー兵器は命中時の熱変化によりダメージを判定する。なお、訓練用に粒子密度を大幅に下げ被弾による損傷は起きないように設定してあるため安心してくれ。最後に武器によって係数がある。同じ当たり箇所でも発射武器によりダメージは変化するので被弾が少ないからダメージが少ないと思って油断するな。HUDにダメージの蓄積は表示されるので、機体のダメージチェックを常に怠るな。他に質問は？」

「ありません。ありがとうございます」

「よし、では次だ。これからは敵部隊迎撃のための作戦を説明する。まずは、敵部隊の編成を見て貰おう」

ガレージで整備班から貰ったガンドッグ部隊の資料を展開させていく。

「近距離格闘戦に特化したファイタータイプが一機、近中距離が得

意なアタッカータイプが三機、そして遠距離に特化したスナイパータイプが一機の編成だ。各機体スタイルに合わせた武装は勿論サブウェポンとして、苦手距離を埋める装備も携行している。ファイターは足の速い機体にショットガン、粒子ブレード更にアサルトライフルを装備。アタッカーは旋回性能の高い機体にマシンガンとレーザーライフルそしてミサイルを装備。スナイパーは防御能力の高い機体に長距離用の実弾ライフルと粒子砲を装備している。正面から戦えばこちらの数が二倍とは言え苦戦するのは目に見えている。そこで、諸君らには正攻法ではなく策を持って敵を打ち破る必要がある。今回の戦闘区域マップを見て貰おう。」

画面に基地周り50km程度の地図を表示した。この基地は南には森と山と海、北は山に囲まれた所に位置している。

「敵は南の海上から飛行してくる。待機ポイントは基地から南方30kmの海岸、基地から南方27km海岸付近の山の基地側、基地南方24kmの上空、そして基地南方20kmの森林地帯だ。まずは海岸に足の速いファイターで三機待機してもらう。敵部隊が50km圏内に入ったら、海上に移動し敵と交戦。近中距離戦闘が可能なら距離になったら即転身し、後退。牽制射撃をしながら山を抜ける。抜けたタイミングでスモークグレネードを炸裂させる。山を敵も抜けたら、上空に待機してもらおうアタッカー一機とスナイパー一機により敵を上から攻撃。散開したタイミングを狙って山に待機しているアタッカー三機で背面から敵スナイパーを攻撃し他の機体に割って入りながら敵を分断する。分断した機体に同じく山に待機しているファイター一機が近接攻撃をしかけ、可能な限り早く撃破。さらに援護に向かう敵には基地南方の森林地帯よりスナイパー一機で牽制射撃をしかけ敵の合流を遅らせる。スナイパー撃破後はアタッカー三機ファイター三機により敵ファイター一機を撃破する。同時に、スナイパー二機による砲撃とファイター・アタッカーにより敵アタッカー三機を近接戦闘に持ち込み、ファイターの援護を阻止する。ファイター撃破後は残存戦力全てで、残りを叩くのみだ。まとめる

と不意打ちを連続で行い分断と包囲による個別撃破作戦だ。質問は？」

童顔で一部の男にまで人気の沖田が沈黙をやぶる。

「サー。それぞれの配置はどうなっているのでしょうか？」

丁度次に説明する内容だったので先に進めることを兼ねて答える。

「各自携帯端末を取り出せ。それぞれのコールネームおよび配置、機体と武器構成のデータを送信してある」

コールネームは最初の陽動がソード、上空待機班がクロスボウ、山に伏し分断をはかるのがアックス、分断した敵を落とすにいくのがランスだ。それに各々の番号をつけている。

「本日は諸君らの部隊をアームズとよばせてもらう。他に質問はないか？」それぞれの役割が判明して皆の緊張感が表れている良い顔だ。後は各々の奮闘に期待する。

「よし、質問は無いようだな。各員健闘を祈るアームズ出撃せよ！」

「サー！ イエッサー！」

候補生が部屋を駆け足で行ったのを見送り、こちらも司令塔に移動する。既にオペレーターも司令塔にいるはずだ。

候補生の資料に書かれている能力が新人パイロットにしては意外に高く、彼らの成長ぶりに口元が思わずニヤケてしまった。

「軍曹の言う通り1対1ならガンドッグが勝つだろうが、複数相手なら危ないかもな。ガンドッグの対応が楽しみだ。」一つ深呼吸をして頭を落ち着かせて司令塔に向かった。

第三章「陽動」

第三章「陽動」

司令塔では既にオペレーターが準備を完了していた。作戦区域の地図を映し出した大型モニターを確認すると両部隊とも位置についていた。準備の最終確認をとろう。長い髪を縛ってポニーテールにしているオペレーターの橋に連絡を入れてもらう。

「本部よりガンドッグ全機へ。こちらオペレーターの橋です。みなさん準備は良いですか？」

「ガンドッグ1レディ。いつでもいける」

「ガンドッグ2レディ。待ちくたびれましたよ」

「ガンドッグ3レディ。余裕です」

「ガンドッグ4レディ。良いとこ見せちゃうぜ？」

「ガンドッグ5レディ。問題無い」

それぞれ個性の出る応答だ。この組合せで良くうまくできているのが面白い。次は候補生の確認をとってもらう。

「本部よりアームズ全機。こちらオペレーターの橋です。整備班より全員マップスに搭乗済みと連絡が来ています。間違いないですか？」

「アフマータイプ。」

候補生全機から通信が入った。こちら準備完了だ。後は私が模擬戦開始の号令をかければ始まりだ。指揮官用の機のマイクをオンにして、声をはる。

「ガンドッグ全機。アームズ全機。これより、実戦型模擬戦を開始する。各員の健闘を祈る。ミッションスタート！」

「イエッサー！」

全機からいい返事が返ってきた。やる気があって実に頼もしい。モニターを見るとそれぞれが動き出していたので、橋にガンドッグ

に課したハンデの連絡と実行をしてみよう。

「本部よりガンドッグ全機へ。これから先はジャミング地帯です。こちらからのリーダーを始めとする通信バックアップが行えません。注意してください」

「ガンドッグ1。ラジャー」

「橘ちゃん、ジャミング施設なんかとつとぶつ壊すから待ってねー。あ、でも先に頑張つてとか言つてほしいな」

ガンドッグ4の軽口に橘は表情一つ変えないで受け流した。

「ガンドッグ4。作戦中です。私語はつつしんでください」

かわいい顔して実にクール。ガンドッグ4はお構いなしにそんなところが素敵とまだ減らず口を叩いていた。

「通信を遮断します。頑張つて下さい。応援してます」

橘の操作により、こちら側からの通信は入らず、向こう側からの通信は入っている状態になっているので、歓喜の音がダダ漏れになっていた。

「くうう、橘ちゃん可愛い！マジ可愛い！」

ガンドッグの興奮ぶりにおのおの突っ込みを入れているのが聞こえて思わず苦笑いをする。

「作戦中ですよ。まったくどうしてあなたはこうも頭の中が空っぽなのか。そもそもですね。あなた一人に向けて言った訳ではないでしょう」

とやたら理屈ぽくつつこむ女性の声はガンドッグ2。

「バカ。本部には通信丸聞こえ。今頃笑われてる」

と抑揚のない女性の声でつつこむのがガンドッグ3。

「問題無い。いつものことだ」と冷静で低い男性の声はガンドッグ5。

「お前ら仲が良いのは結構だが、そろそろ真面目にやれ」

と隊長のガンドッグ1が最後に締めるのが彼らの様式美だ。そんなつつこみの嵐の中ガンドッグ4がどれだけ橘が自分に親切にしてくれるかと抗議の声をあげている。

「君も苦勞してそうだな。橘君」

きよとんとした顔でこちらに振り向いている。思わず言ってしまったがしまった作戦中だった。

「いえ、それほどでもありませんよ。彼1人だけじゃないので慣れてますし。それにこの程度でやる気を出してもらえるなら安いものですよ。案外男ってちよいですよ？」

ニツコリ笑いながらとんでもないことを言い出した。今の勘違いしている連中が聞いていたら大変かわいそうなことになりそうだ。今はこれ以上余計なことは言わないように仕事に戻ってもらおう。というか計算でやっていたのか、誰が結ばれるかはしらないが頑張れ。

「そうか。その人心の扱い方については非常に興味深い話題だが、お喋りはここまでにしておこう。アームズの方はどうなっている？」橘は自分の端末に向き直って報告する。

「ソードが残り三十秒で待機地点に到着。他のチームは既に目的地で待機、迷彩起動中です。ガンドッグが海岸に到着するのは大体5分後かと」

作戦地図をこちらでも確認する。思ったより早いな。アームズ各機のリーダーにも情報は転送してあるが、注意を促す。

「ビッグハットよりアームズ全機。敵部隊が接近中。リーダーで確認出来ているか？」

「アフマータイプ」

よし、全員リーダーを見ている。次に最初に交戦するソード三機の様子を確認しよう。

「ビッグハットよりソード全機へ、敵部隊との推定交戦時間まで三分を切った。指定ポイントにダミーバルーンを射出し敵との交戦を始める」

「ソード1了解」「ソード2了解」「ソード3了解」

山と山の間を挟んで東西にダミーを二機ずつ設置したことをモニタ―でこちらでも確認をする。

「ソード1よりビッグハット。ダミーの設置が完了しました。これより敵陽動にあたります。」

「こちらビッグハット。ダミーの設置を確認した。陽動で撃破されるなよ。気をつける」

「了解」

そして一分後、ついに海上10m、彼我の距離が6kmで双方が敵を補足した。「ガンドッグ」

「アームズ」

「エンゲージ！（交戦開始）」

交戦開始の合図とともに、最初に発砲したのはアームズ側だった。

距離は6km。通常アサルトライフルで当てられる距離ではないが、弾は当たらなくても良い。ただ注意をひきつけるための、射程外からの射撃だ。

ガンドッグの方も通信を聞く限りこの射撃に戸惑っている。

「この距離でアサルトライフル撃ってくるなんて、候補生達よっぽど緊張してんのか？ この距離はロングレンジライフルでも割ときついぞ」

肩と腰と脚部についているサイドブーストを噴射し、大きく横に一回転する回避行動を取りながら曲芸飛行でガンドッグ4が少し小馬鹿にした口調で疑問を口にすると。

「油断するな。常識を無視した行動には裏があるかもしれん。全機周りに気をつけ、回避行動をとりながら前進。真っ直ぐ飛ぶなよ。」

距離による減衰があるとは言え当たると面倒だ。ガンドッグ5は、ロングレンジライフルで応戦しろ」

「ガンドッグ5ラジャー。スコープモードで狙撃する。視界が狭まるので何か情報があれば通信を頼む」

隊長であるガンドッグ1は緊張がゆるまないようしつかり締めて反撃にうつる。

距離がまだあいている状態とは言え、真っ直ぐ飛んだら当たる可能性があるので、本命の攻撃がいつどこから来るか分からない状況だ。

いきなり距離を詰めず回避を優先する彼の判断は正しい。

こちらもソードに通信を入れる。

「ビッグハットよりソード全機へ。交戦開始を確認した。敵スナイパーの射程圏に入っている直撃を防ぐためにシールドを展開。シールドの隙間から牽制射撃を続ける」

「了解」

各機体が脚部・腰・背中に装着された浮遊型追加装甲6枚を展開し防御体勢に入る。FTE粒子の制御により盾を機体周りの空間に展開する装備だ。

実体装甲だけでなく、粒子を高密度展開し高密度粒子空間を機体周りに作ることで弾の運動エネルギーを変換し威力を殺したり弾く粒子型のシールドもある。どちらも一長一短あるが、共通する欠点として展開中は速度があげられない問題がある。実体装甲は本体に速度が追いつけなく、粒子型は密度が安定しなくなり防御能力が落ちる。

とは言え、改良によりそれなりに速度は出せるようにはなったようだが、ガンドッグが回避に徹しているのはこのためだ。前進しなければならぬ局面で速度は落とすづらい。

ガンドッグ5が狙いを定める間にソード三機は実体装甲を機体前面にアサルトライフルの先端が隙間から出るように展開し、射撃を続ける。おかげでガンドッグ5が最初に撃った弾三発は防ぐことが出来た。

ソードが防御体勢をとり、弾が防がれたことをガンドッグ5が早速報告する。「ガンドッグ5よりガンドッグ1へ。敵、浮遊型装甲を展開し防御姿勢をとっている。距離は現在5km。射撃は当てられるが、防がれている」

「ガンドッグ1から各機。牽制射撃を加えながら距離を一気に詰める。フォーメーション（ハント）が可能な距離まで他方面から攻撃が無ければ、そのまま仕留めるぞ。全機高度を一旦上げるぞ」

「ラジャー」

ガンドッグ全機が上昇のために脚部・背部ブーストの出力を上げ、一気に高度を1000mほど上げた。

防御体勢に入った相手を切り崩すには近距離からの多方面攻撃が有効と判断し接近を選択。さらに、恐らく近づいたタイミングで伏兵から攻撃があると考え、敵の位置がわかりやすい上空に高度を上げただのdarou。

このタイミングで伏兵に気をつけているなら、そのまま利用させてもらうか。「ビッグハットよりソード全機。シールドを展開しながら後退。敵との距離が2kmを切ったらシールドを解除し、全速力でダミー設置ポイントまで後退せよ」

「ラジャー」

距離が4kmを切り、アタッカーであるガンドッグ2、3、4からのレーズライフルの射撃が始まった。

今の所、ソード三機は機体を左右にふって回避行動をとりながら後退し、浮遊装甲で直撃も防げている。

ガンドッグの方は上下左右にブーストを噴射し回避しながら、レーズライフルを撃ち続けたガンドッグ4がなかなか敵の撃墜が出来ないことにばやし始めた。

「自分も乗ってて言うのはなんだけど、相手をするのが面倒というか、マップスってホント頑丈だな。戦車やらヘリならとっくに壊れてるだろ」

ガンドッグ2が話題に乗っかり応答する。

「さすが、最高の現代兵器と言われているだけあって、簡単には落とせないですよ。ただでさえ、機動力が高くて捉えにくい上に装甲も堅い。しかもその装甲より頑丈な浮遊装甲を展開中ですし、そもそも浮遊装甲も頑丈じゃなかったらわざわざ武装として登録されていませんよ。それにですね」

いつもの長話をされると面倒だと思ったのかガンドッグ3が制止をかけた。「先輩長話はストップ。距離が3kmを切りました。残り1kmでハントの距離です」

相変わらず戦闘中でも声に抑揚がない。しかし、回避行動と射撃をしながら余裕で会話するとは良くやるよ。対照的にソードは攻撃を受け続け余裕が無くなって来ている。

「橋。今のままのスピードだと何秒後に目標距離になる？」

「三秒ほどで答えを出してもらえた。」

「三十秒後です」

何とか持つだろう。続けざまの攻撃で混乱に陥らないように声をかける。

「ビッグハットよりソード全機へ。残り三十秒で敵との目標距離だ。もう少し耐える。浮遊装甲はそう簡単には破壊されない。今のまま上手く防ぎながら後退だ」

「ラジャー」

まだ大丈夫。パニックにはなっていない田口軍曹は良い教育をしてくれている。徐々に距離が詰まり3kmを切ったところでガンドッグが速度を更に上げた。

「ガンドッグ1より、ガンドッグ全機へ。フォーメーション（ハント）」

「ガンドッグ2、お任せあれ」

「ガンドッグ3、仕掛けます」

「ガンドッグ4、待ってました！」

「ガンドッグ5、いつでもいける」

ファイターのガンドッグ1を先頭に左右にアタッカーのガンドッグ2と3がつき、その後ろにガンドッグ4、そしてスナイパーのガンドッグ5が続く。

ソードは横に1、2、3と並んでいたが、ガンドッグ5がソード2に右手のロングレンジライフルをソード3には左手の粒子砲を連続で撃ち始めた。

ソード2と3の意識を防御に集中させ、ソード1には残りの四機で集中攻撃を始める。

距離を見るとまだ2.5kmだが、通信から聞こえる候補生の緊迫

した声と状況から、さすがにこれ以上近づかれると被弾する可能性があるかと判断した。

「ビッグハットよりソード全機へ。敵が本気になった。予定より早いが状況が悪い。こちらでポイントを指定する。全速で後退しろ」
「ソード1ラジャー。ロックアラート鳴りっぱなしで、生きた心地がしなかったですよ……」

ソード三機は機体を反転させ、展開中の浮遊装甲を全て背面に取り付け背中、腰、脚部につけられている全てのブーストを噴射し、後退を始める。転身した際に多少の被弾があったようだが、浮遊装甲を全て背面に取り付けた結果直撃は免れた。

後はうまく後ろからの射撃を避けるだけだ。

ただ、ガンドッグも簡単には逃すつもりは無いらしい。自らは真つ直ぐ飛行しながら相手には執拗な射撃で回避行動をとらせ、距離を詰めようとしている。同じ距離を進むにも真つ直ぐとジグザグや回転の回避行動が混じった進み方では明らかに真つ直ぐが早い。

だが、ソードは足の早いファイターのみの編成に対し、ガンドッグは足の遅いスナイパーも混じっている。敵を追いかけるのに必死になるあまり味方を孤立させ、伏兵に奇襲される危険は犯せない。その結果、足の遅い機体にあわせた速度となったので、徐々に両者の距離が開いていく。ガンドッグ4が呆れて通信で叫んでいる。

「おいおいおい、突っ込んできたと思つて、本気で攻撃し始めたら、本気で逃げましたよ?! どういうことよ? やる気あんの?」

ガンドッグ2がそれに呆れて通信を返した。

「やる気がないのはあなたの頭ですよ。我々より少ない数で仕掛けて、距離が縮まったら後退つてどう考えても陽動でしょう。待ち伏せか後ろに既につかれているかのどちらかですね」

「ああ? 俺は常にやる気に満ちあふれてるよ! それにレーダーには敵影は映つて無いぞ。熱源反応も今の所あの三機しか無いし挟まれてはいないだろ。大体、ルーキーにそんな小賢しいこと出来るのか?」

ガンドッグ5が更に通信を割り込む。

「ガンドッグ4落ち着け。相手を過小評価しない方が良い。だが、今スコープでも後ろを確認しているが、確かに敵影は見えない。まだ挟まれてはいないようだ」

そして、ガンドッグ3が続いた。

「となると、考えられるのは待ち伏せですか？」

最初に待ち伏せの可能性を提案したガンドッグ2が返事をする。

「いきなり海の下から飛び出して来るとか考えられますけど、陸地で待ち伏せというのも考えられますね。何にせよバックアップが無いのは厄介ですね。出来ることは良く周りを観察するのと突然敵が出てくることに対する心の準備くらいでしょうか」

やれやれとため息混じりに説明を終えると、隊長のガンドッグ1が指示を出す。

「ガンドッグ2の言う通り待ち伏せの可能性が非常に高い。敵が反転した瞬間には気をつける」

と部隊に注意を促し、話を続ける。

「ただし、注意のし過ぎで速度が落ち、捕捉済みの敵を見失い、不意打ちでも受けようものなら話にならない。基本このままの速度で飛行し、補足可能距離を維持するために適宜速度を上げるぞ」

「「ラジャー」」

良く敵を見て警戒してくる。良いチームだ。これは私の策略が見破られるかもしれないな。

モニターに映るレーダーを見てみると、何とかレールライフルの射程圏から抜け出したソードは後少しでダミーのある海岸線に着くところであった。少し緊張感が切れたのか私語が聞こえる。

「おい、伊東。佐藤。さっきのすごかったな。ロックアラート鳴りっぱなしで、浮遊装甲が銃弾を受ける音がガンガン鳴ってた。実弾だったら危なかった……」

ソード1がコールネームではなく名前で呼んでいる。

伊東と呼ばれたソード2が返事をする。

「コールネームじゃなくなってるぞ斎藤。ってこつちもか。俺も口ツクアラート鳴りっぱで、粒子砲撃たれてたから目の前が緑でいっぱいになってたよ。装甲間に隙間を作ったらやばかった」
ソード3が会話に乗っかる。

「後退が早まって良かったね。もう少しあのままだったらやばかったよ。って、うわ！？ソード1の浮遊装甲がペイント弾の色で真っ赤になってる！　って私のもか」

「あんだけ撃たればなあ……」

「私達、良く撃墜判定にならなかったよねえ」

ソード1が大きくため息をついたようだ。海岸線がもう目の前に迫って来ている。海岸線付近でもう一度敵を引きつけないければならないと思うとため息の一つでもしたくなつたのだろうか。

私は彼らの気を落ち着かせるために、お喋りを聞かなかった振りをしていたが、そろそろポイントなので気をもう一度引き締めて貰うために指示を出す。

「ビッグハットよりソード全機へ。まだ誰も落ちていないな。ポイントは目の前だ。ここでもう一度敵を引きつける。気を引き締めろよ」

了解と応答が返ってきた。ここからが正念場だ。
ソード3機がポイントに到達し機体を反転させ、浮遊装甲を再度展開し敵を迎えた。

「ガンドッグ1より各機。敵が足を止め、こちらを向いている。恐らく罠だ。牽制射撃を加えながら左右に分かれて挟み込み、待ち伏せより早く敵を撃破するぞ。フォーメーション(クロー)」
ガンドッグ1の合図で部隊が左右に分かれた。

左にガンドッグ1と4、右に残りのガンドッグ2と3と5に分かれた。

左右どちらかに注意を逸らせ浮遊装甲をずらし、ずらした隙間に弾を打ち込む戦術だ。

この戦術は部隊の息が合えば合うほど防御を切り崩しやすくなる。

ソード3機が防御で敵を引きつける予定だが、非常に相性が悪い戦術だ。

しかし、次の仕掛けのために今回はギリギリまで近づいて貰わなくては意味が無い。

そのためにもソード3機にはゆっくりと下がって貰わなければならぬ。

動きの速い回避起動では潜伏中の部隊が捕捉される危険や仕掛けの先に行かれてしまう恐れがある。

「ビッグハットよりソード全機へ。密集防御陣形ターゲットを取り、防御面に隙間を作るな」

ソード一機を前面に残りの二機を三角形になるように背中合わせで密着させ、浮遊装甲を各機の前面に展開することによって前方180度を防ぐ陣形だ。

距離が空いている間はミサイルと銃弾の雨をフレアと浮遊装甲で何とか防げていたが、距離が1kmを切った時、ガンドッグ3が他の隊員に通信を入れた。

「先輩。ガンドッグ5。ナイスアシスト」

ソード2が初めてダメージ判定を伴う被弾をする。

どうやら、ガンドッグ5から撃たれたロングレンジライフルを防いだのは良かったが、同時に撃たれていた垂直ミサイルに気付かず対応が遅れ、フレアではなく浮遊装甲を上に向けて防いだところ、空いてしまった隙間を撃たれたようだ。

「こちらソード2、左脚部に被弾した。損傷は軽微。つて、あぶねっ!？」

「ソード2! ミサイル! また上からの垂直ミサイルだ! 気をつける!」

「右からもミサイルが来るよ! 私がなんとかする!」

ソード3が装備していたフレアを射出し、ミサイルをそらしたのは良かったが、防戦一方だったせいもあり、フレアの残弾数が少ないしかも、激しい弾幕を防ぐのに精一杯でなかなか反撃が出来ずにい

るため、ガンドッグの攻撃を止めることも出来ない状態だ。

しかし、両者の距離は1kmを切った。目標の500mまで後少しだ。

500mまで近づけばガンドック小隊がソードの防御陣形をめくるため、更に接近して後ろに回りこもうとするはずだ。

「橘。ソードに後退のカウントダウンを頼む」

了解です。と返事をし、橘が距離のカウントを始める。

900……「後少しか。ソード2ソード3何とか持たせるぞ！」

800……「ソード2フレア残数0！ ミサイルはそっちに任せたい！」

700……「ソード3こちらフレア残数0！ こっちのフレア全部切れたんじゃないの?!」

600……「ビッグハットよりソード全機！ 後退用意！」

500……「ソード全機後退してください」

「ラジャー！」

合図とともにフラッシュグレネードを射出する。

強烈な閃光で一時的に機体のカメラ機能を麻痺させる。

その一瞬の間隙についてソード3機が全速で後退をする。

「二度も逃がすかよ！」

ガンドッグ4が加速しソードを追いかける。

「ガンドッグ4！先走り過ぎです！隊長どうしますか？」

ガンドッグ2がガンドッグ4の制止をかけながら、隊長の判断を待つ。

その間ガンドッグ4は文句を言いながらも制止している。良い判断だガンドッグ4。

「仕方ない。畏の可能性もあるが、追いかけるしかあるまい。後方に注意しながら行くぞ」

隊長の判断が下され、ガンドック小隊は前進しながら左右に分かれていた部隊を合流させた。

ガンドックが合流した後、ガンドック5から数発狙撃を放ったが、

ギリギリで回避されてしまった。
そして遂に策を仕込みに仕込んだポイントにガンドック小隊が到達する。

第四章「反撃」

第四章「反撃」

「ビッグハットよりソード。ダミーに熱を入れ、五秒後に全スモークグレネードを後方に炸裂させる」

「了解」

待機しているチームの出番が迫っているのでそちらにも確認をとる。

「ビッグハットよりクロスボウ。スモークが行動開始の合図だ」

「クロスボウ1了解」

「クロスボウ2了解」

よし、準備は大丈夫そうだ。

後はガンドッグがこちらの思惑通り動けば勝てるはずだ。

ソードの遠隔操作により、ダミーが熱を持ちガンドッグのレーダーに表示される。

いち早く気付いたガンドッグ2が通信で報告を入れた。

「隊長！ 8時と16時の方向に敵熱源反応を確認！」

「3・4は機体を回転！ 後ろの警戒をしながらついてこい！」

「分かりました」

「まかせとけて」

ガンドッグ3と4は胸部にあるバックブーストを片側だけ噴射し一気に機体の向きを反転させ、バックブーストに加え脚部を前に突き出しブーストを噴射することによって速度を維持しながら前進を始めた。

うまく引つかかってくれた。

そして、予定通りスモークがソード3機によってまかれ、ガンドッグ小隊がスモーク内に突っ込んだ。

「レーダーロス。ジャマースモークのようです」

ガンドッグ3が報告を入れる。

「隊列このまま。前方・後方からの攻撃に注意しろ」
そのまま突破することを選んだようだ。

5秒後スモークを突破したところで、ソードとクロスボウからの攻撃が始まった。

前方のソード3機からの射撃を回避することは出来たが、上空のクロスボウ2機から降り注ぐライフル弾、ミサイル、炸裂弾に反応出来ず、後ろを向いていたガンドック3と4にダメージを与えた。

「こちらクロスボウ1。ソードのみなさんお待ちせ！」
上からの攻撃を想定していなかったため、ガンドック小隊の対応に焦りが出ているようだ。

「おいおい!? 上かよ! レーダーには映ってなかったぜ?」
ガンドック4が想定外の攻撃に驚いて叫んでいる。

「ジャマー圏内の上に、ジャマースモークまでまかれたんじゃ気付かないよ」

やられたとガンドック3も抑揚の無い声で悔しがっている
「全機散開!」
フレイク

そんな中でガンドック1は爆発半径の広い炸裂弾に密集は危険と即判断し、すぐに散開号令で部隊を前方に散開させる。

よし、ここまでは想定通り。

現在ガンドック小隊のレーダーにはソード三機とクロスボウの二機そしてダミーの三機が映っている。

前を突破してその包囲から抜けるつもりのようなだったが、ガンドック5がダミーに気付いた。

「隊長、先程後方に現れた敵影ですが、この状況で全く動いていません。こちらの注意を後ろにそらせるダミーです」

よく気付いたが遅い。それにむしろ気付かれた方が好都合だ。

「よし、5は後方に下がり敵の遠距離砲撃を黙らせる。残りで前方の敵を落とすぞ」

ガンドック1の指示通りガンドック5は山側に後退し、残りが前進した。

どうやらアックスを出す前に分断に成功したようだ。作戦を少し変更する。

クロスボウ1はロングレンジライフルでガンドッグ5と撃ち合い、距離を敵部隊から離していき、ソード三機とクロスボウ2が残りの敵四機の対処を始めた。

上空のクロスボウ1が狙撃に集中出来るように敵を抑えるのが彼らの仕事になる。

分断に成功した今ここで一気にガンドッグ5を落とすか。

「ビッグハットよりアックス全機！ 予定とは違うが、目の前にいるスナイパー型を落とせ！」

「アックス1了解。撃墜スコアは俺の物」

「アックス2了解。逆に落とされないでよ？」

「アックス3了解。なんとかなるっしょー」

応答とともに射撃を開始し、前方上空のクロスボウ1と撃ち合っているガンドッグ5の背部にレールライフルが直撃する。

「ダメーは伏兵を隠すための物でもあったか……隊長、後方の伏兵三機より攻撃を受けています。援護頼めますか？ ある程度までは浮遊装甲を展開し、耐えます」

直撃は五発。

損傷判定は腕部と脚部にそれぞれ小ダメージ。

不意打ちに対して浮遊装甲5枚を非常に早く展開された結果、大したダメージは与えられなかったようだ。

ガンドッグ5の通信通り続く後方からの攻撃は浮遊装甲で防ぎつつ、前方からの狙撃の二発を回避機動で避けていたが。

「動きが読めたよ。いただき！」

クロスボウ1の狙撃が更に避けようとするガンドッグ5を捉えた。撃たれたロングレンジライフルの弾丸はガンドッグ5が動いた先に置かれるように放たれていたのだ。

「む、左腕に直撃か。損傷判定は中程度。もう一発今のを貰えば破壊判定か。こちらの回避を予測して置き撃ちとは良い腕だルーキー」

こんな時にも落ち着いた声で冷静に分析している。さすがスナイパーをやっているだけはある。

「5まだやれますか？ 今からそちらに向かい援護します」

ガンドッグ2が背部への不意打ちを避けるために、ソードとクロスボウに対して機体を前に向けたままバックブーストで後退し、ガンドッグ5の方に離れていく。予定とは少し違ったが、これで敵五機を三つに分断することが出来た。

「ビッグハットよりランス！ ショータイムだ！」

「ランス1ラジャー。援護に向かう敵を狙撃します」

「ランス2ラジャー。敵スナイパーを落とします！」

これで落とせばかなり楽になるはずだ。

失敗した場合に備えての包囲戦術も準備してはいるが、敵よりも技量が低い部隊では、数が二倍でも不安なので確実に決めて欲しい。

さてどうなる？ 息を呑んでモニターを見るとランス1が撃った弾はガンドッグ2の右腰前面に直撃した。

ロックオン無しのスコープ射撃で警告音が鳴らず反応が出来なかったようだ。

損傷判定は中程度だったが、当たりどころが良く、戦闘に大きな支障が出るダメージではなかった。

しかし、足止めには十分だ。

「今のは一体どこから？ 被弾状況からして上からではなく正面か下といったところかしら？ まだ敵がいるの？」

続けざまにライフルが撃たれるが今度は粒子型シールドを展開し、弾の威力を殺して防御する。

「ふむ、やはり下からですか。2から全機へ11時の方向に敵スナイパー！ こちらで捕捉したのでレーダーに表示します」

「マジかよ？！ 何体敵がいるんだっての！」

3機で4機を相手にしているガンドッグ4がうんざりしたように叫ぶ。

その頃ガンドッグ5は器用に多方面の攻撃を防いでいた。

一番ダメージの大きいスナイパー方面に常に装甲を3枚展開し、ミサイルにはフレアを射出してそらし、レールライフルやマシンガンには2枚の浮遊装甲をピンポイントで当てて防いでいる。

だが、この攻撃の雨に近接戦闘の得意な機体が参加したことによりガンドック5の防御にほころびが生じた。

「いただく！」

ランス2がショットガンの連射により、浮遊装甲3枚を一点に集めたところに、背部ブリストを噴射し粒子ブレードを構えながら突っ込んだ。

初撃は横切りで浮遊装甲をまとめて払い空いたところにショットガンをつきつけ至近距離で発射するが、寸でのところでガンドック5が右手のロングレンジライフルをショットガンに払うようにぶつけて射線を変え回避、左手に粒子ダガーを取り、突きの反撃を繰り返すが、ランス2がバックブリストで突きを回避し、ショットガンを発射する。

ガンドック5はバックブリストが噴かれた瞬間にナイフを右腰にマウントしてそのまま左腕を盾にして、本体のダメージを減らす。

同時に右手のライフルを肩に取り付け、空いた手でマウントされたダガーを投擲する。

ランス2は投擲されたダガーをショットガンにぶつけ直撃を防いだ。「ちっ、ショットガンが1本お釈迦になったか！ それでも！」

そしてショットガンに弾かれたダガーを掴み、そのまま投げ返した。ガンドック5はダガーの投げ返しに反応し、払われなかった浮遊装甲を一枚ランス2に向け展開した。

しかし、そこから生じた隙をアックス三機によって左右から狙われ、ライフルとミサイルを連続で撃ち込まれてしまった。

左腕大破、脚部中破、右腕中破、コア損傷軽微、搭載されたAIから損害報告とアラート音が出ている。

ギリギリのところでもロングレンジライフルと右腕を盾にしコアである胴体を守ったため撃破判定はまだ出ていなかった。

「次で落とすぞ！ 頼むぞクロスボウ1」

ランス2は上からガンドック5の後ろに回り込み、クロスボウ1の砲撃に向けられていた浮遊装甲を右に弾き、追撃をせずにそのまま右にそれた。ガンドック5がカウンターの蹴りを入れようとしたがそのまま回避されてしまう。

「ナイスアシスト！ランス2！」

クロスボウ1の声とともに発射された弾丸はガンドック5の背部に直撃し、更にだめ押しの粒子ブレードの突きがコアに入った。オペレーターの橋から撃墜報告が入る。

「敵機撃墜。次の目標に移ってください」

これでまずは一機。攻撃力の高い厄介な敵が減り、遠距離が大分楽になった。

「こちら5、すまん。やられた。悔っていると痛い目を見る」

ガンドック小隊に衝撃が走る。気付いたら敵が二倍の数になり、包囲されたあげく、味方機の撃墜により、戦力的にも精神的にも受けたダメージは大きい。

「了解。後は任せておけ。2はこっちの援護に戻れ！ 片側の敵を早く片づけなければまずい！」

「やれやれ。後ろに5を戻したのは失策でしたね」

「今更です先輩。それよりも後ろから撃たれるのが、一機だけで逆に良かったかも知れませんか。全機一片にスクラップは勘弁です」

「仇はとつてやるよ！ まずは目の前のやつらをぶっ潰す！」

ガンドック5はうまく損傷無しで撃破出来たが、前線の方は数が一機勝っているとはいえ戦況は互角で、候補生達の機体に損傷が出ていた。

「ビッグハットよりアームズ全機！ 敵部隊は正面突破を図っているようだ。損傷のある機体は集中攻撃で落とされる可能性がある。損傷の少ないアックスとランスは速やかに援護に向かえ！」

「了解」

後ろに向けられる全ブーレストを噴射し、全速で援護に向かう。

「橘、彼らが援護に入れるまでどれくらいだ？」

「後三十秒ほどです」

ガンドツグ2が残り10秒ほどで合流すると、中近距離の数は1対1になる。

タイマンで勝てる見込みは少ない上に数が減らされたら勝率はかなり落ちてしまう。そうなってしまうえば、ここまでの作戦が全て水泡に帰す。

「ビッグハットよりソードおよびクロスボウ。アックスとランスが援護に入るまで約三十秒。援護が来るまで回避・防御主体が良い。絶対に落とされるな」

「了解」

海上や海岸の時とは違い、遠距離からの狙撃を含めて候補生達の数が増えて攻撃が激しくなったので、ガンドツグ小隊の攻撃頻度が落ちるかと思っただが、頻度が落ちた分、三機の攻撃が集中し、回避と防御に失敗した瞬間に撃墜判定もしくは損傷大判定が下されそうな勢いで攻撃されている。

そしてガンドツグ2が合流して更に攻撃は激しさを増した。

アタッカー三機によるレールライフルとマシンガンで激しい弾幕を降りながら、ガンドツグ1による高速攪乱機動で上下左右前後と空間を最大に活かしてショットガンとアサルトライフルを撃ち込む。

候補生側も、狙われた機体に一機援護が入り浮遊装甲を展開し、避け漏らした攻撃を防いでいる。

そして残りの二機で違う方向から射撃を撃ち込み撃墜を狙うと共に注意をそらして攻撃を一時的に止める。

大ダメージを狙えるスナイパー二機の狙撃は、レーダーから弾道の予測がつけられていたため、射線に対し機体の大部分が隠れるように浮遊装甲のマウント場所を変えて防がれていた。

スナイパー二人がそれぞれ驚きと共に打開策を相談する。

「どんなけシールドの扱い上手いのよ！ さっきから何発も当たてるのに全部シールドじゃないの！」

クロスボウ1にランス1が返事を返す。

「さすが正規パイロットですね。恐らくリーダーで僕達の場所を見て、そこから弾道を割り出してるのでは？」

「だったらどうすれば良いのかしら？」

「さっきの撃墜と同じで、隙を作ってもらって確実につくってのは？」

「今の状況を見ると難しそうね。近接攻撃しようと思えば蜂の巣にされて厳しいわよ。ってちょっと待って！ さっき弾道予測で防いでるって言ったわね？」

クロスボウ1がどうやら何か思いついたらしい。

「そうだけど。それがどうかした？」

「ちょっと試したいことがあるの。今からロックオン無しのスコープ射撃は止めて全てロックオン有りで射撃するわよ。こちらのロック状況を送るからリンクして、同時に時計回りでロングレンジライフルを連射しなさい！」

なるほど。悪くない戦術だ。試す価値は十分にある。ここは静観しておこう。

クロスボウ1は上空からガンドッグ小隊の裏に回り込んでから、ガンドッグ4をロックオンし、ロック情報をランス1とリンクさせた。

「射撃開始！」

ロックオンアラートが鳴り、狙撃を事前に察知したガンドッグ4はほくそ笑んだ。

「馬鹿め！ 回り込んでの同時攻撃とはいえ、弾道予測が来ている相手にロックオンとは当てる気があるのか？ まっ、ノーロックでも当たらんがな！」

自信満々の言葉通りマウントされた浮遊装甲で初撃は防ぎ、続く射線を変えながら撃たれる射撃には浮遊装甲を展開し、装甲を動かしながら弾を防いだ。

ランス1がクロスボウ1の戦術に気付いたようだ。

「なるほどね。でもこれ多分確実に決まるのは一回切りだよ？」

「一機確実に減らせるだけでも十分よ」

自信満々にクロスボウ1が答えた。

「それもそうか。タイミングは援護が到着した瞬間だね」

クロスボウ1がアックス3機とランス2に通信を入れる。

それも何故か色気たっぷりの声で。

「敵を一機減らす賭けにつきあって」

第五章「包囲」

第五章「包囲」

援護が到着した頃、ソードとクロスボウ2は機体の損傷が中程度でまだ保っていた。

機体の性能もあるだろうが、訓練の結果でここまで出きるようになっているのは間違いない。

素人や練度が不足している者が正規パイロット相手にここまで出来る訳がないのだ。

そして、到着と同時にクロスボウ1より戦術が告げられた。

「クロスボウ1より全機！私のロックオン情報を送るからリンクして。今から私とランス1が狙撃で敵の浮遊装甲を時計回りに動かすよ。空いた隙間に全弾丸を撃ち込んで！」

全機のFCSにロックオン情報を送信し、準備が整ったのを通信で確認する。

「よし、全機クロスボウに続くぞ！」

アームズ全機がクロスボウ1の戦術に参加する。

まずはスナイパー二機が時計回りに狙撃を始めた。

ガンドッグ4は浮遊装甲を展開し、射線に応じて装甲を時計回りに動かす。

「だから何度やっても無駄だったの！」

何回か同じ動きをして慣れさせたせいもあり、ガンドッグ4は完全に戦線に参加した四機のことを忘れていた。

右後ろと左前に隙間が生まれたのをクロスボウ1は見逃さなかった。

「撃ち方始め！」

敵機に狙われていた一機と援護に入っていた一機をのぞいた全八機からの集中砲火が始まる。

「ちっ！しまっ……！」

ガンドッグ4が撃墜を覚悟したところに新たな装甲が周りに展開され攻撃を防いだ。

「4油断しすぎ。レーダーをしつかり見て」

ガンドッグ3が自らの浮遊装甲をガンドッグ2に飛ばしていたのだ。装甲のやりとりが出来る浮遊装甲の長所を活かしている。

「助かったぜ。今のはちいっとひやつとした」

だが、浮遊装甲を味方に飛ばすということは自分の盾が無くなることと同じだ。それをクロスボウ1は見逃さなかった。

「浮遊装甲を飛ばした！？ ランス1、丸裸のやつを落とすよ！」

ロックオン機能をオフにし、スコープ射撃でガンドッグ3に連続で弾丸を放つ。

初撃は右肩に、続く射撃で胴体に連続で入った。コア損傷による撃墜判定だ。

橋からの撃墜判定が報告される。

「油断したのはボクか。みなさん後は頼みます」

やはり抑揚のない平坦な声音で報告をする。

二機を撃墜したことによって勝利に近づいているが、ここで油断してはならない。

私の方も敵の動きを見落とさないように注意深くモニターを見つめる。

「やるなルーキー。だが、ここまでだ！ フォーマーションファンゲ！」

ガンドッグ1がブーストの出力を上げソード1に肉薄し、右腕の粒子ブレードを上から振り下ろした。ソード1が左手の粒子ブレードで斬攻を何とか受け止める。

一瞬のつばぜり合いの間にソード1が右腕のショットガンで狙いをつけるが、ガンドッグ1はショットガンの構えを見た瞬間に射撃が来ることを察知し、粒子ブレードを解除して、下に回り込んで回し蹴りをソード1の背中に入れる。

バランスを崩したソード1は体勢を立て直すため上空に離れて距離

をとろうとするが、予測されていたかのようにガンドッグ2と4が背面にいた。

「さすが隊長。最高の攻撃ポイントです」
マシンガンが2機から斉射される。

「ちっ、させるか！」

二機からの攻撃に対しギリギリで浮遊装甲を展開し、数発の被弾で済ますことは出来た。

しかし、正面からの攻撃はまだ続いていた。ソード1はブレードを構え直し、接近して来るガンドッグ1を迎える。

初撃の袈裟切りをまたブレードで受け止めた所、ガンドッグ1が左手にダガーを持ち、突きを繰り出す。

ソード1は繰り出された突きを防ぐため、背面からの射撃に被弾覚悟で浮遊装甲を前面に移動させたが、突きはフェイントで、つばぜり合いをしているブレードを下げる変わりにダガーでソード1のブレードを抑える。

「なっ!? 突きじゃない？」

そしてその一瞬に、下げたブレードで下からの切り上げをソード1の左腕に直撃させた。

「おいおいおい! なんだそれ?!」

完全な直撃を受け、左腕の破壊判定が出されたため、ソード1の粒子ブレードの刃が消えてしまった。

「おいおい、まじかよ?!」

空いた左側からブレードの突きによる連撃が繰り出されたが、機体を右にひねり、まだ破壊判定の出ていなかった左肩に当てる。

「ほお、今のを防ぐか」

ガンドッグ1は少し嬉しそうにつばやき、既にショットガンに持ち替えられていた左腕武器のトリガーを押した。放たれた散弾が浮遊装甲にあたるが、この一連の攻撃でソード1は後ろの警戒がおろそかになってしまった。

「ソード1! 後ろだ!」

誰かからの通信が入ったところにはガンドッグ2と4が格闘距離に入りダガーで突きを放っていた。

「2、4、よくやった」

「隊長！ 次もたのんまずよ！」

コアにダガーの直撃判定が下り、だめ押しの零距离射撃まで加えられたソード1に撃墜判定が出る。

「すまん。やられた」

ソード1が味方に撃墜された報告をする。

「大丈夫だ。後は任せろ」

初めての撃墜に動揺するかと思ったが、ソード2の応答をはじめ、皆落ちて着いていた。

これは私も負けてはいられないな。落ちて着いてレーダーを見るとあることに気がついた。ソード1、どうやら君の粘りは無駄ではなかったようだ。

ソード1の奮戦により敵の配置がアームズの丁度真ん中に位置していたのだ。

ここが決め所と判断し全機に通信を入れる。

「ビックハットよりアームズ全機。敵は一カ所に固まっている。このまま包囲して一機に攻撃を集中させる。こちらでガイドを出す」

「了解」

アームズの応答を確認して、橋にガンドッグ1にマークを入れてもらった。

全機のレーダーにターゲットとしてガンドッグ1に重要ターゲットのマークが映し出される。

更に近接攻撃をしかけるファイターの映像を小窓でスナイパー二機表示させた。

クロスボウ2とアックス三機による援護射撃の中、残ったファイター1のソード2と3、そしてランス2が牽制射撃を入れながら接近し、スナイパー二機はガンドッグ2と4の注意を引きつけるための射撃を始め、少しずつガンドッグ1を他の機体から引きなした。

数秒後、接近戦が推奨される距離にまで近づきそれぞれが粒子ブレイドを展開する。

「三機相手か。さて……」

左右と後ろからのブレイドを浮遊装甲それぞれ一枚で受け止め、払うようにブレイドを横に一回転しながら振って反撃する。

候補生達は脚部のブーストの出力を上げて上に切り払いを回避し、三機同時にブレイドで切りかかるが、振り下ろした腕に浮遊装甲がぶつけられ体勢が崩される。

よくもそこまで上手く装甲のコントロールが出来るものだ。

「まずは一機」

ガンドッグ1のブレイドによる突きがソード2に向けて放たれる。

「まずった!」

腕が後ろに反り返っていたためコアである胴体がかから空きだった。

そこを確実に狙われている。

しかし、スナイパー二機に前衛のモニターを表示させておいたのが功を奏した。

「ソード2! 貸しーよ! 今度ごはんおごってね?」

ガンドッグ1が浮遊装甲を相手の体勢を崩すのに使っていたため、防御力がダウンしていた事に気づき、モニターから危険を察知して、とっさにガンドッグ1の右腕を狙って狙撃したのだ。見事に右腕に直撃し破壊判定が下された。

「ほお、やってくれる」

ガンドッグ1の感想通り、本当によくやったと言わざるを得ない。

判断力、射撃能力が高くなければ出来ない芸当だ。

ガンドッグ1はブレイドが使えない状況で接近戦は出来ないと判断したのかバックブーストで距離を離しながら、浮遊装甲を引き戻そうとする。

「ここで逃すわけにいかないわよ!」

前衛三機が再度突撃をかける。

一方ガンドッグ2と4はアタッカー四機によって足止めをされてい

た。

「隊長！ ちつ、こいつらうつとうしいぞ！ 2どころにかしろ！」

「こつちがどうにかして欲しいくらいですよ。さすがに1対4は厄介です」

「おい、俺を数から外すな！ 仕方ねえ。被弾覚悟で近接攻撃をしかけて突破するしかないか！」

「本当に仕方ないですね。あなたの頭の悪い作戦につきあいましよ
う」

「だから、誰の頭が悪いってんだよ！？ いくぞ！」

ガンドッグ1がいる方角には現在アックス2と3が応戦していて、この2人が少しでもガンドッグ2とガンドッグ4を抑えられれば、反対側からアックス1とクロスボウ2で挟むことが出来る。とりあえずは静観だ。

一方ガンドッグ1の方は左腕一本で上手く対処しているが、いくら正規パイロットとは言え片腕だけで三機を相手にするのは大変難しいようである。徐々に押され始めていた。

「スナイパー！ 浮遊装甲はこちらでぶっ飛ばす！ 空いたところを撃ち抜け！」

ガンドッグ5を撃墜した戦術をランス2が提案する。

「了解」

展開されている浮遊装甲は六枚。それを敵の方面に合わせて展開している。

1人1枚プラス1で各方面からの攻撃をしのがれていた。

この状況で浮遊装甲の無力化は大きなチャンスになる。良い判断だ。さすがに、厳しいな

ガンドッグ1は味方の援護がリーダーを見る限り、足止めされていて期待出来ないと分かっていたのだ。ところが通信を入れて確認をとる。

「2、4。少し状況が悪い。援護に来られるか？」

「今何とかします！ 待ってて下さい」

「了解」

ガンドッグ1はロックアラートが鳴り響くコックピットの中で一度深呼吸をして敵の攻撃に再度集中したようだ。

次で決まるか？と私にも緊張が走る。

3方向からの斬撃を浮遊装甲で防いだが、これは候補生達の予定通り。

そのまま防いでいる装甲を横に弾き飛ばし、残っている三枚の装甲にそれぞれがもう一度攻撃をしかける。

「ちっ、まずいな」

ガンドッグ1は浮遊装甲のコントロールを捨てて高度を一気に落とした。

装甲をはじかれた時に狙撃が来る事を予測し、ガンドッグ5の二の舞は回避する事ができたようだ。

「さすがに警戒されてますね。でも、丸裸な状態でいつまで逃げ切れそうですか？」

一発二発と何発もの狙撃をかわしながら、ゆっくりと落下している浮遊装甲の近くに飛び、コントロールを復活させるつもりでいるようだ、前衛がコントロール距離に近づくとショットガンを放ち、何とか体勢を立て直さないように牽制する。

「しぶとい。しぶと過ぎるわ。どんな腕してるのよ……」

呆れるようにソード3が呟いている。

「ほんとよね。足さえ止まれば当てられるんだけど。なんなのあれ？ 動き過ぎよ」

先ほどから何発もの攻撃をブーストの出力を調整しながら自由自在に上下左右に動き回り、攻撃を避けられているクロスボウ1も困惑していた。

既にお互いの姿を見せ合っている状態の戦闘に関して、指揮官がしてやれることは少ない。

有利な状況は作れるが、そこから先は個人とチームの能力が決め手となる。元パイロットとしては非常にもどかしい。

彼らはこの状況を打開する能力があるだろうか。

「ちよいと賭けをやるか。さっきの借りを返すぞ。そんなもって、おごりは無しだ。」

ソード2が何やら思いついたようだ。

「何するつもりよ？」

「敵の浮遊装甲をハックしてぶつけるからその隙を狙い撃て」

ランス2がその提案に割ってはいる。

「おい、その機体でハッキング出来たか？」

ランス2が言った通り、今回機体に電子戦用の装備はついていない。一体何を考えているのか私にも予想がつかない。

「だから分の悪い賭けなんだよ。ってことで頼むわ」

「何だがわかんないけど、その賭け乗ったわ」

ソード3はガンドッグ1が浮遊装甲近くに行けるようわざと射撃を外した。浮遊装甲がコントロール距離間近になった時、ソード2が急接近し、浮遊装甲を左手で掴み装甲に沿うようにブレードを持った右手を添え、ブーストの出力を上げた。

「浮遊装甲は返すぜ！ ただし、ブレードのオマケ付きだ！」

「それハッキングじゃねえ！」

ランス2が大声でつつこみを入れた。

面白いことを考える奴だよ。私にはまったく思いつかなかった戦法だ。

吸い寄せられるような形でガンドッグ1にソード2が突撃する。

「面白い！」

ソード2の突撃に対し、ダガーによるカウンターを入れるため、ガンドッグ1が一瞬止まった。

「あら残念。ご飯楽しみだったんだけど、これでキャラかしらね？」

一瞬の隙をクロスボウ1がつき、狙撃がガンドッグ1の背部に直撃した。

ガンドッグ1が舌打ちをする。

「本命はそちらだったか。なるほど、良いチームワークだ。だが、タダで落とされてはやらん」

右肩をソード2の突きに自ら当てに行き、左手に持っていたダガーを落として左足で蹴り上げた。蹴飛ばされたダガーがソード2の右足に命中する。

同時にソード2の粒子ブレードがコアに届き狙撃とブレードのダメージによるコア損傷の撃墜判定が下された。

「やれやれ最後のを脚部を使ってコアを防ぐとは。思った以上に反射神経が良いじゃないか」

大きなため息を一つつき、味方に連絡を入れる。

「こちらガンドッグ1。すまん。落とされた」

近距離戦闘に持ち込んでも、なかなか突破出来なかった最中に、隊長機から落とされた報告を入れられて2人は衝撃を受けた。

「すみません。こちらが手間取ったばかりに」

「隊長落とされたってマジっすか?!」

「マジだから困る。2も今は気にするな敵に集中しろ」

ガンドッグ1を失って現在の戦力差は2対9。

圧倒的に候補生達が有利な状況になった。だが、ここで油断してはならない。

少しの気のゆるみが実戦では死につながる。

「ビックハットからアームズ全機。残敵は2だが、決して油断するな。こちらからターゲットマーカールを出す。集中して撃破しろ」

橋にターゲットマーカールをガンドッグ2につけるよう指示し、全機に送って貰う。

「みなさんにターゲットマーカールを転送しました。確認してください」

全機の攻撃がガンドッグ2に集中し、接近戦をしかけられているアックス2機から引き離れた。

代わりに候補生のファイター三機が近接攻撃をしかける。

「私に攻撃を集中させますか。まずいですね……何か手は」

ガンドッグ2が粒子シールドを全方面に最大出力で展開し射撃を防ぎながら手を考える。

射撃を防げてはいるが、足を止めてしまっているので、チャンスと
思ったソード2がブレードを構えて突撃していく。

「やはり、突っ込んで来ますか」

ダガーを右手に構えて袈裟切りを受け止める。

粒子シールドは銃撃戦には強いが格闘武器にそこまで強くないのだ。
あくまで、粒子によつて運動エネルギーの置換をしているだけなの
で、力が加えられ続けたり、粒子が放出され続けるような攻撃は防
ぎきれない。

その短所をよく理解してのダガーによる防御だ。

ただ、一機は防げたものの続く二機目は防ぐ手段が無い。

それを見越してソード3が切りかかる。

「トドメは任せてよ」

しかし、ブレードが当たる直前にソード3がガンドック4に体当た
りをお願い押し戻された。

「よう、無事か？」

「おかげさまで何とか」

ガンドック2は返答をしながら、つばぜり合いをしているソード2
に蹴りを入れ吹き飛ばし銃撃で距離を離させ、ガンドック2機が背
中合わせで候補生と向き合う。

「そう思うなら今度から俺の扱いを良くしてくれよ？」

「あなたがここにいる敵全機を落としたり考えてあげます」

「お前それ微塵も改善させるつもり無いだろう……」

両者ともに鼻でふつと笑い合い操縦桿を握りなおした。

「私が半分以上落とすのでね。残念ながらあなたは私以下ですよ」

「ハッ！ 言ってくれぬぜ。俺に負けて悔しがるのが良いさ！」

言うと同時に2人が散開する。

友というよりライバルなのだろう。そういう仲の良さも張り合いが
あって楽しそうだ。

緊張感や絶望感を紛らわせる良いコミュニケーションになる。

どうやら隊長機が落とされた精神ダメージからは回復しているよう

だ。だが、ここで分散するとは失策以外の何でもない。候補生が再度包囲と近接攻撃をしかける。

「今度こそ落とすよ！」

ソード3が最初にガンドック2に横切りをしかける。

ガンドック2はバックブーストでそれを回避し、振り向きながら左手のレールライフルを後ろから来たソード2にぶつけ、上からのランス2の斬撃をダガーで防いだ。

「っ！ ライフルは鈍器かよ!？」

面食らいながらも体勢を立て直し、避けられたソード3と共に再度切りかかるために接近する。

ガンドック2はこれに対し、高度を一気に下げることによって相打ちを狙うが、三機とも反撃に備えながら接近していたので、反応して射撃による追撃を入れることが出来た。

三機からのショットガンとアサルトライフルによる銃撃が連続で近距離から当たり、コア損傷による撃墜判定が下された。

「やれやれ、私もまだまだでしたか。4良いとこ見せてくださいよ?」

「あー……何だ? わりとマジに言うが、これ詰んでないか?」
戦力差を考えれば普通勝てる見込みが無い状況だ。

援軍が期待出来ない中での1対9で勝てたら教科書に載せられる。

「主人公なら主人公補正で何とかかりますよ?」

ガンドック2が悪戯っぽく笑いながら言う。

「俺この戦いが終わったら告白するんだ。花束も用意してあるんだよ」

「それ、死亡フラグですよ」

ため息をつきながらガンドック2がつっこみをいれる。

「頑張ってくださいよ。ひっくり返したらほめてあげます」

ガンドック2は通信を切って、もう一つ溜め息について観戦モードに入る。

「みなさん敵は残り一機です。油断せず攻撃してください」

橋の通信が入り、残ったガンドッグ4を9機で包囲し、一斉射撃を続ける。

ガンドッグ4は防御と回避が間に合わず、被弾が増えていった。

機体に搭載されているAIが警告を発する。

「げ、サブブースター被弾で出力ダウンだって!? 勘弁しろっての!」

動きが鈍り、更に攻撃が畳みかけられた。

「あー、くそっ! やられた!」

反撃はしたが、撃破には至らずガンドッグ4は撃墜判定が下された。これで、戦闘は終了だ。

「橋。アームズ、ガンドッグ全機に訓練終了の連絡を入れてくれ」

「了解。訓練参加の全機へ。訓練終了です。繰り返しします。訓練終了です。基地に帰還してください」

撃墜判定が下され待機していた機体も含めて全機が返答を返した。

「了解」

第六章「警備打ち合せ」

第六章「警備打ち合せ」

基地に全機が帰還し、評定を下すためにブリーフィングルームに集合してもらった。

「皆揃ったようだな。訓練ご苦労だった。双方ともに良く動いていたが、今回の結果に満足せず、次はより高みを目指せ」

「「イエッサー！」」

さて、まずはガンドッグの方から総括しよう。

「さて、気付いているとは思うが今回は色々とハンデをつけてもらった。どのようなハンデだったかガンドッグ1分かるか？」

ガンドッグ1が期待通りの答えを返す。

「はっ！ まず一つに数です。次にジャミングによるレーダー障害とバックアップが無かったこと。最後に恐らくですが、作戦指揮がとられていたことです」

「よく三つ目が分かったな」

これは戦闘中に相手の動きを見ていなければ分からない要素のほずだ。しっかり見抜けていたかと感心する。

「指揮官がいない状態で、戦闘に参加している人数が多くなればなるほど統率は乱れやすくなります。しかし、統率がとれた動きでこちらを追い詰めてきたので、恐らく指揮官がいると考えました」

「なるほど。部隊長として良く観察しているな。だが、ハンデはもう一つあるぞ」

そう通常の作戦行動ではまず起こりえないハンデがある。

「何でしょうか？」

「君達の作戦も通信も全て候補生側に漏れていたのだ。指揮官にとって部隊を下げるタイミングと攻めるタイミングが見極めやすい状態になっていた」

ガンドッグ一同がなるほど。と頷いた。

ガンドッグ1が続けて疑問の解消を進めようとする。

「では今回の作戦指揮をとったのはどなたでしょうか？」

知ったら文句の一つでも言われそうだな。と心の中で苦笑いをしながら答える。

「今回の指揮官は私だ」

「大佐?! ってそれ筒抜けどころの話じゃないっすよ! こっちの作戦出したの大佐ですよ!？」

ガンドッグ4が驚きのあまり大声でつつこみを入れるがガンドッグ1が制止する。

「落ち着け。しかし、大佐が指揮官なら納得です。となると前半の陽動も大佐の作戦ですか？」

通信を聞いていたので、彼等が陽動に気づいていたことを知っているし、警戒していたことも知っている。

もし、正しい対応をとられていたら候補生が負けていただろう。

「その通りだ。君達の分断と不意打ちは私が提案した作戦だ。陽動だとは君達も気付いていたようだがな」

「なるほど。見事な采配でした。正しい対処が選べなかった我々もまだまだ未熟ですね」

ちらっとガンドッグ4を見ると拗ねたような顔をしていて、他のメンバーも少し悔しそうな顔をしていた。少しフォローを入れておいてやろう。さすがにハンデ有りとは言えルーキーに破られたのはシヨックだろう。

「単騎の能力なら君達の方が上なんだがな。複数相手は苦戦したただろっ?」

「そうですね。なかなかの腕でした。将来が楽しみです。」

ガンドッグ1から評価されたというとはボーナスも出して良さそうだ。

「では、訓練の録画データを各員の端末に送信しておく。レポートを今日中にまとめてこちらに送るように」

「了解」

次に候補生の総括だ。

「候補生諸君良くやってくれた。先程の話にもあったが、君達は圧倒的に有利な状況で戦った。今回の結果で浮かれず、対等もしくは劣勢な状況でも勝てるように、いっそう訓練に励んで欲しい」

「イエッサー！」

そして次にブリーフィング時に言ったボーナスについて伝えなければならぬ。

「さて、ジャマー施設防衛ボーナスに関してだが」

わざと言葉を切ると皆そわそわし出した。やっぱり気になるんだな。候補生がこちらに熱い視線を送ってきている。

「君たちの今回の戦績を加味し、正規パイロットの内定を出そう」候補生達は一瞬ポカンとし、数秒後に状況を理解したのかガッツポーズをとったり抱き合ったりし出した。

「あー、諸君静かに。続きがある」

とりあえず、彼等を落ち着かせる。

そして、ざわめきが収まりじつとこちらを見つめている。

「ただしだ。正式配属までに訓練をおこたり成績を下げた瞬間に内定を取り下げる。分かったか！」

「イエッサー」

結局のところ正規課程は全て受けて貰うが、実技審査はこれで実質パスだ。

残り一ヶ月も候補生として訓練に頑張つて貰う。

しかし、内定が決まっているからといって、これから手を抜いて腕を落とすような奴なら、そんなのは戦場に出せない。

「では候補生諸君も今回の訓練について、レポートを今日中に提出したまえ。田口軍曹後は任せたまぞ。では解散！」

全員が敬礼をし、ブリーフィングルームから退出していった。

これで午前の主な仕事が付いた。

時計を見ると11時近くになっていたので、一度リフレッシュ

ムに行つて少し休憩をとろうと考えたが、第三世代マップスの申請書が送られてくることを思い出し、携帯端末からメールをチェックした。

なんと既にオヤジさんから送信されていた。ただありがたいことに、既にある程度申請書が埋められている状態だった。

「そこまで量が無さそうだし今のうちにやっておくか」

後々書類の山に埋もれるのは変わらないだろうが、山は小さい方が楽なのでやれるうちにやっておきたいと思う。

ただそれでも……。

周囲を見渡し周りに誰もいないことを確認して溜め息をついたら、ついで口に出してしまった。

「やはり面倒くさい……」

携帯端末をしまい佐官用の個室に戻り申請書をの空欄を埋めていく。最初は面倒だと思つていたが、記載されていた第三世代のスペックが思った以上にハイスペックで実物を見るのが楽しみになり、やる気が多少湧いてきた。

第二世代になつた時も驚いた物だが、今度のはまたすごかった。

パイロットとして乗れないのが少し残念だ。

ちなみに海外の同盟国マップスメーカーは第二世代型の基礎フレームを菱田重工から輸入し、それぞれの国に合わせたカスタマイズを行っている。

独自にフレームを作ろうとする動きもあるようだが、菱田重工のフレームに劣っていたり既存パーツとの互換性の問題やコストの問題で実用化されてない。

一方で、輸出が禁じられている敵対国でも近年マップスが生産されているが、設計はる獲した機体からのデッドコピーで、基本的に第二世代型と同じようなフレーム構造となっている。

将来どうなるかは分からないが、現在はそのような状況なので、基礎フレームの開発が出来るのは菱田重工だけなのだ。

その菱田重工の最新機を模擬戦による性能試験とデータ収集のため

だけとは言え、どこよりも早く使えるのはここだけなのだ。
楽しみにならない訳がない。

20分程で一次申請の書類を完成させ本部に送信する。

更に開発者である菱田重工技術顧問の松平にもメールを送信しておく。

第三世代フレームの視察日時についてと詳細を開発者から聞いたかったのだ。

メールを送信して時計を確認する。

「昼休憩まで後30分か。時間まで、午後の会議資料を見直しておくか」

机の隅に置いてある国境資源会議の警備資料を手にとりめくつていく。

場所は首都ミヤトの国際会議場。

時間は1000から1500までの予定。

会場と都市圏は警察が担当し、郊外を軍が警備。

軍で警備にあたるのは首都から一番近い位置にあるオーカシス陸軍基地の部隊。

国境近くの基地はレトリア連邦警戒のために部隊を展開しながら待機。

南方の空軍と海軍は緊急出動が出来るように待機しつつ、数部隊それぞれから派遣するように通達が来ていた。

ある程度派遣する部隊数は決まっているが、今日の会議で最終決定する予定となっている。

そして次に書かれている一文が、わざわざ警察だけでなく軍まで警備に回している原因なのだろう。

「テロリストによる破壊工作の可能性あり」

毎度毎度のことなのだが、FTE技術の普及とともに様々な既得権益を破壊してきた。

その過程で、レトリア連邦の資源所有権主張もその一つになるのだが、主に化石燃料を輸出していた旧資源輸出国で、反ヤポネ団体や

反FTE団体が生まれ、紛争やテロ行為が幾度か行われてきた。おかげでこういった国際会議の場で気が抜けたためしがない。

そのままページをめくっていき続きを見ていたら、突然携帯端末の着信音がなった。

番号と名前を見ると菱田重工の松平からだった。

警備資料を置き電話に出る。

「もっさん久しぶり！」

やたら元気の良い声だ。

自分より年上の33才で、菱田重工マップス部門技術顧問でマップスの機体から武器まで様々な分野で開発をしている変態技術者だ。

「元気そうだな松平。どうした突然？」

確かにメールは出したが電話で来るとは何かあったかと思っただが。

「もっさんが新しい子の紹介してっけ言うから電話の方が早いかなっけ」

そういうことか。メールの方が見返せてありがたいのだが、また送っけ貰うことにしよう。

ちなみに彼は自分が開発に関わったマップスの事を人扱いしている。

「そうか。ならいくつか聞くが、カタログスペックを見たところ大分第二世代型から大きく変化しているな。互換性はあるのか？」

「一応あるけど、ほとんど意味が無いよ。彼女の全力が見たいなら彼女用にカスタマイズされた第三世代用のパーツと服じゃないと。

ライフルとかのアクセサリーに関しては互換性が余裕であるけどね。」

さらに言うとな女の子扱いで各種装甲は衣装。武装や各種パーツはアクセサリー扱いで、これが変態扱いされる原因だ。

「後この予定されている各種追加装備の超高速強襲装備ってなんだ？」

「それはすごいよー。新しい子専用の新衣装！ 最速のおてんば娘っけ感じ！」

説明をしたくてたまらないと言っているような声だ。少し長くなる

ことを覚悟する。

「どういうことだ？」

かいつまんで説明すると背部に大型の追加ブースターユニットを取り付けて超高速で移動できるものらしい。

しかも、オプションで武器コンテナ・ミサイルポット・ロケットランチャー・爆撃コンテナ等が追加出来るようになっており、超高速で接近し最大火力で敵施設を制圧する運用が出来るとのことだ。

また攻撃性能だけでなく、高速移動中の防御性能も向上させており、補助アームを使用してのシールド操作により高速移動中でも浮遊装甲の操作が可能となっている。

正直相手にしたくない。

「で、こいつに弱点はあるのか？」

「近距離戦は苦手だね。さすがに機動性まで確保は難しかったよ。

脱げば良いんだけど、ちゃんと回収しないと大変でしょ？だから基本的に脱げないんじゃないかな。」

生産コストを考えると確かに簡単にパージ出来るものではない。

それに敵に新装備をろ獲されるとまずい。

なるほど、確かに近距離が弱点だ。

「これ戦闘中に付け外しを自由に出来ないか？」

「やっぱそれ聞くよね。只今研究中の課題で、まっ、そのうち出来るようになるよ。ちなみに簡易版の追加ブースターだけならアクセサリーとして第二世代型でも使えるから良かったら使ってね。」

仕事が増えるが戦闘において足の速さは最重要の要素だ。

採用する価値は十分にある。

そして何かを思い出したように松平があつと声をあげた。

「後そうだ。ずっと前に君の所で試験してもらったダガーとブレイドのオプションパーツのことなんだけど、無事申請が通ったみたいで発注が来たよ。初回生産分は北の国境行きだけど、来月末の会議前には余裕で君達の所にも行くはずだよ。」

「ほお、あれはうちの連中からも評判が良かったからな。楽しみに

待っていよう」

良くダガーやブレードは投げたり弾かれたりして手から離れるので、回収用のワイヤーを付ける試験をしたのだ。

武器ではないので簡単に申請が通ったから良かった。

「あれはなかなか良いアクセサリだね。ポイ捨てなんてはしたないことを、うちの子にはしてほしくないからね。まっ、今はそれよりもっと凄いもの作ってるけど。ってことで試験用のを一緒に送るからまた頼むよ」

これでまた仕事が一つ追加。思わず頭をかいてしまった。

この話で性能試験をしたライフルをふと思いついたので、ついでに聞くことにした。

「それは楽しみだが、あのライフルと違って良いのかも分からんあれはどうなった？」

「ふふふ、勿論データを貰ってから更にすくなくなつて完成してるよ。そろそろ採用の通知が来るかな？ 今度おまけで正式版を一緒に搬入させるよ」

自信満々の声でライフルの出来を保証している。あの化け物ライフルが正式採用されるのか。送ってもらえるのは確かに助かるが、一体どう使えば良いんだ？ あのロマン武器……。

その後も新装備や新機体の情報をもらい長いこと話しをしてしまった。

そろそろ食事に行つてくると松平が話を終えようとした時に気になることを言い残した。

「そういえば技術者仲間から聞いたことなんだけど、どっかで最近大型のFTE兵器が出来たとかなんとか。まあ、うちの子たちが負けるとは思わないけどね。んじゃまた」

「ああ、またな。メール頼む」

時計を見ると12時半を過ぎていた。

こちらも昼食を取りに食堂に向かおう。

多分、賭けの結果が公開されて賑わっているのも終わる頃だろう。

と思ったが、食堂につくとまだ混雑していた。

モニターの前では賭けの配当金が配られていたが、そろそろ行き渡ったためかその周辺に人は少なかった。

食堂の所々から賭けについての議論が聞こえる。

リーダーが死んでいる状態での待ち伏せの対処などを議論しあっているようで、今回もこの賭が良い教材になったようだ。

カウンターまで行くと食堂のおばちゃんに声をかけられた。

「お、もっちゃん来たねー。今日の話題は全部あんたがかっさらっててるよ。で、今日は何にする？」

おばちゃんに階級は関係無いのだ。

特別扱いされないのは基地内では珍しいので悪くない。

何にしようかとメニューを見ていたら、金曜日のカレーフェアをやっていた。

「そうだな。カレー辛口とミネストローネのセットを頂こう」

「はいよー。ちょっと待っててね」

盆にカレーとスープそしてサラダが置かれ手渡された。

香辛料の香りが鼻腔をくすぐり、スープの鮮やかさも食欲をそそる。サラダにドレッシングをかけて空いている席を探すと、田口軍曹の隣がたまたま空いていたので隣を失礼することにした。

「田口軍曹、隣は空いているかな？」

声をかけると田口軍曹が体ごとすごい勢いでこちらに振り向いてきた。

「大佐殿?! もちろん空いております」

お盆を置き席につく。

「しかし、佐官がこのような所で食事とは。自室の方が快適ではないのですか？」

「こつこつ賑やかな場所は昔を思い出して好きなのだよ。いただきます」

手を合わせてから食事を始める。

「大佐殿がそうおっしゃるなら、ただ佐官としてやはりここにいる

のは少しふさわしく無い気がしますよ」
相変わらず真面目な男だ。

それにしても今日の食事も美味い。
甘さ酸味塩味が良いバランスで成り立っており、そこに溶け込んだ
具材の味がより深みを持たしている。

そして鼻に抜ける香辛料の香りと舌への刺激が次の一口を勧める。
一緒についてきたミネストローネも野菜の甘みがよく溶け込んでお
り、辛口のカレーと実に相性が良い。

うん、今日も食事が美味い。

食事は士気を維持する上で最重視される一つの要素だ。

不味い食事はそれだけで士気が削がれる。美味しい食事はそれだけで
心が踊る。栄養価の方も不足しがちな野菜類を細かく砕き料理に混
ぜ込んであるので、身体にも良い。

おばちゃんの旦那であるシェフの腕には感謝してもしたりないくら
いだ。

舌鼓をうつっていると田口軍曹から模擬戦について話題を振られた。

「今日の模擬戦さすがでした。おかげで儲かりましたよ」

ハンデありとは言え、正規組に勝てたのは私の力ではなく、軍曹の
訓練のおかげである。指導の礼を伝えねばなるまい。

「いや、私は何もしていないよ。君が候補生達を鍛え上げてくれた
おかげだ。ありがとう」

軍曹は椅子から立ち上がり深々と頭を下げた。

「光栄です。残り一ヶ月で更なる力をつけられるよう鍛え上げてみ
せます」食事時くらい気楽にしている欲しいと苦笑して、座るよう
に促して話を続ける。

「他の基地に配属になるやつも多いだろうが、残って貰いたい候補
が何人かいるな」

候補生から無事正規パイロットになれば各基地に異動する。

その中で何人かはこのまま残るのだが、ある程度こちらの希望が通
るらしい。

ガンドツクの3から5のメンバーはそれでこの基地に残せた。

「今日の訓練だとクロスボウ1の武田ですか？」

さすが指導しているだけあってよく分かっている。

「正解だ。あの狙撃の腕はなかなか良い。それにソード2の伊東。

ブレードの戦術は面白かった」

今日の模擬戦の戦いっぷりを思い出しながら伝える。

「確かに。ですが、今日の模擬戦に参加していない者も良い腕を持っている。決定にはいささか早計かと。」

それもそうかと思ひ、他の候補生の話を詳しく聞きながら昼食を食べた。

話を聞いていると、どうやら候補生五十人の特性を全て把握しているらしい。

本当に教官が向いている男である。これは現役パイロットを引退させて教官職につかせるべきなのではないかと真剣に悩んでしまう。

今度の候補生が卒業するころにでも意向を聞いてみよう。
食事を済ませて個室に戻り、会議の最終準備に入る。

資料をまとめてファイルに詰め、ノートパソコンとお茶の入ったペットボトルを会議室に持って行く。

書記の係りが、モニターを起動し、こちらのカメラも起動させる。

時間の二時になると一斉に参加者の顔が映った。

警察・陸軍・海軍・空軍のトップに警備に参加する基地のトップが揃い踏みだ。

特例で大佐に昇進した身にとってはここにるのが何度やっても場違いであるように感じる。

丸顔に無数のしわが刻まれた顔の人が警察庁長官で、今回の打合せの議長を務めている。彼の低く重い威厳のある声により打ち合わせが始まる。

「諸君全員揃ったようだね。では今から国境資源会議の警備打ち合わせを始める」

手元のモニターに首都の地図が表示された。

碁盤目上に区画が整理されている都市でその中央付近に国際会議場がある。

「事前に配付した資料通りの編成で警備にあたる。国際会議場付近は我々警察の特殊機甲部隊が警備にあたる。警察仕様にカスタマイズされたマップスを東西南北500mに2機ずつ、会議場正面に3機、背面に3機、左右側面に3機ずつ。計20機を配置する。また場内にもテロ対策部隊を50名配置する。これで会議場付近は万全でしょう。また市内には検問所や私服警官を配置し、不振人物を発見し次第確認していく。市内の方はこのような形で依存無いか？」警察庁長官が確認を要請する。

とりあえず、今まで通りの布陣で文句のつけようがない。他の参加者も頷いている。

「では次に郊外の警備について頼む」

オーカシス陸軍基地の徳川大佐が説明のボタンを受け取った。

白髪混じりのグレーヘアでほりが深いダンディーな方だ。年齢は確か50前後だったはず。

「郊外警備は首都から東西南北に四つの拠点を用意する。それぞれの拠点到マップスを20機ずつ。計80機を配備する予定だ。これで首都に接近する車両や航空機の監視を行う。」

モニターに映る地図の倍率が下がり、より広い範囲が映し出され、拠点到赤いマークが打ってある。

これも前回と基本的に同じ配置となっている。

「基本防衛網はこのようになっていて。今回もこれに加えて遊撃部隊としてキーナ空軍基地の部隊、そしてカシゴマ海軍基地の部隊を10機ずつ応援に出して貰いたい」

マップス10機で確定か。

南側から攻められても何とかなる数字だと思っ。

「了解した。ところで応援で派遣される部隊の配置はどうなっている？」

事前の資料には無かったので確認をとる。下手すれば戦場になるのだ。

自分の部下がどういう扱いを受けるのかを知らなくてはならない。徳川大佐がこちらの質問に答える。

「空軍と海軍には首都の上空を旋回してもらおう予定だ。我々が敵を見逃したときのために準備してもらいたい。旋回範囲を地図に出す」
手元の地図が拡大されて赤い枠が現れる。

「これが君達の警備範囲だ。高度についても続けて説明しよう」
都市の形が立体的になり、視点が上から見下ろす俯瞰図から、横から見た図に変わった。

「空軍には都市上空5kmの警備を、海軍には都市上空2kmの警備を頼みたい」

なるほど、首都の地上は警察、郊外は陸軍の大部隊、低空は海軍、雲の上からは空軍か。これなら敵の侵入はどこかでキャッチ出来るだろう。それにこの高度なら見通しが効くので、奇襲は受け難いはずだ。

派遣しても一瞬で全滅は無いだろう。

「了解した。では要求通りこちらからマップス10機編成の一個中隊を派遣する」

続けて海軍の方も派遣を決定する。

「感謝する。空軍の方に追加注文があるのだがよろしいかな？」

大体予想がついた。おそらく広域レーダーを積んだ偵察機のAWACSを出せと言うことだろう。

「AWACSを追加で派遣してもらいたい。地上にも防空レーダーを設置する予定だが、念には念を入れておきたいのだよ」

やはりか。ただ、至極真つ当な提案だ。乗らないわけにはいかない。

「分かりました。ではAWACSも同時に派遣します。」

これが終わったら偵察部隊にも通達しておかないとな。

ノートパソコンにメモを今のをメモしていく。

「助かるよ。他に何か聞きたいことや提案は無いかな？」

応援が取り付けられたことに安堵して、少し顔が緩んだ徳川大佐が上機嫌で質問を促した。

海軍の毛利大佐が組んでいた手を解いて、右手を軽く挙げる。

眉間に深いシワがいくつも刻まれた眼光鋭い人だ。まるで老狐のようである。

「派遣した部隊の指揮は誰がとるのかな？」

大事な自分の部下たちだ。出来れば自ら指揮を取りたいのだろうかと思案していると、徳川大佐がにっと笑顔になった。

「安心して貰いたい。警察、陸海空軍はそれぞれ独立で指揮してもらおう。その代わり指揮官の間は通信をつなげて連携する」

毛利大佐がふむ。と頷きながら腕を組み直してその意図を確かめる。「指揮系統を一つにまとめた方が楽ではないか？」

徳川大佐は笑顔を崩さぬまま答える。

「確かにそうかもしれないが、いかんせん私はこの広く展開している部隊の指揮で手一杯だな。それに所属は君達の部隊だ。直属の上官が指揮した方が動かしやすいだろ？」

「ふむ、了解した。」

どうやら毛利大佐は回答に納得したようだ。

というか、これってへまをしたら責任を負わせるための口実じゃないよな？

陸上は陸軍が大部隊を展開するので、数の暴力で多分抑えられる。

海軍の警備は低空なのだが低空侵入は陸軍の防空網に確実にひっかかる。

つまり上空からの侵入があれば丸々空軍の、そして私の責任となる。そうなれば色々喜びそうな連中がいるのだが。いや、ただの考え過ぎか。

それにそれを防ぐためにAWACSの派遣を要求されている。

恐らくこの件に関しては味方も敵もない。

邪推を捨てて、一口お茶を飲んでから、今のやりとりで生まれた疑問を聞いてみる。

「今の話に関連して、質問よろしいですか？」

徳川大佐がこちらに手のひらを向けた。

「どうぞ」

「指揮官の所在はどこになるのでしょうか？」

派遣した中隊の指揮をとるために私も首都に向かう必要があるのかどうかを確認したかったのだ。

「所属基地から指揮をとってもらおう。この説明は陸軍大将からして頂きたい」

陸軍大将が咳払いをして声を出す。

「理由は簡単だ。毎回のごとくレトリアが軍を展開する可能性がある。その中で北の防衛だけに気を捕らわれていると、南や東西からの侵攻を防げない。そのため、諸君の基地でも地域の警戒に当たって貰うため、基地からの指揮をもらう」

なるほど。これは最悪二方面指揮をする必要があるのか。

願わくは何も起きないことだ。

「了解しました。では、最悪の事態として首都と所属地域の二方面指揮を想定して用意すれば、よろしいでしょうか？」

陸軍大将が大きく頷いた。

「うむ、それで良い。国外からの侵攻があれば軍本部から指令が下る。いつでも動けるように用意しておきたまえ」

海軍大将と空軍大将も同調して頷く。やはりトップとの会議は緊張する。

なんだこの緊張感は？

私は一昨年まで中尉だった人間で、この場に参加している者から見ればひよっこも同然だ。

モニター越しのはずなのに、不思議な圧力を感じてしまう。

質問で話しかける時にこちらの緊張や焦りを表面に出さないだけで精一杯だ。

不思議な喉の渇きを感じてもう一度ペットボトルに口をつけ、お茶を飲む。

徳川大佐は話が終わったと判断し、次の質問を促すが、誰からも質問は出なかった。

「よろしいようだね」

議長の警察庁長官が話を区切る。

「では、次に当日の両首脳の動きについてだが、このようになって
いる」

首相は公用車で首相官邸から国際会議場へ。レトリア大統領は空港から公用車で国際会議場に向かうルートが矢印となって地図上に表示される。

基本的に大通りを通る最短ルートだ。

「両首相の護衛は我々警察のみで行う。公用車と併走しながらパトカーを走らせる予定だ。また移動する時間帯はこの移動ルート近くの道路を全て封鎖することになっている」

日曜日だから良いものの、平日でやったら一般市民は大混乱だろうな。

会社への遅刻が普段の何倍になるのだろうか？

きつと地下鉄乗車率と一緒にレコード記録になる。

ちよつとその光景を想像して顔に出さないように苦笑いをしていたら、海軍大将が何故マップスを配置しないのかと問いただした。

「政治的に色々あるのだよ。大統領に銃をつきつけながら連行している。けしからん！ と見る輩もいるそうだね。政治家は火種を下手に増やしたくないそうだよ。外交的には悪くない判断とは思わな
いかね？」

過激派の刺激は出来るだけしたくないってことか？

確かに今の大統領は会議に参加して話し合いで解決しようとする穏健派と言えば穏健派の人間だ。

過激派にとって、そんな穏健派の人間を銃で脅している国は蛮族国家である。即刻打倒すべし。と捉えられてしまうかもしれない。

だが、彼がいなくなれば過激派が押さえられなくなる。

それを考慮すると、過激派に襲われる可能性がある人なのだから、

軍隊のマップスによる護衛が必要だと思ったのだが、政治的な言い
がかりを考えると納得がいった。

そうか、それで警察の護衛で、パトカーなのか。これなら過激派も
言いがかりが出来ず、襲われても最低限の対処が出来るという作戦
だろう。我が国の首相の方にもマップスが配置されないのは、威嚇
だと過激派にとらわれないようにするためだろうか。

海軍大将もすんなり納得したようだ。

「なるほど。最低限で最大限の護衛……ということですか。そちら
も苦労しますな」

どうやら私の考察はあっていたようだ。

「お互いさまですよ。万が一の際は是非お力をお借りしたい」
私以外の参加者が皆笑い合っている。

今まで全員が同じような経験をして、あるあるネタが通じたのを楽
しんでいるようだ。

「お偉い様方はいつも無茶をおっしゃる」

「なに、それでもやりとげるのが我々の仕事だ。それを誇りに思お
うじゃないか」

私にはとても笑える状況じゃないと思うのだが、愛想笑いでこの雰
囲気を乗り切ることにしよう。

これが年期と経験の差というやつなのだろうか。

「話がそれてしまったな。本題に戻すでしょう」

警察庁長官が咳払いをして、脱線した流れを元に戻した。

皆の切り替えもとても早く、あっという間にぴりつとした空気に戻
った。

「移動に関しては先ほどの通りだ。そして考えられる最も狙われや
すいタイミングとして、会議後の記者会見が考えられる。わざわざ
国際会議場の広場にステージを作って、大勢の記者の前で話すので
な。入場整理をかけているとは言え、どうしても紛れ込まれやすい。
これに対しては私服警官の大量動員と壇上のSPに任せるしかある
まい」

郊外に展開される陸軍にはどうすることも出来ないし、上空を旋回している海軍にも空軍にも、群衆の中からテロリストを捕捉することは難しい。

確かに人間による奇襲であれば記者会見のタイミングがベストであるろう。

まったくひどい無茶をしてくれるものである。

「これに関して軍の方からは何も出来ませぬな」

眼鏡をかけた少しやせ気味な初老の空軍大将が確認をとる。

「残念ながらそうですね」

特に何もすることが出来ないので、警察庁長官が次の議題に進める。

「そして次に帰路の護衛だ」

モニターの地図を見ると行きと同じように矢印が描かれている。

両首脳の帰りの経路は行きと同じルートのようにだ。

「基本的に行きと同じルートを通ってお帰りいただくことになっている。警備方法も行きと同じで、パトカーによる護衛だ」

となると帰りも緊急時以外では、軍の方で何か特別な事はないか。

「今までののは、平和にことが進んだ場合のルートになる」

失礼と。断りを入れて、警察庁長官はコップに入った水を飲み、喉に潤いを与えて再度説明を始めた。

「襲撃があつた場合の避難経路についてだが、地図で説明しよう」
地図の上に8つのポイントに赤い点がうたれた。

「基本的に、襲撃犯とは反対方向の待避ポイントに裏道を使いながら避難してもらうつもりだ」

特にこのポイントには頑丈な施設やシェルターといったものは無かつたと記憶しているので質問をした。

「この待避ポイントはこういう施設でしょうか？」

警察庁長官が不思議そうな顔をしていたが、秘書の耳打ちにより納得したようだ。

「そうか、君は今回首都の警備は初めてだったね。これは緊急事態専用の地下通路だ。他の主要都市に直行するリニア車両が用意され

ている」

噂には聞いていたが、こんなところにあつたのか。

ということはそのリニアを使って安全なところまで避難すると言つことだな。

念のために確認をとる。

「では、その待避ポイントに到着次第、両首脳はリニアで安全な都市に待避するという認識で正しいでしょうか？」

警察庁長官がその通りだと頷いた。

なるほど。普通の都市地下間にも地下高速鉄道があるのだが、まさか首相専用の緊急経路まであるとは恐れ入った。

「質問はもうよろしいかな？ 話を戻すぞ。両首脳が乗っている公用車はもちろんFTE粒子制御による防弾仕様だが、さすがに大火力の攻撃を受ければ簡単に破壊される。公用車の位置はGPSで常に把握している。軍の方にも位置情報を常に提供するので、我々と協力して、一機たりとも敵を近づけさせないで欲しい」

なるほど、その時は海軍と空軍の遊軍が援護に入る訳か。徳川大佐が話に続く。

「都市圏で襲撃を受けた場合、陸軍からの援護はどうしても遅れてしまう。君達海軍と空軍が頼みの綱となる。よろしく頼むよ」

私の想定通りか。毛利大佐も分かりきっている様子で腕を組みながら頷いている。寝ているようには見えないので本当に分かっているのだろう。

会議の両首脳の移動について、一通りの説明が終わったので、質問は無いかと聞きながら、警察庁長官が参加者に確認をとる。すると海軍大將が緊急事態における大事な質問を聞いた。

「市街戦が起きた場合、市民の避難は警察でやってもらえるのか？」
国際会議場はオフィス街にある。日曜日と言えども人は多少いるし、避難経路の中には商業区など人が集まる場所もある。

確かに戦闘が始まったら巻き込まれる人が出てもおかしくない。

警察庁長官が非常に重いため息をする。どうやらあまり良い話は聞

けそうに無い。

「いつものことながら、避難誘導は潜伏させている私服警官に取り仕切ってもらう予定だ。だが、全ての地区で避難誘導が完了するまで、少なくとも10分はかかるだろう。避難が完了していない区域では出来るだけ攻撃を自重して欲しい」

空軍大将が困った様子で頭をかいている。

「やはり、そうなるか。10分攻撃をせずに注意を引き付けているだけ。というのは毎回言っているが、なかなか骨が折れるぞ？ 最低限の自衛は認めて欲しいものだが」

恐らく、敵部隊の攻撃が建物に当たったり、こちらの攻撃が市民を巻き込むリスクを考えての判断だろう。

何か手はないかと思案していると、ちよっとした思いつきが生まれた。

お茶を勢いよく飲み気合いを入れる。

「一つ提案があるのですが、よろしいですか？」

参加者が一斉に反応し、「ほう」とか「む？」と漏らしながらこちらに注目する。うっ、緊張する。

「まず、確認になりますが。避難が完了していない区域での戦闘は、流れ弾が市民に当たる危険性があるので自重するのですよね？」

警察庁長官が頷く。

よし、一つ目のハードルはクリア。

「そうになると、敵の射線上に建物を入れさせないように、更に建物に隠れられない。そして、こちらの射線上にも建物が当たらない位置からの攻撃というのはいかがでしょうか？」

警察庁長官が頭をかきながら私の提案の真意を問いだした。

「そんな都合の良い場所があるのかね？ 基本的に碁盤目上で見通しの良いところがあるとはいえ、建物の陰には簡単に隠れられるぞ」

その通りだ。街中や低空ではそんな都合のいい場所は無い。

空軍所属でマップスによる戦闘を多く経験した者だから見える位置がある。

「あります。その都合のいい場所。敵の真上です。高高度からのマップスによる狙撃ならピンポイントで敵のみにダメージを与えられます。戦闘機と違い上空での空中待機が可能なので、安定した狙撃が可能となっています」

警察庁長官は顎に手をあてながら考える素振りをしながら続けて聞いてきた。

「なるほど。敵が旧兵器の車両タイプならそれで何とかなるだろう。ではマップスだったらどうする？ 空中戦に持ち込まれたら、やはり流れ弾が市外に落ちるぞ？」

そこがこの提案の最大の問題だ。だが、それでも地上で注意をひきつけるだけより遙かにマシだ。

「その通りです。なので、空中戦に持ち込まれたら、こちらは常に敵の上空に位置するよう動き、こちらからの射撃は止めて近接格闘戦をしかけます。これなら都市部に流れ弾が当たりにくくなります」

警察庁長官はなるほどと頷いた。

「どうやら2つめのハードルもクリア。」

「それなら確かに注意を引きつけるだけよりは良さそうだ」

警察庁長官は納得したようだが、同じく空の上に配備される海軍の毛利大佐から質問が来た。

「なるほど。坂本大佐。お若いながらも良い戦略を思いつく。しかし、そうなると我々海軍の低空部隊はどうすれば良い？」

多少気の引ける提案だが、これには乗ってもらわなければならない。「海軍には敵部隊の注意をひきつけて、上空に上がられないようにして頂きたい。それも基本的に防御のみで、です。敵は建物を盾にすることが迷い無く出来るので、低空と地上で海軍と警察の部隊が展開していれば、わざわざ弾が当たりやすくなるような空の上にかかることは無いはずです」

毛利大佐は大笑いしてから、こちらを睨み付けてきた。

「君には冗談のセンスもあるようだ。この私の部隊におとりになれと？」

言葉に怒気が含まれているように聞こえる。部下をおとりにさせてくれと言っているのだ。やっぱりそうなるよな。しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

「毛利大佐。申し訳ありませんがこれは冗談ではありません。確実に敵を撃破するための戦略です。毛利大佐が擁する精鋭の海軍部隊が敵をひきつけて、敵を地面にはりつけられれば、狙撃による敵部隊の撃破が容易となるのです。貴官の部隊が機能すれば、私達空軍側もより力を発揮出来るのです」

相手のプライドをくすぐりながら交渉を推し進める。

「だが、それでも基本防御のみというのは厳しい」

やはり簡単に崩れてはくれないか。警察庁長官から待ったをかけられそうだが、譲歩案を出してみる。

「ならば、敵に当たらなくても道路に当たるように射撃、真上から接近しての格闘攻撃といった都市の被害が少ない戦法を徹底していただけないでしょうか？」

右まゆげをぴくっと動かし、こちらをにらみ続けてくる。

くっ、胃が痛くなってくるな。

「なるほど、牽制まではさせてもらえると？」

先ほどと変わらない怒気の含まれた低い声だ。

「その通りです。貴官の部隊ならば、その牽制で敵部隊を撃破することも可能だと思います」

毛利大佐が軽く吹き出し、大笑いをし始めた。

あれ？ さっきまで凄い迫力だったはずだ。何が彼を笑わせたのだろうか？

不思議そうな顔をしていた私に毛利大佐が真面目な顔をして向き直った。

「いやー、すまんすまん。君との問答があまりにも愉快でな。その歳でなかなか弁が立つては無いか。戦略眼もなかなかのものだ。派遣された数々の実戦で訓練されたのかな？ そして何よりもその度胸！ なるほど、特例とはいえその歳で大佐に任命されただけはあ

るな」

なっ、こっちが試されていたってことか。この老狐なかなかやってくれる。

思わずポカンとしてしまったが、これで警察庁長官から許可が出れば、この方法でいけるはずだ。

「いかがでしょうか？ 長官殿」

腕を組んでうなり始めた。どうなる？

沈黙が場を包んだ。実際には、ほんの5秒程度だったのだろうが、その数倍に感じられた。自分の部下の生死が左右されるのだ。出来るだけ危険が少ない方が良いに決まっている。

短くて長い沈黙が破られる。

「分かった。それで行こう。ただし、必ず建物には当ててはならない。それと出来るだけ弾を外して流れ弾を作らないでくれ。こちらも部下を死なせる訳にはいかない」

良かった。提案が通った。たまっていた唾を飲み込む。

徳川大佐が追加の提案をする。

「おそらく避難が終わる頃合いに陸軍が到着するだろう。それまで持たせてくれれば、こちらで必ず鎮圧する。あまり無理をしなくて良いからな」

その通りだ。住民の避難が完了するまでの10分。この間の目標は住民が安全な場所に退避するまでの時間稼ぎで、私がした提案は時間稼ぎの方法だ。敵を完全に撃破するための方法では無い

「ありがとうございます」

これで、参加するメンバーが集中砲火を浴び続けて反撃も出来ずに撃墜されることはなくなるだろう。

陸軍大將が今の問答をまとめてもう一つの確認をとる。

「ということは、基本的にどのタイミングでの襲撃も、この方法で避難と時間稼ぎを行うということでもよろしいかな？」

全会一致で合意する。

これで警備の大体の方針が最終決定されたようだ。

やれやれ、終わったら手洗いに行こう。

警察庁長官が話をまとめて、終了の挨拶を始めた。

「これにて国境資源会議警備打合せを終了する。参加して頂いた皆様。ごくろうさまでした」

席を立つて皆で一斉に礼をして打合せが終わった。

書記官がモニターと通信を切り、並んでいたそうそうたるメンバーの顔がモニターから消えた。

気が抜けたせいで、部屋にまだ書記官がいるのに思わず大きなため息をついてしまった。

「はあ……疲れた……」

書記官がこちらのため息に気づき、苦笑いを返してくる。

「おつかれさまです大佐。さすがに緊張しましたか？」

「当たり前だ。あのメンバーで緊張しない同世代はいないと思うが」
書記官は何故かほっとしたような笑顔になった。

「何か変なことを言ったか？」

「いえ、大佐も人間だと思って安心したのです。その歳で佐官なので、一時期、一部の間でAIを積んだ精巧なアンドロイドなのではないかと噂が流れていましたから。ちなみに以前ここにいた大佐もこういった会議は緊張して、始まる前と終わった後には大体トイレにいましたよ。では今回の議事録をまとめてくれるので失礼します」
書記官はこちらに敬礼をして部屋を出て行った。

いや、確かにめいっばい背伸びをしながら仕事をしているのだが、
アンドロイド扱いとは……。

もうちょっと素を出した方が良いのか？

椅子の背もたれに全体重を預けてノビをして身体をほぐす。
腕時計を見ると15時を回っていた。

「後は書類仕事と派遣部隊についてか」

だが、その前に……

「予想以上に疲れたか……」

そのまま部屋に戻ることに無く軽く居眠りをしてしまった。

目が覚めて時計を見ると既に16時だ。

この会議室に人が入ることはあまり無いのだが、今日は誰も来なくて本当に良かった。居眠り姿を見られたらどうなっていたことか。ちよつとしたサボり行為に反省する。

次からはしつかり部屋でしょう。

あれ？ それも違うか……

そんな仕方の無いことを考えて、少しボーツとした頭で手洗いに寄つてから執務室に戻った。

第七章「それぞれの絆」

第七章「それぞれの絆」

執務室に戻った後は、とにかく書類と格闘するつもりでいたが、端末を立ち上げると、先ほど打合せに参加していた眼鏡の空軍大將から極秘回線で連絡するように。とメールが入っていた。背筋が凍るような寒気に襲われ、眠気が吹き飛んだ。

「うっ、さっきの居眠り中に来てたか」

気が進まないが、連絡するしかない。

部屋に設置してある通信機を極秘回線専用モードに設定する。

機械音の案内が流れ、指示された通りに行動する。

指紋確認……OK。網膜チエック……OK。声帯認証……OK。

（キーナ空軍基地、坂本龍大佐と認識。どちらにお繋げしましょう？）

「空軍総司令部、ミヤソシゲル宮野茂空軍大將につないでくれ」

30秒間の呼び出し音後、空軍大將が通信に出た。

「遅かったじゃないか坂本。喋り方はいつもの気楽なやつで良いぞで、遅くなった理由だが君のことだ。また居眠りでもしていたのではないか？」

バレていた。何を隠そう、この人がマップス特殊部隊を編成した男で、私の直属の上官だった人だ。パイロット時代の時もサボリを色々で見抜かれていた。

「相変わらず、エスパーのような方ですね。私に監視カメラでもつけているのですか？ ……正解です」

滅茶苦茶笑われた。

「おい、どうしてくれる？ 笑い過ぎて腹が痛いぞ。ハハハハ」

「どうやってこれを止めようか……」

「そこまで面白いこと言いましたか？」

「そりゃあ、まあな。さっきの会議のクソ真面目な態度を見て、立派に成長したと思ったら、大して中身は変わってないようだな。疲れたら即居眠りしていた癖もそのままか。書類の山の中でよく眠ってないか？ さっきの会議ガチガチに緊張してちびらなかつたか？」

「少なくとも今まで漏らしたことは無いですよ！ それに書類の中で居眠りもここ数年してないです。宮野司令こそ、会議の時だけは真面目なんですね」

精一杯の皮肉を返す。そう、この人は会議とか公式の場では真面目振るのだが、根本的に破天荒な人なのだ。

ほとんど新兵しか乗っていない実験兵器のマップスを戦場に出したり、私を大佐に推薦したのも彼だ。

「おう、我が輩はいつでも真面目だぜ？ お前もあのメンツの中で緊張しないくらいに早く成長して欲しいもんだ。ひよっこ大佐君」それも見抜いていたのか、段々頭が痛くなってきた。早く本題に入ってもらわなければからかい続けられそうだ。

「で、今回は私をからかうためにわざわざ極秘回線を使えと指示したんですか？」

「久しぶりの二人きりの通信なのにつれないねえ……まあ良い。本題に入るか」

最後に宮野大将の声音が変わった。どうやら本気モードのようだ。

「坂本。お前今回の警備体制についてどう思う？」

先程の会議で決定したばかりなのにどうしたと言っのだろう？

「どう思うと言われても、両首脳を狙うテロリストに対しては有効な布陣かと」

「そうだ。恐らく両首脳を狙った攻撃にはこれで良い。ただ、目的が他の物にあつたらどうなる？」

「どういうことだ？ 彼には一体何が見えている？ ただ、すぐには思いつかなかつたので諦めて聞くことにした。」

「どういうことでしょうか？」

「いや、例えばだ。我が輩がテロリストではなく、レトリアの軍人

や過激派の政治家だったら会議のタイミングに首都を襲う際、首脳を襲うのは陽動にしようと思ったのさ」

首脳襲撃が陽動？ そう仮定すると、何か別の目的があることになつてしまう。

「となると、別に本命があると言うことですよ？ でも一体何が？」

「多分我が輩よりも君の方が詳しい物だよ」

私が宮野大将よりも詳しい物……

「なるほど。菱田重工のマップス関連ですね。それも噂の第三世代がですか？」

「そうだ。敵はヤポネの同盟国が持つ第二世代型マップス強奪作戦を実施してでもマップスを手に入れた。となると、さらに発展した第三世代型はどうやって手に入れる？」

あの時は確か、秘匿されていた各種パーツを生産する工場と、パーツを集めて機体を完成させる組み立て工場、そして更に基地に至るまでの全ルートが漏れていて、組み立てが完了した機体の搬出中に強奪された。と聞いている。

「なるほど。首都に警察や軍の注意を最大まで引き付けられるイベントが首脳襲撃。ということですね。で、その間に首都にある菱田重工の本社と工業地区にある工場で、第三世代型のろ獲、もしくはデータの収集を行うと？」

「そんなところだ。勘の良さはさすがだな。我が輩が鍛えただけはある」

素晴らしい自画自賛っぷりだが、ある意味誘導尋問的にこの答えを導き出したので、否定はせずに皮肉だけ返しておこう。

「その最後の一言は本来私が言うべきことなのでは？」

「なに、君の心境を代弁したまでだ。で、勘の良い君はここでどうするのだ？」

あっさりかわされた。しかもカウンターのおまけつきで。

恐らくこの口振りだと既に答えは持っているのだろう。

こちらが試されている。

「そうですね……まずは菱田重工の方に警戒するよう連絡を入れる。そして、PMCを雇ってもらおうよう進言する。次に元特殊部隊にいた松平に、いつでもマップスで出撃出来るように武装とメンテナンスをするように伝える。といったところですかね？」

基本的な模範解答だろう。PMCも使えばある程度の時間稼ぎは出来るはず。

「まあ60点の及第点だな。普通に考えればその案なのだが、その案だと襲撃があった時は大きな被害を受ける。日曜とはいえ出勤者がいるはずだ。最悪の場合、貴重な技術者から死者が出かねん。戦闘が起きても民間人から一切の犠牲者が出ない方法を考える」

襲撃の際に機体やデータが強奪されず、技術者を始めとする民間人も現場にいらなくてよく、敵を撃退する方法か。

頭をフル回転させて、策を考える。すぐ答えが出せず沈黙が10秒ほど間続いてから、宮野大将が口を開いた。

「確認するぞ？ 敵の目的は機体とデータの強奪。ついでに技術者を拉致する可能性もあるな？ ということはだ。建物を破壊することとはまずしない。泥棒が金銀財宝の入った木製の宝箱を、持っている爆弾使つてあける事はないだろ？ 空っぽだと分かれば、八つ当たりでぶっ壊す気にもなるかもしれんがな」

宮野大将が軽く笑っている。どうやら自分の例えがうまく言えたことに対して御満悦のようだ。

ただ、おかげで私も何が言いたいか分かった。

「なるほど。会議前に中身を引っ越せ。ってことですか」

「ほほあ？ それで？」

すごく楽しそうに相槌をうつてきた。

まったくこの人は本当に良い性格をしている。

「試験用の第三世代型は、来月の資源会議前までにこちらの基地に一機送られてきます。そのタイミングで第三世代型に関する部品とデータをキーナ空軍基地に全て移動させて、首都の方は空にさせま

す。これなら出勤する人間もいないでしょう」

昔読んだ本にこんな作戦があったな。確か名前は空城の計。それは確か、敵が攻めてきているのに、あえて部隊を展開しないまま城門をあけて、何事も無かったかのように振る舞い、罠があると思わせる計略だ。今回はその名の通り中身が空っぽになっているのだが。

「良いねえ。素晴らしい案だ。ただ、宝箱も吹っ飛ばされちゃ困るんだよねえ？」

言いたいことは分かる。設備だって貴重な物だ。破壊されて良いことなど一つもない。もちろん対処方法は考えてある。

「宮野さん。ミミツクってご存知ですか？」

言いたいことはきつと伝わっているのだろう。

相づちを打つ声音は相変わらず楽しそうだ。

「真似する。とか擬態。とかその辺の言葉だな。で、それがどうした？」分かつている癖になあ……。それがどうしたの？ 声が踊っているじゃないか。顔が見られたら確実にニヤニヤしてるぞ。

「昔やったゲームの話ですが、宝箱があつて喜んで開けようとする、実はかなり強いモンスターで、下手をするとゲームオーバーになるようなトラップがあるんですよ。今回はそれを真似します」

「ほお？ それをどのように真似る？」

さて、ここからは割と無茶な要求だ。心してかかろう。

一つ深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

「菱田重工の地上倉庫に、第二世代型マップスに第三世代型の装甲を貼り付けたのと、完全に装甲だけのハリボテを設置します。それも敵から見えやすいように。敵がマップスや車両で襲撃をしかけるなら、偽装マップスで対処出来ます。そして、本社の方は、データ採集のために歩兵が投入されることが想定されるので、施設内に社員の格好をした陸軍部隊に待機してもらい、歩兵を迎撃するのはいかがでしょうか？」

拍手の音が聞こえる。どうやら正解のようだ。

「フフ、これはヒント無しでいけたか。まっ、これが何だかんだで

普通に警備するより、被害が少なくて済む方法だろ？ で、誰が菱田重工と陸軍に今の話を頼むんだ？」

「ハハッ、やっぱりそれが一番の問題ですよね？」

「ただ、ここまでこちらを誘導してきたということならば。」

「もちろん、宮野さんですよ？」

通信越しなので、相手には伝わらないだろうが満面の笑みで伝える。「良い笑顔だねえ。まっ、愛弟子がここまで頑張ったんだ。ご褒美で菱田重工への通達と陸軍への応援要請は我が輩の方からやっておこう。」

「って通信越しだから分からないはずなんだが、どうして分かったんだ？」

「ま……まあ良いか。それにしても連絡を空軍大将である宮野さんが担当してくれて良かった。組織がでかいだけあって、トップの聲が物事を早く進める上で大事なのだ。私がやったら時間がかかりすぎる。」

「助かります。というか本当にこっちの様子は見えていませんよね？」

通信越しで吹き出した音が聞こえた。どうやらまた大笑いされている。

「一応、アドバイスを出しておこう。坂本、お前ちょっとカマかけにひっかかりやすいぞ」

「いや、あなたが相手じゃなきゃ……ってこれは言い訳か。どうにも苦手意識というか高い壁を感じるというか。自分の師匠に対してはこんなもんだらう？ いつか超えられるよう精進しよう。」

そして今できる最大限の反撃を繰り出す。

「宮野さんもさっき私の話を聞いている最中、ずっとニヤニヤしてましたよね？」

「フフ、何のことかな？ 我が輩は愛弟子の提言を孫の作文を聞いてやっている時と同じくらい真剣に聞いていたぞ？」

「どんな例えだ……ただ、声の方は浮かれている声だ。」

「それはニヤニヤどころじゃ済まないですね。というか相変わら
ず例えが分かりづらいですよ……。でも、楽しんでいらっしやるよ
うで何よりです。楽しみ方は少し変わっていると思いますけどね」
「何、君もうちの孫と大して変わらないからな？ そんな変な例え
でもないさ。それに君をからかうのは頭を使ってなかなか面白いの
だよ。張り合いがあつて、とても良い」
思いつきりため息をつきたいところだが、ぐつとこらえる。

「やれやれ、こんなのと一緒にされたらお孫さん泣きますよ？」
どっちかっていうと泣きたいのはこっちの方なんだが、こんな冗談
を受け入れたらこっちの負けだ。

「大丈夫さ。我が輩の自慢の孫だからな」
宮野さんは言いたい放題言つた後、大きく咳払いをして、

「話がそれだが、話したいことは既に全て話した。また何かあつた
ら連絡しろ。内容にもよるが何とかしてやる」

どんなにおちやらけていても最後にビシッと決めるから憎めない。
これがこの人がここまでの地位に上がった理由の一つなのかもしれ
ない。

「了解です。その際はよろしくお願いします」

「おう！ んじゃ通信終了だ。またな」

「失礼します」

向こうの音が完全に聞こえなくなった。どうやら通信が切れたよう
だ。

師匠との問答が終わり、緊張がとけたからか、また少し眠たくなつ
てきたので、リフレッシュルームに行つてコーヒーを飲みながら談
笑でもして眠気を払おうと決意し、部屋を出た。

リフレッシュルームにつくと休憩中のガンドック一同に遭遇した。

軽く挨拶をする。

「ガンドックじゃないか。休憩中か？」

こちらに3人が振り返つて敬礼を返してから、ガンドック1イヌツカの犬塚ケン

剣が状況の説明をする。

「はっ、今朝の訓練レポートを書き終えて、シミュレーターで戦闘訓練を行った後の休憩であります」

「で、向こうで何か二人が騒いでいたようだが、何をしてるんだ？」
「ガンドック3の小山静コヤマシズカが少しめんどくさそうな顔をしている。

「何というか、いつもの先輩と高田です」

ああ、なるほど。いつものね。妙に納得する。

そう、いつも通り、離れた場所でガンドック2の吉川理恵ヨシカワリエとガンドック4の高井則良タカイノリヨシが互いに腕を組みながら言い争いをしている。

喧嘩するほど仲が良いとは言いが、ここまでになると漫画とか小説では何か裏がある勢いだな。こう実は好きなんだけど素直になれないといった類いの……いや、どうだろう。

とりあえず、それを置いておいて、普段の疑問をぶつけてみる。

「何というか、お前等は仲が良いのか悪いのかわからんな。戦闘中のチームワークは目を見張る物があるんだが」

そんな私の疑問に、ガンドック5の石山慎治イシヤマシんじが応えてくれた。

「隊長がまとめあげてくれるおかげです。ただ、ああ見えて彼らは仲が良いのですよ。今も姉弟がじゃれあっているようなものです。たまに見ていて羨ましくなることもあります」

そんなもんなのか。今度ちょっと互いの気持ちを確かめてみたいなと思っただら。横から殺気のようなものを感じた。

殺気の方に視線を変えると、いつも大体半目の小山だが、その半眼に何か激情がこもった視線で石山を睨みつけるようにを見ていた。

ただ、その視線に気付いた石山の方は、極めて冷静な顔をして小山を見つめ返している。

彼ポーカー強そうだな。おっと、思考が変なところに飛んだ。

さすがに睨まれ続けられているのを疑問に思ったのか石山が口を動かした。

ただ発せられたのは言葉の爆弾だ。

「どうした？ そんな怖い顔をして。皆、君の表情や声に可愛げが

無いと言つが、そんな表情ではかわいい顔が台無しだ」

そんなことを言いながら小山の頭を手をおいて、優しくなで始める。「え……えっと、ちょ……ちょっとお手洗いにいってきますっ！」

小山は俯いて顔を見せないように部屋を走って出て行ったが、声は上擦っていたし、顔が随分と赤かったな。

……いや、何だこの状況は？

「あー、石山准尉？ 今のは何だ？」

私の質問に対して不思議そうな顔をしてこちらを見ている。

「いや、特に何でもないので、強いて言うなら客観的事実を述べただけです。それに彼女は頭を撫でると機嫌が良くなる傾向があるので。つい」

つい。じゃない。彼は天然たらしなのだろうか？

犬塚にアイコンタクトをとって、こいつらはいつもこんなんなのか？ と確認する。

私の意図を察したのか察してないのかは分からないが、両手を軽くあげて、困ったような苦笑いを浮かべている。

仕方ない。今後のことを含めて話が出来たので、耳打ちのために手招きをした。

「まあ、部隊内のメンバーが引かれ合うのは仕方ないんだが、色々大変だぞ？」

「分かつてはいるんですが、これでまとまっていますし。下手に禁止して目の届かないところで問題起こされても困るので、多目に見てください」

思わずため息を吐いた。これが妻帯者の余裕というやつかな？ 肩に手をおきながらとりあえず適当な応援の声をかけておく。

「まあ、何だ。苦労しそうだな」

「苦労というよりも、もどかしい感じが続くだけですけどね」

「それだけで、済むと良いな。上手く立ち回れよ」

冗談じゃなく、もどかさだけで済むなら良い。下手にこじれないように頑張って貰おう。

石山が何の話か分からないようで、首を捻ってこっちを見ている。

「まあ、何だ。君もあまり人を刺激しすぎないことだな」

「はあ、了解しました」

腑に落ちないような困り顔で、気の抜けた返事をされた。

ガンドック小隊の人間関係が私の中で更新された。もどかしくも微笑ましい話が終わっても、ガンドック2とガンドック4の言い争いは未だに続いていた。

「で、そろそろ言い合っているあの2人は止めないのか？」

犬塚の代わりに石山が答えた。

「そろそろ終わる頃かと。二人揃ってシミュレータールームに行くんじゃないでしょうか」

マップスの訓練や模擬戦が出来るシミュレータールームに？

さっきまでそこにいたとは言っていたがどうということだろう。

「模擬戦後シミュレータールームで訓練をしていたのですが、撃墜数の勝負を始めましたのです。現在の結果は引き分けなんですよ。決着をつけてやる！ と息巻いていたのですが、一旦落ち着けさせるために隊長が休憩に無理矢理引き摺り出したんです。それで、そろそろ提示した勝負を再開する時間になるのですよ」

あー、それですか。普通の喧嘩とは違ってマップス関連の言葉が出ているのは。

「ただいま。何だ、まだやってるんだ」

大分落ち着いたのか小山が戻ってきた。赤かった顔色は元に戻ってはいるが、声音はいつもよりほんの少し柔らかかったし、微妙に口が緩んでいる。

なるほど、確かに機嫌が良さそうだ。ただ、君が惚れた相手はどうやら恋愛という戦いにおいては、戦場の時ほど勘が良くないようだよ。「何か憐れみの目が向けられている気がするのですが、気のせいですかね大佐？ 何か一時期、隊長が見せたような目です」

ちらっと犬塚を見るとそっぽを向かれた。

なるほど、全く同じことを考えて表情に出してしまった時期がある

みたいだ。

それにしても小山は意外と勘が良いな。何とかごまかせるか？

「気のせいだ。君も周りに振り回されて大変そうだと思うただだよ」

先ほどの目が高井と吉川の言い合いが原因だと勘違いしてくれたよ
うで、ああ。といって納得してくれた。嘘でごまかす時には真実を
混ぜると効果的だ。

しかしこの先、あの二人より君をもっと振り回す奴が目前にいる
のだが、分かっているのだろうか？

そして、チームの予想通り、大いに白熱した2人は時間だからシミ
ユレーシヨンルームに行くと言出し、リフレッシュルームを出て行
った。

「で、君達も行くのかね？」

「放っておいたら、いつまでも続くので」

犬塚が良い笑顔で返してくれた。どうやら今のチームが本当に好き
らしい。完全に部下たちをまとめられている訳では無いけれど、良
い隊長だ。

彼ならこの複雑な人間関係も何とか出来るだろう。応援の言葉と
もに送り出そう。

「行ってこい。がんばれよ隊長」

「イエッサー」

三人は敬礼をして部屋を出て行った。

さて、どっちが勝つのかな？ 今度結果でも教えてもらおう。

今のお喋りが丁度良い息抜きになったようだ。

執務室に戻って、気合いを入れ直してデスクワークにあたる。

何とか今日の分の書類仕事を片付けて、模擬戦のデータを松平に
送信する。

訓練や模擬戦のデータから新しいアイデアが湧くそうで、わざわざ
国と菱田重工間で特別協定を結んで、データのやりとりが行われて
いるのだ。

仕事が終わりに、時計を見ると18時を過ぎていた。

お腹も空いてきたので私は執務室を出て食堂に向かっていた。すると、また廊下で田口軍曹に遭遇した。が、行ったり来たりしてその場をうろつろしている。何か様子がおかしい。

「田口軍曹、どうした？」

びくつと肩が震えてこちらに振り向いた。いつも以上に反応が大きかったが、何よりもいつもと違ったのは背中に何かを隠すような動きをしたことだ。

しかもそれなりに大きな物らしく手は後ろに回したままだ。

「何を隠している？」

額に汗が滲んでいるのが目に見えるほど焦っている。

宮野大将の真似でカマをかけてみるか。

「恋をした女性へのプレゼントかな？」

田口軍曹の顔色が一瞬で紅潮すると、一転して青ざめた。忙しいやつだな。

分かりやすすぎて思わずくすくと笑ってしまう。

「大佐殿はエスパーですか？」

私が宮野大将にした反応と全く同じだったので、吹き出してしまった。

「確かに私のガラでは無いですが、そこまで笑わなくとも……」

かなり落ち込んでいるようだ。がっくりと身体全体でうなだれてしまった。

しまったな。今の笑いで誤解を与えてしまった。早くこの勘違いを払拭せねば。宮野大将とのカマかけについてのやりとりを簡単に説明する。

「なるほど。そんなことがあったのですか。さすが空軍大将殿ですね」

「どうやら誤解はとけたらしい。」

ただ残念ながら、どうやら宮野大将の悪戯好きが私にも受け継がれ

ているようだ。ちらつと見えた手紙に相手の名前がかいてあったのだ。それを見てまた悪戯心がくすぐられてしまった。

いやー、悪戯好きだな私！

「相手はそうだな。食堂のおばちゃんの一人娘で名前は佳奈^{カナ}だったか。夜の食堂にバイトで入ってきている子だよな？ 絶世の美女とは言えないが、綺麗な長い黒髪で、清楚な印象がある真面目な良い子だ。あの垢抜けて無い感じに惚れ込んだのか？」

また軍曹の顔が赤くなった。反応がとても早くてわかりやすい。

「なぜ分かったのですか？ 今のもカマかけというやつですか？」

思わずひるんでしまうほど声が大きかった。少し静かにと伝えるとシユンとしてしまったので、ネタばらしをする。

「いや、今のは違う。その手紙の宛名が見えたのでな。というか、プレゼントに花束と手紙とは。いや、メッセージカードというのかな。なかなか良い趣味をしているではないか」

田口軍曹がクワツと顔をこちらに向けて、大きく目を見開いてこちらをジツと見つめてくる。困った……正直顔が近い。しかも体格が良いのですごい迫力だ。

「あー……素敵な贈り物だと思っぞ？ 君のような者が贈るというのもギャップがあつて良いと思う」

軍曹がこちらの手をとって握ってきた。ゴツゴツした男らしい手だ。指の皮は堅く、マメのようなタコが何個か出来ている。数年に渡る訓練の積み重ねの結果だろうか。何故か私は手の分析をしている。その理由は、この光景が周りから見ると相当不思議な光景に見えてしまうと思つたからだろう。

体格の大きな男性がバラの花束を持ちながら、普通の体格をしている男性の手を取っていて、その両者の距離がとても近い。見られたら何か酷い勘違いされそうだ。

「ほ……本当にそう思われますか？！ 花束とメッセージカードで喜ばれますか？！」

とても興奮した声だ。緊張のあまり声が震えているし、とても大き

くなっている。どうやって彼を落ちつかせよう。何か近い話題をふって気を散らしてみるか。

「ところで軍曹。どうしてまたプレゼントを？」

私の疑問で手を離して、身体の距離もあけてくれた。どうやら周りの誤解を受ける危険からは助かったようだ。

「実は、今日が誕生日だと聞いていたのでお祝いを。と思いましたが、なるほど。意外とがんばっているじゃないか軍曹。しかし、この緊張ぶりでちゃんと渡せるのか？」

「なるほど。それはまた素晴らしい話だ。君の恋が成就することを祈っているよ」

何とかその場から逃げだそうとするが、軍曹に呼び止められる。

「大佐殿、折り入って頼みがあります」

何かいやな予感がするなあ……。

「プレゼントを渡すときに、その……人払いをして欲しいのですが……」

消え入りそうな声で頼んできた。予想は出来ていたが、意外とこういうところでは気が弱いようだ。鬼軍曹の意外な一面を見た気がする。

軍曹には日頃新人の教育で世話になっているので、協力は喜んで乗っけてあげるとしよう。今日の模擬戦で正規パイロットに勝てるような新人を育成してくれたボーナスだ。

「人払いか。どうせならそうだな。彼女を呼び出して、二人きりにさせようか？」

軍曹に彼女と二人きりになれるチャンスを作る提案をする。

「大佐殿……あなたが私達の上官で本当に、本当に良かった！ 私はなんと幸せな男なのでしょうか！」

……あのお田口さん、涙が流れているように見えるのは気のせいでしょうか？ そこまで緊張していたんですか。そんなあなたに協力出来て私はとても嬉しいです。予想外の展開に私の思考が少しおかしくなりそうだ。

何故か声まで出にくくなっている気がする。

「と……とりあえず、行こうか軍曹」

精一杯の笑顔を作って食堂に向かうよう促す。

「了解です。大佐殿」

花東片手に敬礼というのも不思議な光景だ。

軍曹の名誉のために周りに人がいなくて本当に良かった。

とりあえず、急遽作戦を考えることになり、歩きながら作戦概要を軍曹に伝えていった。

「では軍曹。作戦コード：ドリーム・シアター開始だ」

少し外連味が聞いた名前をつけて軍曹の恥ずかしさをごまかすのと、やる気を引き出す。

大層な名前をつけているが実際大した作戦ではない。

佐官は食事を部屋まで運んでもらえるサービスがあるのだが、そのサービスをおばちゃんの娘である佳奈に頼むのだ。

ただ、今から頼んでもすぐ仕事に戻ってしまうので、それではあまり意味がない。仕事が終わるか終わらないかのギリギリの時間に配達するようにお願いし、配達が終わったら仕事を上げるようにおばちゃんから言ってもらおう算段だ。

これならゆっくりと軍曹が彼女と話す時間が設けられる。

まあ、うまくやれば食事くらいには一緒にいけるんじゃないかな？ 確か8時半頃に食堂が閉まるので、その時間から食堂のスタッフは食事をとるはずだから望みはあるだろう。

さっきの挙動不審っぷりを考慮すると多分起こりえないイベントなんだろうと思ってしまふのが残念な話だ。

ちなみに、この作戦の最大の問題は何かというと……

私の夕食がとても遅くなると言うことだ。

しかし、これも軍曹のため。空腹の1時間や2時間くらいは我慢しよう。

そういえば、執務室の机の中にチョコレートぐらい入っていたと思うからそれを食べてしのぐか。

そんな風に自分の空腹をしのぐためにどうすれば良いか考えていたら、軍曹がいったん花束を置きに部屋に戻った。そういえば、この作戦では彼も空腹に耐えるのだ。ただ、緊張で食事どころでは無いようなので大丈夫だろう。

さてと、まずは敵情視察か。マップスをはじめとする兵器による戦争でも、恋愛という名の戦争でも、まずは彼我の情報収集が第一だ。確か意外と人気があったような気がするが、さて、どうなることやら？

食堂につくと、さすが夕食時とあって大変混雑していた。

佐官用の特別ルートを使って（ただ単にスタッフ用の入り口なのだが）中に入り込み、おばちゃんに声をかけた。

「おい、おばちゃん。ちょっとこっち来て」

後ろから声かけられて食堂のおばちゃんが振り返ってこちらを確認する。

そして、手を振りながらこっちにやってきた。

「あれま？ もっちゃん何でそんなところから来てるの？」

「いや、すごい混雑ぶりだね。仕事が忙しくてね。ちょっと気分転換がてら配達サービスを頼みに来たのだが、真面目に列に並ぶと恐ろしく時間がかかりそうだったので。つい裏から」

我ながらヒドイ言い訳だ。

ただ、さすがおばちゃん。特につつこまれずに了承してくれた。

「電話で良いじゃないかい？ まあいいわ。大体何時くらいだい？」

よし、これで第一段階クリア。

「そうだな。8時半あたりで頼めるか？」

「またギリギリだねえ……まあ、もっちゃんの頼みなら仕方ないわね」

そして次がまた難関だ。最大限の演技をしなくてはならない。

「ありがとう。助かるよ、おばちゃん。って、おっとしまった。もう一つ頼みがあるのだが、配達の方は佳奈さんに頼めるかな？ 確

か今日は彼女の誕生日と聞いたのでな。普段多くの隊員が世話になつてお礼として、ちょっとした贈り物があったのだが、忘れてきてしまった」

「さすが、もっちゃん良い所あるわねえ。分かった。その時間に佳奈をそつちに送るわ。プレゼントのことは内緒にしておいてあげる。それと、これは私の誕生日も期待していいのかしら？　ちなみに私のは来月の4月2日よ」

おばちゃんが嬉しそうに了解してくれた。何とか第二段階もクリアした。

ただ、どうやら来月の出費がこれで確定したらしい。さすがおばちゃんやるな！

さて、後はどれだけ彼女が人気かを探るだけだが、スタッフ専用休憩室の机の上を見ると結構な数のプレゼントが置いてあった。

箱の数からすると、プレゼントの数は15程度か。

包装で包まれていて中身はよく分からないが、大きさからするとそこまで大きくは無い。女の子に受ける小物とかアクセサリーとかそういう類いの物だろうか？

田口軍曹が用意しているような花束と手紙は……どうやらないようだな。

良かったな田口軍曹。君のそのチョイスはやはり間違っていないかったかも知れない。

敵情視察も出来たのでおばちゃんにもう一度礼を言ってから食堂を出た。

「さて、私もでまかせとはいえプレゼントを贈ると言ってしまったな。何を贈ろうか」

歩きながら何が良いかを考える。少なくとも軍曹のプレゼントのインパクトを潰してはならないし、彼をアシスト出来るような物が良いだろう。

娘の佳奈の事は実はあまりよく知らないのだが、おばちゃんは酒飲みだと聞いたことがある。惚気話で旦那と良く飲み比べをしたと語

っていたことがあった。

なら、娘の方もある程度は飲めるだろう。メンデル遺伝の法則から考えると両親ともにお酒が飲める体質であるならば、子供は最低でも75%の確率でアルコールの代謝が出来る。

そう考えると、ワインならば家族で楽しめるし、うまくいけば田口軍曹も誘われるかもしれない。我ながらなかなか良い選択だ。

「よし。ちよっと、ワインでも買ってこるか」

田口軍曹に8時30分くらいに執務室から食堂の間の廊下で待機するよう伝えて、車でワインを買いに急いで町へ向かった。

ただ、店について気付いた事だが、私はあまりワインに詳しくなかった。

しまった。この私としたことが……。

どういった物が良いのか悩んでいても仕方ないので、ダメ元でソムリエに誕生日に家族で楽しめるワインは無いか？注文したら、あっという間にワインを選んで出してくれた。意外と言ってみる物だ。

ワインを買って基地に戻ると時間は既に8時をまわっていて、私もいつ佳奈さんが来ても良いように部屋で仕事をしている振りをしなから待機を始める。

さて、田口軍曹は気が気じゃ無いだろうなあ。様子を見てみたいが離れる訳にはいけないので、想像してニヤニヤすることくらいしか出来ない。

そして、約束の時間がやってくる。

部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「坂本さん夕食をお持ちしました」

確かに佳奈さんの声のようだ。

「どうぞ、入ってください」

「失礼します」

軽く頭を下げて佳奈さんが部屋に入ってくる。

食堂での仕事なので三角巾を頭につけてエプロンもしている。

後ろから見える長い綺麗な黒髪のお下げが白い布に染えてより黒く

綺麗に見える。

なるほど、清楚なイメージの子にこの衣装はなかなか似合うものだ。何とか空気は柔らかく感じる。田口軍曹もこれにやられたのだろうか？

「ありがとうございます。その机に置いておいてくれ」

「分かりました」

端末や書類の載っていない客用の机の上に食事を置いてもらう。

一通り置いてもらったらおばちゃんへの宣言通りプレゼントを渡さなければ。

「佳奈君。君のおかげで隊員達の士気は非常に高く保たれている。

これは私からのほんの気持ちだ。是非お母様と一緒に楽しんで欲しい。誕生日おめでとう」

ほんの少しの笑顔で、出来るだけ真面目な顔で手渡す。笑顔を見せるのは次の田口軍曹の仕事だ。

「ありがとうございます！ 私もお母さんもワインは好きなので嬉しいです」

ふう、とりあえずは及第点のようだ。さて、舞台は整えたぞ田口軍曹。

後は君が主役だ。

佳奈さんが部屋から出て行くのを見送って行動に移る。

さて、では尾行開始だ。自分で言うのも何なのだが趣味が悪い。宮野大將が聞いたら大爆笑されそうだ。

こっそり後ろをつついていくと田口軍曹が花束を持って現れた。

「じ、こじ、こんばんは！ 佳奈さん」

あちゃー……緊張しすぎて舌が回ってないぞ軍曹。

「こんばんは、田口さん。そういえば今夜は食堂に来なかったですね。身体の調子でも悪いんですか？」

おお、ちゃんと名前を覚えてもらっているし、食堂に来ているかどうかまでチェックしてもらっている上、身体の心配までしてくれている。なかなか良い子じゃないか。しかも脈もありそうだ。

「え、ええ。実は候補生達の仕事が残ってしまして、食事はまだなのですよ」

田口軍曹は早口で言い切ってから大きく息を吸い込んだ。

どうやら決意を決めて、ここで渡すつもりのようなのだ。

「あの佳奈さん。誕生日おめでとうございます。つまらないものかもしれませんが、これをどうぞ」

おっと……満面の笑みじゃ無くとても固まっている顔だ……。

ただ、その顔と花束のギャップが面白かったのか佳奈はクスクスと笑い始めた。笑い方も意外と上品だな。おばちゃんの娘とは思えない。……これはおばちゃんに失礼か。

「何というか済みません。やっぱり変ですよ。この私が花束って」
軍曹が見るからにしょんぼりしている。あきらめるな軍曹！

「いえ、今年もらったプレゼントの中では一番嬉しいかな？ 小物やアクセサリーも嫌いじゃ無いですけど、お花が大好きなんですよ私。お部屋に飾りますね」

おお……おおおおお！ よかったな軍曹！

気付いたら拳を握ってガッツポーズをとっていた。落ち着け私よ。

「確か、お食事はまだなんですよ？ みんなと一緒に食べれば今から食事はいかがですか？ ワインもありますし」

田口軍曹が眼をぱちくりさせている。何が起きているか多分脳が処理しきれしていない状態だ。

「えつと？ 私と佳奈さんが食事ですか？」

「はい。あ、まだお仕事が残ってますか？」

「いえ、大丈夫です。是非一緒に過ごさせてください！」

やたら大きな声で良い返事をした。おめでとう軍曹！

心の中で拍手を送っていたら、軍曹がこちらに気付いたようで頭を軽く下げてきた。

む、尾行がバレてしまった。こんだけ上手く行ったんだ。感謝されど文句は言われないうらやう。

この時はまだ佳奈さんの「みんな」という言葉の意味がご両親のこ

とだと私は思っていた。
無事に作戦が成功したと思い、私も執務室に戻り遅い夕食をとることにした。

机の上の料理を見ると、どうやら焼き魚定食のようだ。若い連中にあまり人気が無いのか少し余りやすいようで、最後に頼むと大体これになっている。焼き魚も美味しいと思うのだが。

今日は時間が遅く、お腹が空いていることもあり、いつも以上においしく感じられる。空腹だけでなく、田口軍曹の幸福っぷりを分けてもらったのが良い調味料だったのではないだろうか。

食事が済んだので食堂に食器を返すついでに軽く様子を見てくるとしようと考えた。

しかし、食堂には私の想像していた楽しそうな光景とは全く別の楽しい光景がひろがっていた。

「何だこの人数は？」

そう、田口軍曹が佳奈さんとおばちゃんやシェフのおっさんと仲良くやっているかと思いきや、物凄い人数が食堂に集まっている。

目測ざつと30人。一体何があったと言うのだ？ 食器を返却口にあるシンクに置いて、近くの人に声をかけた。

「おい、君。これは何の騒ぎだ？」

「お？ なんだ？ って坂本大佐！？ 失礼しました。大佐もおばちゃんに呼ばれて来たのですか？」

一体何の話だ？ あらゆる想定が頭の中で浮かんでは消え浮かんでは消えた。私が考え込んでいると逆に不思議そうな顔をしてきた。

「あれ？ 坂本大佐も佳奈さんの誕生日祝いに来いと言われたのは？」

背中に冷や汗を感じる……しまった。そういうことか。

作戦のためとは言え、仕事で忙しいと伝えたからこの情報は手に入らなかったのか。

「実は先程まで仕事をしていたのでな。なるほど、実にめでたい話だ」

「おつかれさまです坂本大佐。このまま一緒にいかがですか？」
「いや、少し疲れているのでな。失礼させていただきよ」

まずいな。私の作戦ミスだ。田口軍曹に謝らなければ。
人混みの中から田口軍曹を探すために周りを回ってみると、田口軍曹のトレードマークであるショートモヒカンが発見出来た。

肩をトントンと軽く叩き、こちらに気付かせて耳打ちをした。

「すまないな。私の作戦ミスだ。まさかこんなことになるとは想定していなかった」

私の謝罪に対して田口軍曹は首を横に振ってくれた。

「いえ、どうかお気になさらないで下さい。当初の目的は達成出来ましたし、ここに着くまでの間は実に夢のようでした。作戦名通りのドリーム・シアターです。これで大佐殿を非難してしまっっては、何か罰が当たりそうですよ」

田口軍曹は満面の笑みで答えてくれた。どうやら、本当に満足しているらしい。

辺りをもう一度見渡す。佳奈さんの近くにいる男達は口々に口説き文句を言っているようだ。それに対して佳奈さんはニコニコと当たり障りの無いお礼で返している。

私は再度軍曹に視線を戻し肩に手をおいた。

「田口軍曹。君の戦場は数多くの強敵が待ちかまえているようだ。負けるなよ」

「了解しました。私は誰にも負けません」

それで良い。がんばれ田口軍曹。今日はとりあえず、みんな楽しんで来いと伝えて食堂を後にした。

一応今夜は多忙という設定なのだ。作戦がバレてしまっただけは田口軍曹に甚大な被害が出る。

参加出来ないのは残念だが、彼の名誉のためだ。仕方ないだろ？
佐官用の個室に戻る中、作戦終了の合図を自分のために出す。

「作戦コード：ドリーム・シアター。ミッションコンプリート」
それが何だかおかしくて、にやついた顔で頭をかきながら帰ってい

た。部屋につくまで誰ともすれ違わなくて本当に良かったと思う。この時は、にやけた顔をいつもの真面目な顔にするのが、簡単に出来そうになかったのだ。

個室に戻って時計を確認すると既に9時を過ぎていた。

少し遅いと思っただが、とある人物にテレビ電話をかける。

数秒の呼び出しの後に着信が取られたようだ。柔らかく澄んだ声が聞こえる。

「龍ちゃん、今日も1日おつかさま。晩御飯はしっかり食べた？」
ショートカットの黒い髪で、毛先が少し跳ねている。にこやかな顔の女性がモニターに現れる。

パイロット時代にオペレーターとして共に戦った戦友であり、今は大切な恋人。

ゴースト部隊が解散する際に、バラバラに別れるのなら、気持ちを伝えておこうと決意し、告白したら上手くいってしまった。その話はまた今度だ。

1日の終わりに、この声が聞こえて、顔が見られただけでホッと出来る。

これが理由で、他人にあまり強く注意が出来なかった。

「ああ、大丈夫。君も変わりないか？」

「うん、元気だよ。さっきまで仕事してたの？何か声が堅いよ？」
彼女は耳が良いからか、小さい頃から声の調子や音にとっても敏感だそうだ。

その特性を活かして、今では諜報部の情報解析班についている。

その彼女から声の調子から相手の感情を読み取る技術を学んだおかげで、彼女にはまだ遠く及ばないが、私にも少し真似が出来るようにはなった。

「さっきまで、とある作戦指揮をとっていたからな」

真面目な顔をしながら答えた。そうとても大事な作戦には違いない。「へー、でも何か随分楽しそうな作戦だったみたいだね。どんなこ

としたの？」

さすがだ。顔は真面目でも、やはり声で面白いことだったと分かるか。

先程起こった田口軍曹の一連の話を伝える。

花束とメッセーじカードを持ってウロウロしていたこと、その緊張ぶり、協力を申し出たら涙を流したこと、うまくいったと思ったら落とし穴があったこと。

それに丁寧に「うん」「おー」「それでそれで？」と相槌を打ってくれる。話していてもとても楽しい。

「とまあ、そんなことをしてたんだけ」

「田口さんがんばったね。まだ分からないけど、脈はあるかもね。龍ちゃんもおつかれさま」

「ありがとう。君の方は今日どうだった？」

「えへへ、どうだと思っ？」

ちよつと声音は高め、抑揚もあり。ちよつとした笑いも含まれているとすると。

「どうやら良い一日だったみたいだね？」

「うん、正解。特に大きな事故も事件もなく、おいしいご飯も食べれて、今は龍ちゃんとお話できて。とても良い日だよ」

最後の一言に少し気恥ずかしくてなって、ほほをかく。顔はきつと赤くなっているだろう。

「あはは、照れてるー」

テレビ電話が当たり前になっているが、こつこつ表情まで分かるので良かったり悪かったりだ。

とりとめの無い話をしながら時間が過ぎていく。

どちらかが一方的におしゃべりすることは無く、楽しい言葉のキヤッチボールが続く。

楽しい時はお互いに適当な話のネタで小さく盛り上がって、どちらかが悲しい時はただ聞いてあげて、困ったときはお互いに妥協策を考えて、心が疲れたときは甘えあって、身体が疲れていたら互いの

健康を気遣って早めに話を終える。

そんなバランスのとれた絶妙なコミュニケーション。

今日は二人とも楽しい時だったので、長いおしゃべり続いた。気付いたら10時30分だ。

次の日に響いてはお互いのためにならない。名残惜しいがそろそろ切り時だ。

「そろそろ終わろうか。そうだ。来月くらいに仕事で首都のミヤトに仕事で行く機会があるかもしれないから、そのときにご飯でも食べに行こう」

「やったー。楽しみにしてるね。早めに日時を教えてね？ 予定がんばってあけちゃうからさ」

「んじゃ、おやすみ。サナ」

「おやすみ龍ちゃん」

モニターと音声が切れた。仕事に私情を挟むのは良くないが、これは早く宮野大将に仕事をしてもらわなければな。

電話が終わった後は、風呂を沸かして、ゆっくりと一日の疲れをとって、ベッドに飛び込んだ。

長い一日が今日も終わる。

断章「死の商人」

断章「死の商人」

某国某月某日某時刻。

地下アジトに潜伏している武装した数人の男達の下に、身なりの良いセールスマンがやってきた。

潜伏しているアジトが謎の男にかぎつけられているのだ。男達はそれぞれ武器を手に取り、常に相手の動きを止められるよう警戒をする。

そんな中でセールスマンは後ろから自動小銃をつきつけられてはいるが、余裕の笑みを浮かべている。

男達のリーダーであるヒゲをたくわえた中年の男がセールスマンの額に拳銃をつきつけ、殺気を含んだ声で何の用かと問う。

セールスマンはニッコリと笑いながらカバンの中から書類を手渡した。

「商売に来ました。これを買いませんか？ あなた達にとっては必要不可欠な物でしょう？」

書類を手に取った男性は驚きのあまり書類を手から落としてしまった。

畏かどうかを確認するために、声に殺気を込め続ける。

「貴様正気か？ 目的はなんだ？」

「もちろん大真面目です。目的はあなた方と同じですよ。国のためです」

一点の動揺もない落ち着いた返事だった。

「対価に何を要求する？ 金は無いぞ」

「書類の続きをご覧ください」

地面に落ちた書類を部下が拾い上げて手渡そうとするが、リーダーの男と同じように文面を見て、驚きのあまり固まってしまった。

リーダーの男はその手から書類をとり、続きを読んでいく。

「こんなのが対価で良いのか？ ある程度は既に予定していたことなのだが」

セールスマンの男は両手を挙げて大げさに驚いた振りをした。

「おお、それはありがたい。では交渉成立ということでもよろしいかな？」

「大丈夫だ。もう一つの条件も我々のスポンサーがどうにかしてくれる」

セールスマンの方が笑顔で握手を求めた。

2人の男が握手をして、交渉が成立する。

セールスマンは交渉が終わり、帰り支度を始めた。

男達に前と後ろから挟まれながら地下アジトの出口に向かう。

そして、出口の扉を開ける瞬間に身体の向きを変えて、男達に非常に楽しそうな声で贈り物があることを伝えた。

「今日はお近づきのしるしに手土産をご用意いたしました。どうかお使いください」

扉を開けると目の前に装甲車が五台用意されていた。

旧世代兵器とは言え、自動小銃と一般車両の組み合わせより遙かに良い。

啞然とする男達に品の良い一礼をしてセールスマンの男は去っていった。

装甲車に歓喜し騒いだため、セールスマンが小型のマイクを使って呟いた言葉を男達は知る由もない。

「本部へ作戦完了。これより帰投する」

第八章「ミヤト出張」(前書き)

今回はちょっとした日常回。松平の変態化の原因や、坂本大佐の恋人サナとのちょっとした昔話が書かれています。

第八章「ミヤト出張」

第八章「ミヤト出張」

模擬戦の日から数日後、無事に宮野大将と話した作戦が正式に受理された。

おかげで、菱田重工の技術者や開発機器類の受け入れ準備や細かい書類仕事に追われる日々を過ごすことになった。

ちなみに、書類仕事の休憩中に聞いたことだが、ガンドックの吉田と高井の勝負は、吉田の勝ちだったそうだ。高井もかなり健闘したらしいが、経験の差が出たと言ったところだろう。

そして昨日、ついに受け入れ体制が整ったので、今度はこちらから菱田重工に向いて、最終チェックを行うことになった。

メールで済ませれば良いと思われるかもしれないが、色々と事情がある。

正直に言えば、書類から逃げたかったというのが半分だが、搬送に關して少し気になることが出来たのだ。それを自分の目で確認がしなかった。

キーナ市から首都のミヤトに直行する地下リニアに乗る。一時間に一本程度の感覚で運行しており、大体2時間30分程度で1300km離れた首都に着く。

スピードはとても速いのだが、揺れや騒音も制御されているので非常に快適に居眠りが出来る。おかげで、居眠りから目が覚めたらミヤト中央駅到着だ。

地下リニアの駅から地上に出ると、少しやせ気味の体型で、ヨレヨレの白衣を着たぼさぼさ頭の眼鏡をかけた男が待っていた。

何と松平が迎えに来てくれたのだ。

今日は周りの目もないし、現役時代と同じように碎けて喋られる。

「松平じゃないか。仕事じゃないのか？」

「もっさんを迎えに来るのも仕事のうちだよ。他のやつにもっさんは任せられないさ」

「ちよつとおちゃらけた声だったので、言っていることは冗談だと分かったが、彼の目から気をつけるという合図が送られている。彼の冗談にあわせるか。」

「で、私は君の長話につき合わされる訳だな？　また例の惚れた女の話か？」

「ちよつとー、もっさんそんな大っぴらに人の恋路について喋るのは酷くない？」

「特に周りに怪しい人間はいなかったと思うのだが、この反応はやはり何かに警戒をしている。」

「普段の彼なら、ここで延々とマップスの魅力について語ってくれるはずだ。」

「すまん、少しデリカシーにかけたな。では失礼する」

「車に乗り込んで電源が入った時に、松平の表情がほつとしたものに変わった。」

「さすが、もっさんだね。こっちの意図がちゃんと伝わったみたいで良かった。さすが僕達の元隊長だね」

「おいおい、良いのか？　盗聴器はついてないだろうな？」

「いきなり警戒をとかれたので、少し不安になってしまった。」

「大丈夫大丈夫、僕を誰だと思ってるの？　車に小型ジャマーをつけるのは当然だよ？」

「携帯端末を見ると確かに電波が入っていなかった。確かに元々狙われやすい立場にいる人間だったな。」

「で、ここまでやってるといことは、やはりあれか？」

「本当に周りにいるかどうかは置いておいて、警戒しろ。って宮っちが言うからさー。こっちも意外と大変だよ？」

「宮野大将が気に入っているから良いものの、軍のトップをニツクネームで呼べるお前はすごい奴だよ。」

「で、その宮野大将からの件についてなんだが、今第三世代フレ―

ムはどうなっている？」

とりあえず、話がそれないうちに本題に入る。

「後は服を着せたり、おめかししたりの微調整で試験可能ってことだね。近い内に全部そっちに持つてく手はずだから、今急いでやってるよ」

状況は把握出来た。わざわざ出向いた甲斐があつたようだ。

「松平、一つ頼みがある。こちらに搬入する時に、第三世代フレームは全て第二世代型の装甲をつけてくれ」

松平は何かに驚いて、勝手に一人で「へえー」と納得しはじめた。

「どうした？ 勝手に一人で自己完結して」

「いやね、宮つちにさ、もっさんが会いに来たら着せ替えの話をするから準備しとけ。って言われたんだよね。まさかその通りになるとは。ちなみに服を着せる段階になつても、もっさんから何も無ければ我が輩に連絡しろ。とも言われたよ」

宮野大将も気付いたのか。先を越されたのと試されているのが少し悔しい。

「スパイに第三世代フレームがうちに運ばれるのを気付かれるとまづいからな。第二世代型マップスの搬入という形で偽装したい」

「なるほどね。任せて。すぐやつておくよ。ついでに発注書も作っておこうか」

話が早くて助かる。これで心配事が一つ減った。

「ハリボテの方はどうなってる？」

「それはもうどつちのハリボテもバツチリだよ。僕から見ても両方本物にしか見えないからね。まあ、そのまんま同じ装甲材使ってるから当然なんだけどさ」

なるほど。そっちの方も順調のようだな。これで、菱田重工関連の作戦はこれで安心だ。第三世代フレームが開発されている工場につくまでは適当に雑談をしておこう。

「で、松平。さっきの冗談の続きなんだが」

凄く楽しそうにこっちに振り向いた。危ないから前を向いておけと

注意して冗談の続きを聞かせる。

「相変わらず、女性には興味無しと言ったところか？」

「ハハツ、もっさんは冗談がうまいねえ。たくさんの愛する娘がいる僕だよ？ 興味が無い訳がないじゃないか」

おそらくこつちの意図が多少分かつているせいだろう。語尾がめちやくちやになっっている。

「動揺して語尾がおかしくなってるぞ。いや、君に子供がいたら、親子そろって20年後くらいにとんでもないマップスを開発しそうだと思ってな」

そんな私の考えに松平は口をとがらせて文句で返してくる。

「ひどいなーもっさん。まあ僕のことの方が分かる人なら良いんだけど、そんな人は本当の意味で、ほとんどいないんだよねえ……」

確かに松平は特殊すぎる性癖を持っている。でも、だからこそ、今の発言を聞くと悲しいと感じてしまう。

世界の軍事バランスをひっくり返すとはいかないまでも、バランスを大きく変えられてしまう頭脳の主だ。その頭脳を欲しがっている人間はゴロゴロといる。しかも、大抵ろくでも無い奴らが興味を持っているのが問題だ。

昔、サナも松平は無理をしていると言っていたことがあった。

最初の方は、あくまで自分の作品の自慢のようなものだったが、途中からある意味の自己防衛のために発展させた特殊性癖なのかもしれない。

この妄言癖とも言えるマップスに対する接し方で、ハニートラップをはじめとする数々の情報漏洩の危機を回避しているそう。おかげで最近少し人間不信気味らしい。

「お前の場合は、そんなやつが現れたら大抵スパイの類なんだろうな……」

「もっさん相手だから言うけど、なんとまあ、悲しいことにそうなたちやうんだよねえ……」

自覚症状はどうやらあるようだ。何とかしてやりたいと思うが、解

決策がすぐには思いつかない。少し情けないが、急な訪問でも、何とか時間を空けてくれたサナに今夜相談してみよう。

ただ、それでもだ。今落ち込んでいる彼は、元同僚で、戦友であり、大切な一人の友人だ。

そんな彼を元気づけるためには、多少のハツタリくらいかましても問題は無いはずだ。

「そのうち、何とかしてやる。だから、もう少し苦勞をかけることになる。すまない」

松平はすてきな笑顔をしながら冗談を含めて頷いてくれた。

「ありがと。やっぱりもっさんは頼りになるね。特に僕はホモという訳じゃないんだけど、ちょっとかつこよすぎて、惚れちゃいそうだよ？」

うれしさと悲しさと何かにすがりたいような切なさが混じった複雑な声だった。そんな声でこんな冗談を言ったのだ。これはおそらく彼の精一杯の強がりだろう。

だからこそ、その強がりに応えて自信満々に笑って冗談で返そう。

「おっと、大変魅力的な誘いだ、サナに怒られるのは怖いので止めてくれ。あいつ相手に隠し事は私でも出来ないからな」

二人で吹き出して大笑いしてしまう。

工場につくまで一時間ほど笑い話が尽きることは無かった。

無事に工場につくと大勢の作業員達が様々な機械を使って何かをしていた。

おそらくパーツの切り出しや製作なのだろう。

そんな光景を横目に松平につれられて彼の研究室に入っていた。

「今のところ、こんな感じ」

端末のモニターを見ると調整中の第三世代フレームが映っていた。なるほど、確かにまだフレームだ。装甲やブラスターなどのパーツがまだ装着されていない。偽装するにはギリギリのタイミングだった。

「なるほど。んじゃ、後は手はず通り任せれば良いんだな？」

「そうだね。任せておいてよ。んでこつちがハリボテの方」
確かにこれは第二世代型とは違って見えるな。

形としては流線型を主体にした航空機のようなフォルムだ。

「ずいぶんと航空機に似たデザインになったな」

「流線型のデザインもかつこいいかな？　って思つて。試験段階だから正式に採用するかは、何とも言えないけど、他にも色々あるからキーナ基地で試して良い？」

「別にかまわないが、会議が終わるまでは外装をごまかして欲しいところだな」

少し残念そうに舌打ちをされた。そんな残念だったのか。

「ちえ、仕方ないか」

その後は、搬入予定のパーツや武装のチェックを行つて受け入れリストを書いた。もちろん第三世代用のパーツも含まれているのだが、全て第二世代型用として書いている。木を隠すなら森に隠せといったところか。

リストを見ると普通に注文したら恐ろしい額になる量だ。緊急事態の作戦だからこそ出来ることである。

「よし、では公開される発注書は現実的な物量で、でつちあげてくれ」

「んじゃ、いつも通りな感じでいくよ」

「搬送方法は輸送機で間違いないな？」

「そうだね。1機には全部積めないから、3機に分散して積んで、宮つちが指定した空路を通つてそつちに運ぶよ」

バラバラに輸送機が飛び、各基地に少量の配達をしながら、最終的にキーナ空軍基地に本命を届ける作戦となつている。

さすがに大量の物資が一つの基地にいつべんに送られると怪しまれるので、分散させるのだ。

「よし、これで搬入の方も何とか目処がついたな」

「そうだね。僕はまだ仕事があるけど、もっさんはこの後どうすんの？」
時計を見ると既に5時を回っていた。確か待ち合わせは6時30分にミヤト中央駅だ。そろそろ送って貰うことにしよう。

「そろそろ帰るとするよ。まだこの時間なら中央駅行きのバスがあるだろ？ それを使うさ」

「そっか。んで、その後デート？」

予定を完全に当てられて驚いてしまった。ただ、この前宮野大将にやれたばかりだ。動揺はしない。代わりにおちゃらけてみせる。

「お前も超能力に目覚めたのか。……なんてな。宮野大将の入れ知恵か？」

「本当に宮つちはもっさんのことを、もっさんは宮つちの事が分かってるんだねえ……。あいつが帰り際に時計を確認したらデートだろ？ って言ってみろ。面白い反応するぞ。って言ってたからやってみただけだ。確かに変なリアクション返された」

そこまで計算済みだったか……思わず右手で頭をかいてしまう。

「今回も宮野大将が一枚上手だったか……」

「あはは、どうやらそうみたいだね。んじゃまた今度キーナ基地でね。さっちゃんにもよろしく」

「ああ、楽しみに待っている。またな」

笑顔で別れの挨拶をして、私は中央駅行きのバスに乗った。

ちなみに、キーナ基地の方には戻らないといけない私のために、地下リニア駅がある中央駅で待ち合わせだ。

時間より少し早く着いてしまったので、のんびりと町の風景を観察していた。バスに乗っているときに気付いたのだが、工事用の大型トラックが良く通っている気がする。

そういえば、前にニュースで地価が高騰しているとか言っていたな。建設ラッシュでもまた来ているのだろうか？ 景気が良くて結構なことだ。私の給料ももう少し増えないかな？ と考えていると。

「お待たせ。ごめんね。結構待たしちゃった？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。どうやらサナも着いたようだ。振り返ると走ってきたからか、肩で息をしている。

「大丈夫。久しぶりのミヤトだから町を見ているだけで良い時間つぶしになったよ。それに約束の時間にはぴったりだ。サナの方こそ大丈夫か？ 息が切れてるようにみえるが……」

私の心配に笑顔で大丈夫と返してくれる。

「近くのお店を予約してあるから、早速行こうよ」

確かに今日はあまり時間の余裕が無いし、まだ少し寒い。早めにレストランに向かう方が良いだろう。

「分かった。案内よろしく」

うん。と短く答えてサナはこちらに手を差しのばしてきた。

少し顔が熱くなるが、恥ずかしがっている場合ではないな。男の尊厳がかかっている。照れ隠しのほほをかくのを必死に抑えて、彼女の手をとった。

柔らかくて暖かい。少し心臓の鼓動が速くなるのを感じる。

田口軍曹のことが笑えないな。と内心で苦笑いをしてしまった。

「どうしたの？」

本当に宮野大將なみか、それ以上に私のことがよく分かる。

「いや、なんでもないよ。ちょっと思い出し笑いをしてしまっただけだ」

別に嘘じゃ無い。嘘をつく必要も無いが、照れくさかったのでごまかしたかっただけだ。

3分ほど歩くと彼女が予約した店に到着した。

「ここは初めて来るな。どういう店なんだ？」

「最近出来たお店だよ。何か各国の名物料理を集めてるんだって。キャッチフレーズは確か、（卓上のぷち旅行）だったかな？ 面白そうでしょ？」

なるほど、面白そうだ。外の看板を見ると確かにいろいろなメニューが書いてある。久しぶりに基地の食堂以外の外食となるので、自

ずと期待が高まる。

「確かにこれは何かがあるか楽しみだな」

扉を開けて中に入ると、いろいろな香りがした。

肉を焼く香ばしい香りや、ニンニクを炒めた香り、ハーブ類のさわやかな香りに、甘い果物やトマト等の野菜の香りもする。棚にはインターネットとして各国の変わった食材が飾られて、何ともカオスな空間になっている。確かに各国の名物料理を色々集めていると宣伝するだけはある。

店員が予約席に案内してくれて、二人が向かい合わせになる形で席に着く。

二人ともが店長のおすすめディナーを注文して雑談を始めた。

「店の中は暖かいな。こっちは3月だとまだ少し寒いんだな」

「キーナ市は年中暖かいから羨ましいよ。私もそっち勤務が良かったなー」

「中央司令部勤務つてのは十分すごいことなんだけどな。あそこはエリートしかとらない所だったはず」

もしくは、何か一芸に優れている者か。彼女の場合はそう。

「私はやっぱり耳の良さでとられたんだろうね。昔は変わった子に見られるからあんまり好きじゃ無かったんだけど」

耳の良さと勘の良さで不思議な子扱いされても仕方ないだろう。何を考えているか、隠し事があるとか、そういうのがほとんど見抜かれるのだ。普通の人にとってみれば最初は面白いと思うかもしれないが、積み重ねられると怖くなる。そのためか小さい頃は、良く人に避けられて友達が少なかったとか。

「最初に会った時は隠していたからな。部隊メンバーとのことで相談を持ちかけたら、やけに勘が良くてまさかとは思ったけど、その通りだったと知った時は少し驚いたよ」

「いきなり大まじめな顔をして（君には人の心を読む力があるのか？）って聞いてくるんだもん。隠してるつもりだったのにびっくりしちゃった」

軽く笑いながら昔を思い出しているようだ。その声に悲しさの響きはなかったので安心する。

「今考えるとデリカシーが無かったかもな」

「ううん、おかげでこうやっていられるんだし。ありがとう」

満面の笑みに思わず照れてしまい頬をかいてしまう。

「龍ちゃんの恥ずかしくなると頬かく癖治らないね」

楽しそうに笑われてしまった。宮野大将もそうだが、私はサナにも勝てる気がしない。話がそれてしまったがサナがまた話題をもとに戻した。

「声の調子と表情で何となく分かるって言ったら、その後何度も教えてくれ！ って頼み込んで来るんだもん。それはもう本当に驚いたよ？ 小さい頃はみんな気味が悪いって言うから隠してたのに、龍ちゃんだけは、バレた後も一緒にいた間ずっと怖がらなかった。それに今もこんな私を好きでいてくれる。本当にありがと」

サナはこんなことを言っていて恥ずかしくならないのだろうか？ 彼女から教えられた声の調子や表情を読みとく方法からは、特にそんな様子は感じられない……こちらが恥ずかしくて気づけないだけかもしれないけど。

「そこまで言われると、さすがに、その何だ？ ……照れるな」

「いつもは気を張ってるんだから、こんな時くらいは遠慮無く照れちゃいなよー。それにそんな龍ちゃんはかわいいよ？」

ちよつとからかわれているが、悪い気はしない。同じからかいでも宮野大将からのからかいよりも遙かにかわいげがあつて良いし、そして何よりも自分に向けられた分かりやすい好意だ。それを悪いと思うはずが無い。

しばし、料理が来るまでそんなお喋りを楽しんだ。

前菜は長細いバケットと呼ばれるパンを輪切りにした物の上に、細切れになったトマトとツナを乗せて、レモンとオリーブオイルそして塩こしょうがかけられた物と、素揚げされた力ボチャに乾燥ハーブ類と塩こしょうがかけられていた物だった。シンプルながら絶妙

な味付けがされており、おいしく頂けた。時間があつたら今度やつてみよう。

そして、いつ切り出すか悩んでいた松平のことについて、相談にのつてもらつことを決心した。せつかくの食事の時間で申し訳ないが、少し相談事に時間を貰おう。

「サナ、急ですまないが相談がある」

突然の頼みにも関わらずサナは快く受け入れてくれた。

「うん、いつくるかなー？　って待ってたよ。龍ちゃん今日は松平さんの所に行つたから、きつとそのことだよな？」

サナの言つた通りだったので、頷いて正解だ。と返す。

「少し松平が人間不信気味でな。何というか彼が特殊すぎるせいなんだが」

彼女なら言いふらすことはしないので、今日の松平との話を説明する。

「そつかー。何か少し前から無理してる気がしてたんだけど、そんな事情があつたんだね」

「どうにかしてやりたいとは思っているんだが、なかなか解決策が思いつかなくてね。サナの力が借りたい」

頭を下げて頼むと、サナの方が慌てて頭を上げるように言ってきた。「もう、龍ちゃんの頼みならそこまでしなくても断らないよ？　それに松平さんのためだしね。そうだなあ、んじゃいくつか確認しながら考えてみよつか」

本当にこの子には助けられる。

「きつとそういうスパイの人たちって段々と親密になっていくもんだよね？」

「過程はともかく、親密になって秘密を聞き出すのが基本的な手口だな」

「それじゃあ、最初の接触はどうするんだろ？」

スパイと情報源との最初の接点か。

「良くあるのはパーティとかで接触するとかか？　あそこまでの大

企業だ。いろいろな所との付き合いでそういった物を催すと聞いたことがある。そういうところにスパイが参加するというのはあるかもしれないな」

「松平さんはあまりそういう所に参加しない気がするけど。パーティとかじゃなくて、学会とかシンポジウムとかには参加してるって聞いたから、そっちかもしれないね。それだったら、同じ研究をしているんですよ。って感じで話しかけやすくない？」

なるほど、それだと確かに同じ思考を持つ人間として偽れるから、近づきやすいか。

「なるほど。確かにあってもおかしくはない。基本的に学会やシンポジウムはオープンな物が多いからな」

「でしょ？ となると、多分松平さんはそういう所で新しい出会いを求めちゃうと、その気持ちにつけ込まれるってことだね」

そう。だからこそ、彼が特殊な妄言癖を身につけてしまった。

「となるとき、すごく簡単な答えになっちゃうんだけど、良い？」何か思いついたのだろうか？ 少し心配そうな顔をしているが大丈夫だ。今は少しでも解決策のヒントが欲しい。

「かまわない。教えてくれ」

「うんとね、私達が自分のよく知っている人を紹介すれば良いと思うんだ」

少しぼかんとしてしまった。ああ、なるほど。そんな簡単なことで良かったのか。

「相談して良かった。ありがとう」

思わず頭を下げてしまった。

「え？ こんなんで本当に良いの？ 龍ちゃんなら思いついてる。って思ったよ」

少し驚いたように手をぱたぱた振っている。そう、こんなのできつと良いはずだ。完全に素の状態まで侵し始めた彼の特殊性癖に合わせられるかどうかは別にして、少なくとも私達の知り合いでスパイをやっている人間はいない。

というか、いたら国家の国防上大問題だ。ああ、何でこんなことに気付かなかったのだろう。

「ちよつと気合い入れすぎて考え過ぎちゃったのかな？」

恥ずかしいことにまさにその言葉の通りだった。

私は近づいて来る人間を手当たり次第に嘘発見器で検証していくと
か考えていたのだ。

「残念ながら、そうみたいだ。軍の作戦指揮官が聞いてあきれるな」
自嘲気味に笑いながら答えると、逆にはにかんだ笑顔を返された。

「大丈夫。だつてちゃんと自分では分からないから私に相談したんでしょ？ 指揮官だつて人間だもん。分からないことはあるよ。大事なのは分からないことを、分からないまま進めるんじゃない、誰かに相談してでも物事を解決しようとするんだよ。ね？」

そしてはにかんだ笑顔のまま頭を撫でられる。それに対して、また頬をかく癖が出てしまった。

そんな私の様子にクスクスと笑いながら、サナが今回の相談に評価を下してくれた。

「大変よく出来ました。松平さんのためにもがんばろうね龍ちゃん」
やっぱり君と一緒にいれて良かった。2年前の私よ。良く勇気をふりしぼつて告白した。

続けて出された食事も絶品で、最終電車の時刻まで楽しいお喋りの時間が続いた。

終電のために9時頃に店を出たのだが、この時間になつてもトラックが走っている。随分遅くまでご苦労様だ。

「気のせいかも知れないが、大型トラックがかなり走ってないか？」
「そうだね。ここ数ヶ月本当に多いよ。ただ、たまりに何か変な感じがするんだ。何が変なのかはよく分からないんだけど」
「どういうことだろうか？ 彼女は何を感じ取っているのだろう？」

「ごめん。そんな心配そんな顔しないで。気のせいかも知れないし、ほら、同じトラックでも車種とか積んでるもので音変わっちゃうし、石油が動力源なものかなり少ないけど走ってるしね。何が変なのか

分かったらすぐ伝えるよ」

「分かった。何か分かったら頼むよ」

店から地下リニアの改札口までの道のりはお互い無言で歩いていった。

言葉がなくても分かることがあるというのと、カッコつけすぎだが、お互いに口を閉ざしているのには理由がある。

次の日も互いに別の遠い所で、仕事がある。その仕事に支障をきたしてまで、もうちょっと一緒にいたい。と言うのは大人として良くない。

それに私も責任ある立場の人間だ。部下に示しをつけなくてはならない。

だからこそ、お喋りはしない。お喋りは確かに楽しいが、時間が過ぎるのが早過ぎる。

無言で体感時間を引き延ばして、少しでも一緒にいる感覚を楽しむのだ。

サナの方もそれを分かってくれている。本当に気の利く子だ。

ただ、それでも別れの時間はやってきて、改札口で別れの挨拶をする。

「また、こっちに来るときは連絡する」

「うん、待ってるよ。おやすみ」

「おやすみ」

繋いだ手を離して改札口を通る。

きつと見えなくなるまで立っているんだろつなと思って、ホームに通じる階段を降りる前に振り返ってみると。

「いない……まあ良いか」

ため息をつこうとした瞬間に柱の影からひょっこり現れて手を振ってきた。

どつきりに成功したと思っているのだろうか、楽しそうな笑顔で笑っている。

「やっぱり適わないなあ」

最後に素敵な悪戯をされて、私のミヤト出張は終わった。

第九章「訓練生卒業」(前書き)

第八章の最後に追加があります。以前八章を読んだ方はお手数ですがお戻りください。

第九章「訓練生卒業」

第九章「訓練生卒業」

翌日、菱田重工からの納品予定書の確認をとっていたら宮野大将から極秘回線を使った通信が入った。

「おう！ 坂本元気にやってるか？」

「相変わらず極秘回線で発せられる挨拶じゃないですね」

いつものことなので、最近はそこについてはあまり気にならなくなってきたが、他の所に連絡する時はどうしているのだろうかこの人は。

「細かいことは気にするな。で、ここで早速質問だ」

宮野大将が言いたいことは予想出来ているので、こちらから先に言っただけで済ませたが、少し遅れて同じタイミングで声が被るようになってしまった。

「松平のところには行ったか？」 「ですよね？」

私が声を被せたことに宮野大将は一瞬驚いて、笑い始めた。

「その調子だと、ちゃんとやれたみたいだな？」

「もちろんですよ。輸送品の偽装も発注書や納品書などの書類も偽造してきました」

もし、昨日行ってなかったら大変なことになっていたな。行かなかつたら、どれだけでもやられていたことか。

「なんだ。せっかく教育的指導でもしてやろうかと思ったのだが、うまくやりおったか」

嫌みに近いことを言っただけだが声は嬉しそうだ。

こちらにも我慢気味に精一杯の演技がかった声で攻撃をする。

「ふふ、男子三日会わざれば刮目してみよ。って所でしようかね」

「言うようになったな。まだケツの青いひよっこ大佐め」

その反撃に冗談のカウンターを合わせる。今日こそは負けませんよ。

「ケツが青くてひよつこでも、あなたの弟子ですからね。そこらの親鳥くらいは軽く超えていますよ?」

「フハハハ、本当に言うようになったな。まっ、後はそれをちゃんとお偉いさんの前で言えれば一人前だ。ではそろそろ本題に入るか」

いつも通りの宮野大将との愉快的問答が終わり、本気になった声で本題に入る。

「で、今回はどんな悪いニュースを持ってきたんですか?」

わざわざ極秘回線を使っているんだ。基本的に悪いニュースのやりとりが多い。ごくまれにからかうためだけに使われることもあるんだが……さすがに国境資源会議が近い緊迫した時にそんなことをする人では無い。

「悪いニュースとは断定出来ないが、多分悪いニュースになるかもしれん」

いつもの歯切れの良さが無い。まだ確定していない情報なのだろうか。

「諜報部からの知らせだが、廃棄予定で放置されている大型艦船が行方不明になっている事件を知っているか?」

全く聞いたことが無い。素直にここは話を聞きだすことにする。

「いえ、初耳です。廃棄されるような艦船が行方不明になることが問題になるのですか? 資源回収が出来なくて困るとい話ではないですよ?」

「もちろんだ。ちなみに廃棄艦船が行方不明になっている事件は我が国では無いぞ? ヤポネから海を隔てて東の方にある石油産出国の数力国だ」

そんなことになっているとは知らなかった。しかし、石油産出国となると少しきな臭くなってきた。

「なるほど。ヤポネを標的とした多くの団体が潜んでいる所ですか。確かにそれは悪いニュースかもしれないですね」

「ただな、分からないのが無くなっているのが軍艦ではなく、大型

のタンカーや旅客船なのだよ。潜入中の作業員によると、廃棄にも金がかかるから、無くなったことに対しては元所有者達も大喜びしているそうだ。だが、どうにも変だと思わないか？」

石油や天然ガスを運ぶための大型艦船や旅客船か。確かにFTE技術の普及によりタンカーで輸送する化石燃料類の需要がほとんど無くなり、タンカーの廃棄は増えていると聞いているし、旅客船の方もFTE技術が使われた物に置き換わりつつあるので、多少廃棄は出ていると思う。

廃棄艦船を資源として各部品をばらして販売すれば、そこそこの活動資金にはなるのだが、心配しているのはそれではないだろう。

「戦闘力自体はない艦船ばかりですね。共通しているのは……先ほどの説明だと大きいということだけですか？」

「その通りだ。小型艦船には手がつけられていないらしい。多少の札束になるとは言え、大金に手を出して小金は取らない連中という訳ではあるまい？ むしろ金目当てなら盗みやすい小型艦船の方が安全なはずだ。わざわざ大型の艦船を盗めば、それだけ目立ちやすくなる。何か臭う気はするんだな……」

なるほど。宮野大将の歯切れが悪い訳だ。事件を解くための情報が足りていない。

「確かに悪いニュースといえは悪いニュースですが、これではどうすれば良いか分からないですね。宮野大将が言うように何か裏がありそうと言えはありそうですが」

「だから言ったろ？ 断定ができません。だからこそだ、頭の隅にしっかり置いておけ。こういう時期だ。警戒し過ぎてし過ぎることはない」

宮野大将の言う通りだ。寡兵で勝利するには相手の油断を突かなくてはならない。

少数の敵でも、全く意識していない方法で攻められると、対処までに時間がかかり、甚大な被害を受けてしまうことが十分にありえる。まして、それが大部隊なら尚更だ。

「了解しました。情報感謝します」

「こつちでも色々調べておくが、何か思いついたらすぐに連絡しろ。こんなもんの予測は当たらない方が良くいんだがな。矛盾しているかもしれないが、我が輩や君の考えが、外れることを期待しているよ」
宮野大将の少し不安な声というのも珍しい。それだけ困惑しているのだろう。

「んじゃ、通信終了だ。またな」

「失礼します」

宮野大将との通信も終わり、書類仕事の続きを片付けることにする。午後に菱田重工からの第一便が到着するはずだ。今日は迂回路でやってきた二世代型の試験用装備なので、オヤジさんを始め整備班は大変だろう。

時計を見ると1030を表示していた。予定を見るとこの日は候補生達の基礎戦略行動が1100から入っている。

大層な名前がついているが、実際のところは指揮官の命令に合わせて動くことが出来るかの訓練だ。

非常に基礎的な物だが、他の基地に引き渡す卒業前に、どうしても確認しなくてはならない。

そんな基礎も出来ないのであれば、せつかく育てたパイロットが犬死にってしまうからだ。

後退すべきに後退し、前進すべきに前進する。

指揮による前進の結果、部下が死ぬこともあるだろう。ただ、それがしつかりとした作戦ならば犬死にはない。残念ながら名誉の戦死というしかない。

しかし、作戦の流れに反して死なれてしまつては、まさしく犬死にだ。勝利のために立てられた計略全てが無意味な物となつてしまう。だからこそ、この基礎的な訓練が最後にある。

もちろん、指揮官の立てた作戦がどうしようもないものだったら、部下が死んだ原因は指揮官だ。

死んだ理由を彼らのせいにはしないためにも。いや、死なせないため

にも、パイロット候補生達の教育を担っている一人として、指揮官の一人として、今日の訓練も手を抜くことは許されない。気合いを入れて最後の訓練を行うためにガレージに赴く。

少し早めにガレージに着くと田口軍曹が既に待っていた。互いに敬礼をして挨拶をすませる。

「田口軍曹、今日で候補生達の訓練も最後か」

「肯定です。来月の頭には異動先が決まるのですよね？」

「そうだ。今日は3月20日か。早いものだな」

一年に及ぶパイロット訓練が終わる。訓練のある日は賑やかだったガレージも次の候補生が入ってくるまで、少し静かになりそうだ。

「寂しくなるな軍曹」

「そうですね。ですが、それよりも嬉しさの方が強いです。彼らは立派に育ってくれました」

少し鼻声になっているように聞こえた。これは後で泣き出すかもしれない。

「軍曹、私が小学校・中学校の頃、何故卒業式で教師は泣くのだろう？ と不思議に思ったことがあるのだが、君を見ていてその疑問が解決しそうだ。君は実に良い教官だと思う」

訓練過程の終了通知がなされる時に、我慢しないで泣いても良いように、先に予防線を張っておく。

そんな私の予防線に軍曹は照れた笑いを返してくれている。

やはり少しでも命を落とす可能性のある戦場よりも、教官として活躍してもらいたいと思う。彼にはもっと多くの者を育てて欲しい。以前考えていたことを今伝えるか。

「田口軍曹。前線に出るパイロットを止めて、本格的に教官としてやっていけないか？ 君にはこれからも若いパイロットを育てて欲しい」

「ほ……本気でおっしゃっていますか？」

驚きのあまり上手く舌が回っていないし、軍曹が目を丸くしてこちら

らを見ている。相当驚いているようだ。

「本気だ。先ほどの言葉も含めて全て私の本心だ。引き受けてくれないか？」

田口軍曹は少し考え込むように腕を組んで下を向いてしまった。

私も田口軍曹の決断に息をのむ。

「分かりました。私でよろしければ、これから先も私の持てる全てを次の世代に伝えていきます」

「助かる。ありがとう」

お礼の意味を込めて手を握る。彼と起こした恋騒ぎの時とは逆の構図だ。

その時と心境が随分違って笑ってしまふ。

「では軍曹。暫定教官最後の仕事だ。ともにがんばるとしよう」

「イエッサー」

軍曹からはいつもより気合いの入った返事が返ってきた。

訓練の時間になり、候補生達が集まってきた。田口軍曹の号令で候補生全員が気をつけの体勢から休めの体勢に変わった。

そして、私の合図で最後の訓練が始まる。

「候補生の諸君。今まで一年よく頑張ってきた。なんと今年は候補生50人全てが脱落せずにこの最終訓練まで残っている。非常に喜ばしいことだ。ただ、最後まで気を抜くな。戦場ではちよつとした気の緩みが命取りだ」

ここで一旦話すのを止めて、大きく息を吸い込み声量を大きくする。

「諸君らが死ぬこと無く、退官する最後の日まで生き延びる力を持っていることを今日！今ここで！私に示せ！」

「ッサー！イエッサー！」

私の挨拶にとても声の大きい揃った良い返事が返ってきた。どうやら心配することは無さそうだ。

「では、軍曹。後は任せたぞ。私は一足先に司令室に向かう」

「了解しました。候補生諸君それぞれの機体に入り込み合図を待て。

よし、行ってこい！」

「サー！イエッサー！」

田口軍曹の合図により候補生達は各々の機体に向かって走っていった。

ガレージを後にして司令室に向かう。田口軍曹にはその間、機体の搭乗時間や準備時間などを計測してもらっている。

司令室に到着すると橋をはじめとするオペレーターの準備が完了しているようだった。こちらも最終確認だ。

「みんな準備は出来ているか？」

「肯定です。いつでもどうぞ」

目を閉じながら、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。クリアになった頭で、マイクを手に取り声を張り上げる。

「パイロット訓練過程、最終単位、基礎戦略訓練開始。全機出撃！」
地上にあるガレージから候補生達の機体が次々に出てきては飛翔する。

空に上がった機体が、5機1小隊制でそれぞれの小隊ごとに横並びのフォーメーションをとる。

さすがに50機によるマップスの整列となると壮観だ。

現在の部隊単位のだが、基本的に5機1小隊。2小隊が集まり中隊、5中隊が集まり大隊となっている。

まずはこの50機を1大隊として運用する。

「ビックハットより訓練大隊、指定ポイントへ速度200km/hで前進」

オペレーターの橋が復唱をして、全機が動き出す。

目立った大きな隊列の乱れは見られない。出だしは順調だ。

全機が指定ポイントに到達した。次は後退だ。

「ビックハットより訓練大隊、次の指定ポイントに同速度で後退」
機体を正面に向けたままバックブリストで後退を始める。

これも良し。次は中隊への分散と合流だ。

まずは分散の合図を出す。

「ビックハットより訓練大隊、5中隊に分散。分散後各々の指定ポイントに向かえ」

各自が事前に通知されていた中隊通りに分散する。特に間違いも無く全員指定通りに動いている。

「ビックハットより全中隊、指定ポイントで合流して大隊を組織せよ」

合流の方も何の問題なく、50機が集まる。時間も悪くない。

今度は一気に小隊まで分散し、層構造を作る少し難しい陣形を作る。

「ビックハットより訓練大隊、指定された集団陣形をとれ。（トライ・レイヤー）」

横に200mの間隔で、上下の間隔は500mで、下段から3-3-4の数で小隊が分散する。号令からわずか5秒程度で陣形が組まれる悪くない早さだ。

このような訓練が、みっちり1時間。ひたすら私の号令に従って候補生が分散したり、合流したり、陣形をとることが続いた。

長い時間をかけても彼らの行動精度はほとんど落ちなかった。本当に今年の新人は良いのが育った。

田口軍曹が持ってきた待機状態にいたるまでの時間も規定範囲内だった。

判定結果はもちろん合格だ。手元にある候補生達の資料に訓練過程終了の印を押す。この1年、実によく頑張ってくれた。

帰還した候補生全員をホールに呼び出して、訓練課程修了の証明書と資料を手渡し、訓練課程修了の挨拶を行う。

「諸君、1年間の訓練過程をこれにて終了する。今から君たちはマップスの正規パイロットだ。これから多くの困難が君たちを待ち受けているかも知れない」

私の頃とは違って、戦闘時に対マップス戦が多くなっている。一方的な戦闘はほとんど起こりえないだろう。だからこそ、彼らの覚悟

を問う必要がある。

「その困難はこの1年間の訓練が可愛く思えてしまうことだろう。だが、忘れるな。君たちはこの国を守る力を手に入れた。君たちの力でその困難を取り除かなければ、力なき君たちの親、兄弟、友、恋人、全ての国民が君たち以上の悲しみを背負うことになる。君たちは彼らを守るためにどんな困難にも立ち向かう覚悟はあるか？」候補生50人が一斉に敬礼のポーズを取る

「サー！ イエッサー！」

気合いの入った声が部屋に響き渡る。この心構えを忘れないで欲しい。

「良い返事だ！ 諸君、おめでとう」

私が拍手をし始めると、教官役であった軍曹も拍手で続いてくれた。顔を見てみると涙が頬を伝っているように見える。

指摘すると「汗です」と返されると予想できるので、あえてつつこまないでおく。

そして、予想した通り感極まって涙を流してしまった軍曹を、新人パイロット達を取り囲みだして胸上げし始めた。何とも体育会系的なノリである。

各々が憎まれ口を叩いてはいるものの、顔と声の調子は笑顔そのものだ。

終わりよければ全て良しか、のど元過ぎればなんとやら。と言ったところだろうか。

そんな野球リーグで優勝したチームのような光景を微笑ましく思いながら眺める。

胸上げが終わると軍曹は袖で涙を拭いて、おそらく彼らの前ではしたことがないであろう満面の笑みを浮かべた。

「よし、お前ら！ 今夜は俺のおごりだ！ 精一杯楽しむぞ！」

普段見ない顔で、普段発せられるはずの無い言葉が飛び出して、新人達はポカンとしたが、隣にいる者と確認をとりあってざわざわすると、誰かが叫び出した。

「イヤッホウ！ 今夜は飲みまくるぞ！」
その叫びに続けて一斉に雄叫びが上がり始める。
どうやらこの盛り上がりは当分収まりそうに無い。
後は軍曹に任せて食事でもしてこよう。
これは、今夜は大変なことになりそうだな。と軍曹の無事を祈りながら、独り言を呟いてその場を後にした。

第十章「その男変態につき」(前書き)

今回は新兵器をちらっと紹介します。

第十章「その男変態につき」

第十章「その男変態につき」

最終訓練から5日後、菱田重工からの移送が全て終わった。おかげでヤポネ基地は地下ガレージと地上ガレージが全て埋まってしまうている。

そんなここ数日間の話になる。

ヤポネ基地は今やちよつとした博物館状態だ。軍事マニアがやってきたら狂喜乱舞しそうなカオス空間になっている。

しかも、移送が終わってから連日に渡り、ジャンクパーツを使ってオヤジさんと松平がノリノリで新しい物を作り始めているので余計かさばっている状態だ。

新しい試作品と搬入された物からいくつか取り上げて、どういう時に使えるか考えるために、ここ数日を反芻してみる。

まず一つ目に近接武器御用達の最新オプションパーツである回収用ワイヤーだったのだが、回収以外の使い道をオヤジさんと松平が一緒に考案して、銃剣用の接続部分をワイヤーの射出装置に改造することに成功した。

いくつかの試作品を携えて試験したときは近接を得意とするパイロット達が楽しそうにブレードやダガーを射出しては引き戻して遊んでいた。中にはブーメランのように弧を描きながら飛ばして引き戻す者もいる。射程距離はざっと50m。回収速度は1秒を切るか切らないか。格闘武器の距離では破格で不意打ちにはもってこいだ。もちろん、近接武器を銃器から外した後も、人間で言えば袖に当たる部分に新しく増設されているワイヤーが収納されている小型の箱、ワイヤーボックスと繋げれば回収機能は維持出来る。

おかげで近接時の戦術の幅が広がった。

楽しそうに近接武器を飛ばしているパイロット達の様子を見て、調

子に乗った二人は、もつと銃器に色々つけようと言い出した。

近接武器の距離延長はやったから、次は最高のゼロ距離武器だ！

とコンセプトを決めて、アイデアを得るために模擬戦のデータを見返すと、近距離時における銃器の鈍器化について討論を始めた。

その結果、何がどう転んだのかはさっぱり分からないのだが、パイバンカー型の銃剣の試作を始めたのだ。

何故そうなったと二人に聞いたら「男のロマン」と答えられたのでそれ以上言及はしなかった。

一本目はただ杭を打ち込むだけだったのだが、これではつまらない！ と両者が呼応して、ただ単に杭を打ち込むだけでは無く、炸裂火薬を撃ち込んだところに送り込み、装甲の内側から爆破して敵を破壊する謎の兵器が出来てしまった。

「これぞロマン！」とオヤジさんはご満悦だ。

確かに威力としては素晴らしいのだが、炸裂火薬を仕込んだ特殊杭なので、リロードが必要になり、わざわざ他の銃器の弾丸を削つてまで予備弾薬を大量に所持する必要は無いと判断する者も現れ、基地のパイロット達からは賛否両論だった。

これに対しては改善の余地有り二人は今日も研究をしている。

逆にみんな困惑したのがハイブリッドライフル開発コード：「ブリユーナク」。稲妻のような槍。開発コードの由来はその威力と弾丸の見た目からだそうだ。

以前この基地で試験した化け物ライフルだ。銃の全長はマップスより大きい6m。普段は銃身が3段階に折りたたまれて長さは3mほどだ。何とか肩のハードポイントにつけることが出来るが、大きすぎて照準を安定させるために両手を使わなくてはならない。

展開すると形は歩兵が使っていた対物ライフルのような造形をしている。

折りたたんでいるときは、1段目にグリップがあり手に持つ部分。

2段目に、やたら大きい2mくらいある拳銃のシリンダー（回転式弾倉）のような物が弾倉の上についている部分。

一体何なのかと聞いたら、粒子コンデンサーと答えられた。ちなみにコンデンサーの癖に回転する。その形と様子からリボルバーとその部分は呼ばれているそうだ。

3段目に銃身部分^{バレル}が折りたたまれている。3mとちょっと長い。

一応ライフルの形をしてはいるが規格外だ。

そして、何より驚くのが外付けのジェネレーターが必要なこと。

ちなみにこの外付けジェネレーターが採用される前の試験段階ではチャージ時に他の行動が出来なくなるほどのエネルギーが持つて行かれた。

その欠点を払拭するために専用の外付けのジェネレーターを開発したそうだ。

おかげである程度動くことは出来るようになったが、あくまで動けるだけだ。

接地して止まらない限り、浮遊装甲や粒子シールドを展開できるほどの余裕が無い。

どうやら専用ジェネレーターの供給量以上に粒子を必要とし、本体のジェネレーターからも粒子をとるらしい。恐ろしい燃費だ。

燃費の悪さに隠れて見落としてはいけないのが、何と専用の弾丸を使わないといけないこと。通常弾頭だと弾が特殊な処理に耐えられないそうだ。おかげで運用コストもバカみたいに高い。

味方に敵からの防御をもらって、長々としたチャージの末にようやく一発の弾丸が発射出来る。これだけ言うとなだの欠陥兵器だ。ただし、威力だけはどんな兵器よりも高いことは試験で試し撃ちをして見ている。

推奨火力で発射した時は試験用の装甲板が何枚も吹き飛ばされて、溶けた。その時は空中に向けて発射したので何も無かったが、水平に撃っていたらどうなっていたか想像もしたくない。事前に説明で注意しろ。と言われたときは疑問に思ったが、撃たれた結果を見て納得した。

マップスにぶつけければ、おそらく浮遊装甲を展開していても吹き飛

ばされる威力だ。

防ぐ方法は弾丸を浮遊装甲に当てて出来る一瞬の停滞時間に全速で射線から大きく逃げる事。

ただし、そんな動きはこの武器の特徴を知らない普通のパイロットには出来ない。

弾丸が光っていて大きく見えることくらいしか、ロングレンジライフルの弾丸と見た目は大きく変わらないのに、その一瞬の輝きで防御を捨てる判断を出来る人間がいるとは思えないのだ。

当たりさえすれば、相手に防がれようが直撃しようが撃墜出来る威力である。

逆に言えば当たらなければ全く意味が無いどころか、非常に不利な状況で戦わなくてはならない。

そんな当たりさえすれば、最強の遠距離武器という非常にロマンあふれた武器になっている。

現存しているのは、このヤポネ基地に運ばれた3丁と首都にある菱田重工の工場で保管している2丁の計5丁だそうだ。サイズが大きすぎて運びきれなかったらしい。

正直言おう。使い所が本当に分からない。旧式兵器にはもちろんマッブスに対しても過剰火力だ。

しかも、高速で移動できる機体を正確に直撃させる腕が必要だ。このライフルが何を目的に採用されるのか松平に聞くと。

「一つは、まだ見ぬ新兵器に対する万が一のための保険だね」と答えられた。以前言っていた大型兵器用ということか？

まだ実際に見たことがないので想像がしにくい。ただ、もう一つは耳打ちで小さな声で伝えられた。

「もう一つは敵基地の破壊。何というか、えぐれるよ？」

何か恐ろしい単語を口走った。

いや、確かに施設への攻撃なら動かないから当たりやすいが、表現がおかしい。爆破とかではなく、えぐれる？

「一応あれリミッターかけてあるからね？ 本気出したらそれくら

いしちやえるかも。理論上だから実際にやったことは無いんだけどね」

ニコニコしながらとんでもないことを口にしてきた。

リミッターありで今の過剰火力だと？ 冗談だろ？ いや、松平は兵器に関して不思議な例えをするが、冗談をいう人間では無い。本気だ。

というかこれは攻城兵器だった訳か。ようやく納得が行った。

そして最後にもう一つと付け加えられた。

この自慢げな顔をされたら言うことは大体予想がついてしまう。

「僕の趣味。ロマン武器作ってみたかったんだよね。チャージから射撃までの発射シーケンスって最高に燃えない？」

やっぱりか。松平らしくて非常に分かりやすい理由だ。マップスが人型になった理由を思い出して苦笑いする。ただ、彼の作った物は思わぬところで役に立つことになるかもしれないので、絶対にバカにしない。

攻城兵器以外の役割で、私はこのハイブリッドドライブの使い道に悩んでいたのだが、この基地に所属するパイロット2名が何故か興味を持ってしまった。

ガンドック5の石山と、めでたく新人パイロットとなり、キーナ基地に配属が決まった元クロスボウ1の武田だ。

その破壊力とコンセプトにどうやら二人とも魅せられたらしい。

二人に言わせると、この極限まで一撃にかける感じがたまらないそうだ。

実機による訓練では、専用弾ではなく、練習用のペイント弾による発射までの間隔と弾道の感覚を掴む練習をしている。

シミュレーターでは松平にデータを作って貰って、小隊メンバーを巻き込みながら、発射までの護衛などの特別訓練を始めるくらいはまっている。

シミュレーターに付き合った小隊長の犬塚に、小隊での使い勝手を聞いたら、あそこまで緊張する武器はありません。と答えられた。

私も自分の部隊にあれを使う奴がいると考えると頼もしい反面、すごく恐ろしい。

防御力も回避能力も最低まで下がった味方を守るのは非常に骨が折れるし、何よりも撃墜されてしまうのではないか？ というプレッシャーが凄いだろう。

そして何よりもその効果範囲。チャージ方法にもよるが、ちょっと洒落にならない。下手に射線に近づくと巻き込まれる。

ただ、道具というのは使い方次第だ。常に頭の中の選択肢として残しておこう。

自分が使える。という部下が二人もいるのだ。ならそれを活用する方法を考えるのが私の仕事でもある。

ちなみに、このスナイパー二人が松平に感謝した言葉は何だったと思う？

使うと言った二人にはこのハイブリッドライフルの最後の開発理由は伝えてある。

人によつては悪口だが、ある意味最大のほめ言葉。

「「ありがとう変態！」」

その時の松平は少し泣きそうな顔で笑っていた。

「まいったなあ……褒められてるのかなこれ？ どういたしまして？」

その声は少し嬉しそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4762z/>

鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

2011年12月19日00時58分発行